

ザ・ボランティア

神戸からの経過報告

東灘・地域助け合いネットワーク 1年の記録

1996年3月

東灘・地域助け合いネットワーク

00096005708



震災文庫

一

はじめに

この記録は東灘・地域助け合いネットワークの1年の活動をまとめたものです。

「ネットワーク」は地元で高齢者の在宅援助サービスに係わっていたボランティアをリーダーをとって、これらを全国規模のNPO（市民活動団体）の人々が応援するかたちで発足しました。手薄な「在宅」の高齢者に「命の水」を運ぶことから地域との接点を求めてニーズのキャッチに努め、以降情報提供、仮設支援、物資提供バザー、生活支援などの緊急サービスから次第に茶話やかテント、ふれあいセンター運営、ふれあいサロンと地域全般を意識した地域ケアへと活動領域を拡大してきました。

避難所から仮設住まい、恒久住まいの確保へと地域事情が大きく変わる中で、住民の意識もめまぐるしく変わっています。これらに的確に感度よく反応できるのは、ボランティアやリーダーに地元住民が多いからだと思います。ボランティアも時を経るにつれて東灘区民の比率が高くなり、被災の大きかった住民との互いに引き合うような関係が生まれ、活動を継続へと導き、結果として深い信頼を形成しています。

応援ボランティアもそのような地元ボランティアを惜しみなく励まし、自らも実働部隊として参加し、応援・実働・発信と何役もこなしています。この地元ボランティアと応援ボランティアの関係性は被災住民と地元ボランティアの関係にも相通じ、その本質は他者への勇気づけ＜エンカレッジ＞であり、他者の主体性を尊重したく自立への支援＜そのものではないでしょうか。＞

大震災は都市機能、市民生活のみならず被災地のボランティア団体や市民組織にも壊滅的な打撃を与えました。東灘区は92森が損壊判定を受けました。多くの既存の市民組織が被害の全体概要を把握するのには数週間から4～5ヵ月を要し、6ヵ月以上も経って機関会議の開催に至ったところもあります。注目を浴びた130万人を超える救援ボランティアの動きとは対照的であったといえるかもしれません。市民活動団体もいまだ一度日常活動における主体性、自発性の確保が充分なされていたのか、暗黙や慣習も含めて活動に許可や指示がないと動けない仕組みではなかったか、何らかの見直しを必要としているように思われます。

戦後50年に及ぶ市民組織育成策は行政による統制（コントロール）を原理とし、市民活力を蚊帳の外においたがゆえに、取込みか批判かという極端な対応を生みました。この結果多数の市民は関与の意欲を無くしたのではないのでしょうか。

「ネットワーク」は、非常時に生かされる平時の地域助け合いシステムとは何かと考え、ハード、ソフトの地域再生にさまざまな角度から取り組んでいます。多分、他の地域では10年かかっても経験できない地域づくりを数年で体験することになるでし

よう。

この記録は「地域に根ざした市民活動の支援システム形成に関する調査研究」の一環として、奈良、仙台、広島などの地域とならんで「ネットワーク」の誕生と発達のプロセスを3年間にわたり記録します。今年度は地元ボランティア主導で運営した魚崎小学校復興対策本部と、地元組織としてボランティア対応したコープこうべの二つの典型事例の記録を併記することによって「ネットワーク」の活動を客観的に把握しようと思いました。

今後の「ネットワーク」の活動は予測しがたいものもありますが、行政から独立した市民活動団体がかかわる地域づくりを記録したいと思います。これこそは6300人の犠牲に応えるものであり、さらに21世紀の地域社会のモデルになるよう努力したいと考えています。

活動記録作業体制

(神戸地域委員会)

芝崎信子 東灘・地域助け合いネットワーク常任幹事

高砂春美 魚崎小学校復興対策本部・本部長

殿本 弘 わかちあい阪神・代表

中村順子 東灘・地域助け合いネットワーク代表幹事

林 律子 コープ神戸・ボランティアセンター

星野裕志 東灘・地域助け合いネットワーク常任幹事

(事務局)

佐野章二 地域調査計画研究所代表

水越洋子 地域調査計画研究所研究員

(助成財団及び担当者)

笹川平和財団

高田幸詩朗 笹川平和財団副主任研究員

最後に、記録にご協力を頂いた多くのボランティアや関係者の皆さんはじめ普段から「ネットワーク」を支えて頂いている個々人や関係諸団体の皆様、特に私どもを必要とし活動させてくださっている地域の住民の皆様に対し、改めて心から感謝の意を表します。

1996年3月

東灘・地域助け合いネットワーク

代表幹事 中村 順子

活動記録執筆分担者

第1部

第1章 佐野章二、水越洋子

（年表作成：高橋良輔、松村一史）

（統計表&グラフ作成：滝沢めぐみ）

第2章 一井美智子、高橋良輔、鷺池美智子、

（マップ作成：一井美智子、高橋良輔）

第3章 高橋良輔、殿本弘、芝崎信子、武田純子、島敦子、坪光子、橋本倫子

鷺池美智子、太美 京、滝沢めぐみ、原俊子

中村順子、佐野章二、水越洋子

第4章 芝崎信子、中村順子、星野裕志、宮本進（寄稿）、佐野章二、水越洋子

第2部

第1章 高砂晴美、中村順子、林 律子、佐野章二

第2章 高砂晴美

第3章 林 律子

校正 原俊子

全体編集 中村順子、水越洋子

目 次

はじめに

第1部 東灘・地域助け合いネットワークの活動記録(1995.2～1996.1)

第1章 混沌、手探りの1年——東灘・地域助け合いネットワークの活動の推移……1

- 1 1年間の活動の概括——震災救援から地域コミュニティ活動へ……2
 1. 1年間の活動——地元ボランティアを中核に……2
 2. ボランティアの活動内容の件数の推移——救援、生活支援、地域交流活動へ……9
 3. 参加者の変遷——幅広いボランティア層……13
- 2 震災ボランティアを越えて——時期別の活動概況とその問題……16
 1. 第1期／初動期の活動——「在宅」の高齢者支援……16
 2. 第2期／仮設活動期・前期——生活支援・住宅改善・住民交流……19
 3. 第3期／仮設活動期・後期——ボランティアの新たな挑戦……22
 4. 第4期／〔12～1月〕——地域づくりへの助走……24

第2章 ボランティアの世界——アンケート調査と研修から……27

- 1 「豊かな出会い」と「感謝される喜び」——ボランティアの声……27
 1. ボランティアを知ってもらいたい——アンケート調査の目的と内容、方法と回収状況……28
 2. 出会いの感動——アンケート調査結果……30
- 2 「学び」から提案へ——研修におけるボランティアの声……43
 1. 認識・知識・提言・交流——ボランティア研修……43
 2. 活動アイデアの泉——研修におけるボランティアの声……44

第3章 ボランティアがつくる社会——「ネットワーク」その担い手としくみ……51

- 1 ボランティア自由自在——17の活動グループ……51
 1. 初動期を支えた力仕事ボランティア——被災難民を出さない……51
 2. 生活支援活動——ともに生きるということ……54
 3. 仮設住宅ふれあいセンターの活動——コミュニティを産む……57
 4. コミュニティ活動への展開——仮設から一般地域へ……59
 5. ボランティアを支えるボランティア——学び、食べる……61
 6. 「ネットワークの」裏方たち——報われている苦勞……63
- 2 共生社会の担い手として——「ネットワーク」の組織とその運営……67
 1. フラットな作業共同体——組織とボランティアのあり方……67

2. ありがたい地域外からの支援	
——「ネットワーク」を支えるネットワーク	69
3. 地域の内に根ざし外へ展開する——「ネットワーク」の移植と増殖	71
4. パートナリシップを求めて——行政との関係	72
第4章 地域コミュニティをつくる——「ネットワーク」の今後の課題	79
1. さらに広く、さらに深く——ボランティアとコーディネーターのあり方	79
1. 支援される側との人間関係——くじけず、さりげなく	79
2. コーディネーター論——多様性を認める力	82
2. 救命から命・生活の維持へ——震災ボランティアの地域活動モデル試案	84
1. 命の救出期——第1期	84
2. 命の維持期——第2期	86
3. 生活の維持期——第3期	87
3. 新しい地域コミュニティをめざして	
——「ネットワーク」の課題と展開方向	87
1. 4つの活動レベル——これまでの活動展開過程	87
2. それぞれの興味を軸に——「1万人関心メッシュ」の地域づくり	88
3. 確固たる活動理念を——外側から見た「ネットワーク」	89
4. コミュニティづくりを担えるか	
——「ネットワーク」の方向性と体制整備	93

第2部 東灘地域での主な活動団体とその活動内容

第1章 活動の接点を求めて——主な震災ボランティア団体の概況	99
1. 避難所・地域・組織——4つのボランティア団体	99
2. 魚崎小・「ネットワーク」・コープ神戸の接点——委員会の議論から	101
第2章 地縁コミュニティから——魚崎小学校復興対策本部の活動	106
1. 避難所から地域へ——魚崎小学校復興対策本部の活動の概況と経過	106
1. 仮設住宅の現地建設も提案——地域ローラー作戦	106
2. 5タイプのボランティア——活動の分担と共働	107
3. リーダーは地域ボランティア団体から——活動の3段階と経過	108
2. 魚崎モデル——避難所復興対策本部の3段階のモデル概要	114
1. 第1段階：初動対応段階	114
2. 第2段階：専門分化段階	115
3. 第3段階：地域定着段階	115

3	阪神・淡路大震災の体験を今後に生かすための10の提言 ——避難所の体制を中心に……………	116
第3章	ボランティア認知のプロセス——生活協同組合コープこうべの活動……………	120
1	震災被害500億円——物資調達と被災者救援の間で……………	120
1.	神戸市との物資確保協定履行——満身創痍で物資調達へ……………	120
2.	ニーズ待ちを変えられず——ようやく1月26日に窓口……………	121
3.	5つの方法——よいコーディネートの方法は？……………	123
2	ユフ・ボランテアセンターの活動——住吉ボランテアセンターを中心に……………	124
1.	ボランティアの眼から——住吉ボランテアセンターの問題点……………	124
2.	ボランティアが事務局を仕切る——組合員の新しい顔……………	127
3.	絶えず初心にもどる——友愛訪問グループの成長……………	128
4.	95年秋に転機が——活動報告から活動提案へ……………	129

資料編

資料2	ボランティア登録者数の推移……………	131
資料3	活動日報（1995年4月21日分／1996年1月31日分）……………	133
資料4	茶話やかテント関連資料……………	135
資料5	東灘ふれあいセンター交流会の報告（第2回）……………	138
資料6	ふれあいサロン関連資料……………	141
資料7	インターネット・ホームページ関連資料……………	144
資料8	関連新聞記事の切り抜き……………	148

第 1 部

東灘・地域助け合いネットワーク の活動記録(1995年2月~1996年1月)

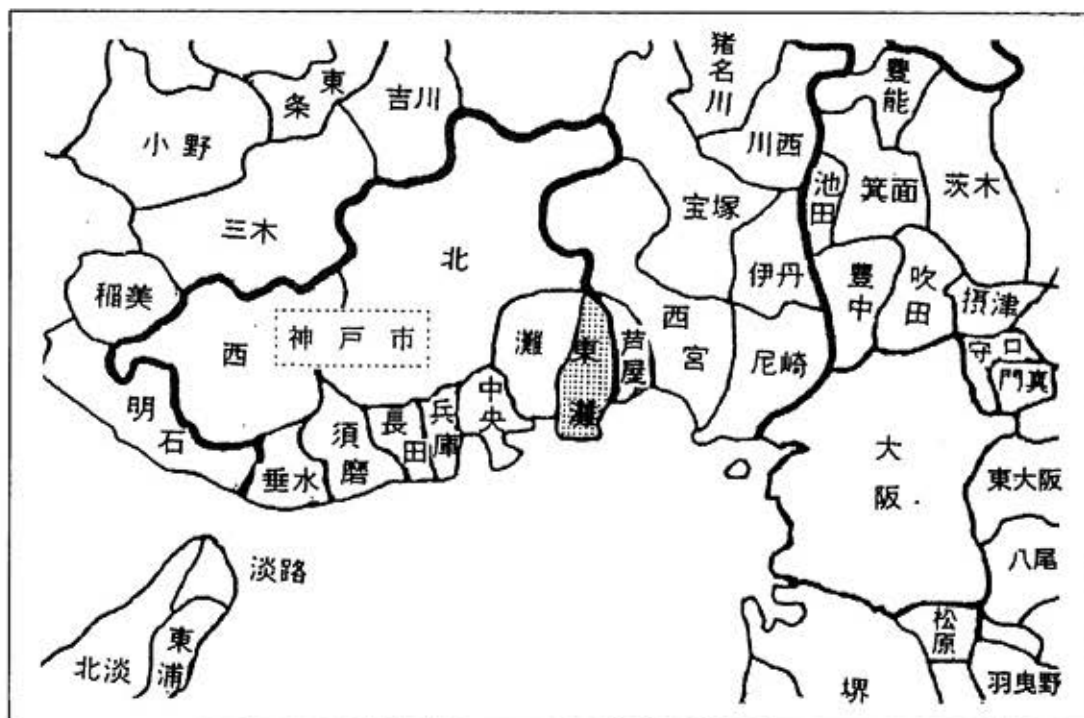
第1章 混沌、手探りの1年——東灘・地域助け合いネットワークの活動の推移

東灘・地域助け合いネットワークが主な活動エリアとしている神戸市東灘区は神戸市の最東部に位置し、芦屋市に隣接している地域である。東灘区の人口は、地震直前の1月1日には191,716人であったが、その年の国勢調査(10月1日)では157,599人と34,117人、17.8%の減少をみた。地震による被害は死者1,461人、建物の全壊33,515戸、半壊17,690戸と極めて大きく、たとえば死者は神戸市の約3分の1(32.3%)、被災地全体の約4分の1(23.1%)を占めている。(資料1参照)

地震の翌日1月18日の避難所数は120カ所、宿泊者数は60,700人で人口の約3分の1(31.7%)を占めた。区内の仮設住宅は3,372戸、障害者・高齢者向けの地域型仮設住宅505戸をあわせ合計3,877戸となっている。

96年2月1日現在の仮設住宅在住世帯は3,813、東灘区内世帯は2,649(69.5%)、身障者・母子家庭・病弱者などのいる世帯は3,435(90.1%)、高齢者のみの世帯2,332(61.2%)となっている。これを個人ベースでみれば、人口は7,405人、このうち身障者・母子家庭・病弱者などは1,460人で人口の約2割(19.7%)、65才以上の高齢者は3,109人で人口の約4割(42.2%)を占めている。

東灘区の位置図



1 1年間の活動の概括——震災救援から地域コミュニティ活動へ

震災直後の混乱の中、東灘・地域助け合いネットワーク（以下「ネットワーク」と省略する場合がある）は、活動拠点や資金などの活動基盤もないまま救援活動に突入していった。唯一確かだったことは、高齢者や障害者などを対象にして、人々の要望にできる限り添っていかうとしたことである。人々の要望が活動の中身を決め、それらに導かれながら自然体で活動の方向性を決めてきたように思える。

1. 1年間の活動（年表にそって）——地元ボランティアを中核に

東灘・地域助け合いネットワークの1995年2月から1996年1月までの1年間の活動を、地域での仮設住宅の入居時期などと照らし合わせながら年表にそって概観してみよう。（表1参照）

阪神・淡路大地震発生から約2週間後の2月2日、甲南教会の好意で同胞幼稚園の中庭を借り、そこにテントをたて、「ネットワーク」は立ち上がった。携帯電話2本、机と椅子があるだけという活動拠点で、何もかもが不自由な中でのスタートだった。

未曾有の被災からの復興に長い時間をかけなければならないことが誰の目にも明らかであり、復興には地元住民が中心になるしかないと、「ネットワーク」の代表に本山北町の中村順子が就任した。

2月4日には、水汲み作業を開始し、ライフラインを支える活動を始める。

2月11日、さらに深江町の市橋クリニックの好意で、面積的にも余裕のある市橋クリニックのガレージとプレハブ建物の2階を借りた。

このガレージで、物資供給を中心としたバザーを月1～3回程度行っている。外部からの物資の援助とともに、住民にも物資提供をお願いし、被害の大きかった地域の人々に供給してきた。こうした住民同士の助け合いの形とその橋渡しは地域で共感を得た。また、無料配付は避け、あえて有料化することで、自立への援助と公平感のある配付を目指した。収益金は地元の医師会へ寄付、地域ケア全般の回復などの経費に当ててもらっている。

2月25日には、本庄中央、魚崎第1、魚崎第2の仮設住宅への入居が始まった。

2月26日本庄町小公園では、「ネットワーク」のボランティアと地域住民ボランティアが共同して仮設風呂を設営し、利用者に好評を得る。

3月10日、御影中町、住吉公園、瀬戸公園の仮設住宅への入居も始まる。

3月15日、「ネットワーク」は3度目の移転をする。市橋クリニックに前線基地を残し、東灘区役所中庭のプレハブ建物に本部を移動する。中庭にはテントを張り、地元ボランティアとしてひとまず、安住の場所を見い出した。

資料1
震災関連データ（出所：東灘区まちづくり推進課）

1 人口・世帯（住民基本台帳推定）

	人 口	1 月 比	世 帯 数	1 月 比
H7年1月1日	191,716人	-	77,296世帯	-
4月1日	180,692人	△11,024人	72,763世帯	△4,533世帯
7月1日	176,529人	△15,187人	71,426世帯	△5,870世帯
※10月1日	157,599人	△34,117人	62,864世帯	△14,432世帯
H8年1月1日	156,792人	△34,924人	62,656世帯	△14,640世帯

※10月1日は国勢調査による

2 震災による死亡者（平成8年1月8日 市発表）

東灘区 1,461人（神戸市 4,512人）

3 避難所設置状況

	1月18日	1月28日	2月5日	3月11日	3月31日	4月30日
避難所数	120 箇所	110 箇所	100 箇所	98 箇所	95 箇所	88 箇所
宿泊者数	60,700 人	43,500 人	32,500 人	9,973 人	8,377 人	5,174 人
配食数	20,000 人	59,045 人	39,344 人	24,827 人	11,076 人	7,109 人
	5月31日	6月30日	7月31日	8月20日		
避難所数	75 箇所	72 箇所	66 箇所	55 箇所		
宿泊者数	3,692 人	2,512 人	1,974 人	980 人		
配食数	4,879 人	3,023 人	2,288 人	1,096 人		

4 待機所設置状況

（2月13日現在）

待機所名	待機所人数	待機所名	待機所人数	待機所名	待機所人数
東灘体育館	—	東灘区センター	—	住吉少年センター	—
御影公会堂	—	求女保育所	—	合計	0 人

その他 1 箇所 8 人

計 8 人

5 り災証明発行件数

単位：件

	受付総数	証明発行件数	全壊	半壊	一部損壊	全焼	半焼	水損	再調査件数
1/17~2/9受付分	64	64	9	11	44	0	0	0	0
2月6日よりの累計	85,332	78,009	33,515	17,690	26,184	524	73	23	7,323

（未処理 0 件）

6 義援金交付件数

単位：件

	申請受理件数	決定件数	全壊・全焼	半壊・半焼	死亡	行方不明
1/25~2/9受付分	12	12	7	4	1	0
2月6日よりの累計	45,371	45,371	25,821	18,354	1,196	0

7 災害見舞金・災害援護金交付件数

単位：件

	申請受理件数	処理件数	全壊・全焼	半壊・半焼	未処理
窓口受付分 1/25~2/9	17	17	10	7	0
3月13日よりの累計		44,722	26,214	18,508	—

8 倒壊危険家屋処理状況（区受付分）

2月1日現在

受付件数 8,468 件
自衛隊処理件数 203 件
市発注件数 2,591 件
三省契約等件数 5,565 件
未処理件数 109 件

9 区内応急仮設住宅設置状況（入居申込書のごあんないによる）

名称	所在地	戸数	名称	所在地	戸数
本庄中央	青木4丁目	134 戸	御旅公園	住吉南町1丁目	166 戸
魚崎	魚崎南町2丁目	73 戸	福井池公園	本山南町5丁目	95 戸
御影中	御影中町	49 戸	手水公園	田中町3丁目	31 戸
住吉公園	住吉宮町3丁目	205 戸	御影公園	御影中町3丁目	39 戸
瀬戸公園	魚崎南町1丁目	400 戸	浜公園	魚崎南町2丁目	71 戸
六甲7丁目	向洋町中	820 戸	川井公園	魚崎北町2丁目	47 戸
六甲7丁目	向洋町	1,272 戸	北青木公園	北青木3丁目	24 戸
東部第4区	深江浜町	270 戸	磯島公園	深江南町4丁目	32 戸
渦森台	渦森台1・3・4	23 戸			
中之町公園	田中町2丁目	14 戸			
魚崎南町	魚崎南町2・5・6	78 戸			
魚崎西町	魚崎西町2・4	34 戸			
	計 3,372 戸				
			計 505 戸		
			合計 3,877 戸		

（参考）

※神戸市発注分

1 K 6,919 戸 2 K 20,255 戸 地域型 2,004 戸 計 29,178 戸

10 ①区内住宅着工件数（戸数）

（2月9日現在）

利用関係	H7.2~6	H7.7~11	H7.12	合計
持家	588	1,990	428	3,012
貸家	175	1,890	664	2,729
給与住宅	2	18	5	25
分譲住宅	153	181	154	488
計	918	4,085	1,251	6,254

②区内公営住宅着工件数

神戸市営 災害公営住宅	311 戸（3 棟）
再建住宅	734 戸（7 棟）
兵庫県営	0
住都公団	0
市・県公社	0
計	1,045 戸

③区内特定優良賃貸住宅 45 戸（入居済）
区内特定目的賃貸住宅 0 戸

【東灘区内仮設住宅団地別集計表】

平成8年2月1日現在

集計項目 団地名 ——は仮設地	世帯				人数 (A)	人										備考
	世帯数 (X)	区内世帯数(Y (割合%) Y/X	世帯弱者数(Z (割合%) Z/X	高齢60 04世帯 (21.21		男	女	区内 人数 (B)	個人弱者(C (%) C/A	年齢構成					D/A	
						～6	～17	～40	～64	D)65～ (%)						
①磯島公園	29	29 (100.0)	8 (27.6)	3	44	30	14	44	5(11.4)	—	—	14	28	2(4.5)		
②渦森第1	3	3 (100.0)	1 (33.3)		5	4	1	5	—	—	—	2	2	1(20.0)		
③渦森第2	15	14 (93.3)	7 (46.7)	2	19	11	8	17	6(31.6)	—	—	8	5	6(31.6)		
④渦森第3	4	3 (75.0)	1 (25.0)	1	5	4	1	4	—	—	—	3	1	1(00.0)		
⑤魚崎第1	19	17 (89.5)	19 (100.0)	9	44	17	27	42	11(25.0)	—	4	11	14	15(20.0)		
⑥魚崎第2	53	47 (88.7)	48 (90.6)	32	103	38	65	86	14(13.6)	1	8	12	40	42(40.8)		
⑦魚崎第3	10	10 (100.0)	4 (40.0)	2	14	9	5	14	1(7.1)	—	2	1	9	2(14.3)		
⑧魚崎第4	29	28 (96.6)	9 (31.0)	6	46	28	18	44	3(6.5)	1	4	8	25	8(17.4)		
⑨魚崎第5	4	4 (100.0)	1 (25.0)	1	9	6	3	9	—	—	2	2	3	2(22.2)		
⑩魚崎第6	17	14 (82.4)	3 (17.6)		23	16	7	18	3(13.0)	—	—	3	19	1(4.3)		
⑪御影	34	30 (88.2)	31 (91.2)	25	47	16	31	40	11(23.4)	—	—	2	19	26(55.3)		
○ ⑫御影中	47	41 (87.2)	43 (91.5)	33	83	36	47	72	31(37.3)	2	3	10	26	42(50.6)		
○ ⑬御旅	152	77 (50.7)	114 (75.0)	96	202	94	108	117	26(12.9)	2	8	15	75	102(50.5)		
⑭手水	27	26 (96.3)	26 (96.3)	20	36	10	26	34	9(25.0)	—	—	4	6	26(72.2)		
○ ⑮住吉	199	192 (96.5)	186 (93.5)	154	361	135	226	339	69(19.1)	8	30	37	101	185(51.2)		
○ ⑯深江浜第1	207	177 (85.5)	197 (95.2)	128	427	205	222	377	70(16.4)	11	49	64	142	161(37.7)		
⑰深江浜第2	56	51 (91.1)	52 (92.9)	27	135	61	74	128	14(10.4)	9	28	18	37	43(31.9)		
○ ⑱瀬戸	379	350 (92.3)	359 (94.7)	274	733	303	430	676	175(23.9)	19	54	103	204	353(48.2)		
⑲瀬戸第2	57	51 (89.5)	16 (28.1)	7	100	53	47	90	10(10.0)	1	3	28	59	9(9.0)		
⑳川井	44	31 (70.5)	38 (86.4)	33	58	27	31	44	12(20.7)	—	1	5	16	36(62.1)		
㉑中之町	14	14 (100.0)	3 (21.4)	1	23	14	9	23	2(8.7)	—	1	6	16	—		
㉒浜	61	51 (83.6)	42 (68.9)	23	98	42	56	87	22(22.4)	3	4	18	45	28(28.6)		
㉓福井池	87	69 (79.3)	82 (94.3)	58	115	54	61	96	38(33.0)	—	4	7	43	61(53.0)		
㉔北青木公園	22	21 (95.5)	5 (22.7)	2	47	22	25	46	1(2.1)	2	3	11	26	5(10.6)		
○ ㉕本庄中央	131	118 (90.1)	123 (93.9)	85	260	106	154	232	68(26.2)	5	20	36	87	112(43.1)		
○ ㉖六甲アイランド第1	299	135 (45.2)	290 (97.0)	221	524	221	303	238	124(23.7)	9	22	55	172	266(50.8)		
○ ㉗六甲アイランド第2	281	130 (46.3)	270 (96.1)	194	519	224	295	241	98(18.9)	14	29	73	158	245(47.2)		
○ ㉘六甲アイランド第3	331	193 (58.3)	311 (94.0)	212	652	293	359	356	137(21.0)	12	44	87	192	317(48.6)		
○ ㉙六甲アイランド第4	276	185 (67.0)	263 (95.3)	190	523	240	283	377	106(20.3)	5	28	68	183	239(45.7)		
○ ㉚六甲アイランド第5	250	104 (41.6)	239 (95.6)	152	482	212	270	195	103(21.4)	17	17	67	166	215(44.6)		
○ ㉛六甲アイランド第6	482	294 (61.0)	459 (95.2)	223	1,233	530	703	804	194(15.7)	72	141	254	379	387(31.4)		
○ ㉜六甲アイランド第7	82	51 (62.2)	81 (98.8)	57	150	61	89	96	34(22.7)	4	3	22	52	69(46.0)		
(1)県営空家9団地	31	19 (61.3)	26 (83.9)	13	84	28	56	60	14(16.7)	3	19	19	19	24(28.6)		
(2)市営空家10団地	11	8 (72.7)	11 (100.0)	5	31	15	16	27	6(19.4)		4	9	10	8(25.8)		
(3)御影団地	70	62 (88.6)	67 (95.7)	43	170	76	94	150	43(25.3)	4	15	27	54	70(41.2)		
合 計	3,813	2,649 (69.5)	3,435 (90.1)	2,332	7,405	3,241	4,164	5,228	1,460(19.7)	204	550	1,109	2,433	3,109(42.2)		

(61.2)

(43.8)(56.2)(70.6)

(2.8)(7.4)(15.0)(32.9) %

表1

東灘・地域助け合いネットワーク 活動年表

年月日	土・日・祭日の山来木車	社芸の動き
一九九五年		
1月17日	【阪神・淡路大震災 発生】	ロシア軍、チェチェンの大統領官邸を制圧（1月19日）
1月27日	第一次仮設住宅入居者募集	天皇・皇后両陛下が震災地を見舞う（1月30日）
2月2日	東灘・地域助け合いネットワーク発足／甲南教会同胞幼稚園にて	政府が「阪神・淡路復興委員会」を設置（2月13日）
2月4日	水汲み作業開始	再処理後の放射性廃棄物、日本へ輸送の為、仏を出港（2月23日）
2月10日	瀬戸公園の仮設住宅へ入居開始	中国北京で全国人民代表大会開幕（3月5日）
2月11日	東灘・地域助け合いネットワーク事務所を移転	国連社会開発サミットで村山首相が演説（3月11日）
2月25日	本庄中央、魚崎第1、魚崎第2、の仮設住宅へ入居開始	東京地下鉄でサリン発生（3月20日）
2月26日	バザー／市橋クリニックガレージにて仮設風呂開始／本庄町小公園にて	オウム真理教の施設を一斉に強制捜査（3月22日）
3月5日	バザー／市橋クリニックガレージにて	東海大学病院「安楽死」事件の医師が有罪判決（3月28日）
3月10日	御影中町、住吉公園、瀬戸公園の仮設住宅へ入居開始	警察庁長官、自宅前で狙撃され重症（3月30日）
3月12日	バザー／市橋クリニックガレージにて	
3月15日	東灘・地域助け合いネットワーク事務所を移転	
3月21日	バザー／本庄中央仮設にて	
3月26日	バザー／瀬戸屋上公園にて	
3月下旬	水汲み活動終了	
4月2日	市橋クリニックの前線基地を撤収	
4月5日	本庄町小公園の仮設風呂活動を終了	
4月7日	深江浜第1、第2の仮設住宅へ入居開始	
4月12日	六甲アイランド第4仮設住宅へ入居開始	
4月13日	六甲アイランド第1仮設住宅へ入居開始	
4月19日	六甲アイランド第2、3仮設住宅へ入居開始	
4月20日	六甲アイランド第6仮設住宅へ入居開始	
4月23日	六甲アイランド第5、7仮設住宅へ入居開始	
4月23日	第1回 茶話やかテント住吉公園仮設	
5月19日	御旅公園、福井池公園、手水公園、御影公園の仮設住宅へ入居開始	
5月28日	バザー・六甲アイランド復興イベント／六甲アイランドリバーモールセンターにて 共催／六甲アイランド復興委員会	
6月12日	浜公園、川井公園の仮設住宅へ入居開始	
7月2日	第1回踏み台配り	
7月16日	バザー・茶話やかテント／六甲アイランドマリンパーク北側にて 共催／東灘区社会福祉協議会、六甲アイランド復興委員会	
7月23日	北青木公園、磯島公園の仮設住宅へ入居開始	
7月24日	中之町、魚崎第3、第4、第5、第6の仮設住宅へ入居開始	
7月25日	渦森台第1、2、3の仮設住宅へ入居開始	
8月5日	瀬戸公園仮設ふれあいセンター開所	
8月7日	六甲アイランド南ふれあいセンター開所	
8月8日	深江浜ふれあいセンター開所	
8月10日	瀬戸屋上公園の仮設住宅へ入居開始	
8月17日	六甲アイランド北ふれあいセンター開所	
9月30日	瀬戸内寂聴さんの講話／六甲愛ランド館前広場にて	
11月5日	六甲アイランド第2・第3ふれあいセンター開所	
11月11日	島根県「見神楽」やまたのおろち「公演	
11月12日	バザー／本庄中学校体育館にて	
11月16日	六甲アイランド第4ふれあいセンター開所	
12月中旬	第1回ふれあいサロン／川島クリニックにて	
12月下旬	もちつき大会／各ふれあいセンターにて	
12月25日	クリスマス会／各ふれあいセンターにて	
12月28日	六甲アイランド第7ふれあいセンター開所	
12月28日	年末・年始休み	
一九九六年		
1月8日	活動開始	
1月13日	御影中ふれあいセンター開所	
1月17日	【阪神・淡路大震災 1周年】	

3月末、ライフラインの復旧とともに、水汲み活動も役割を終え、市橋クリニックの前線基地を撤収、本庄町小公園の仮設風呂もその役割を終える。

4月5日に深江浜第1、第2、六甲アイランドでは、4月7日～20日にわたって六甲第4、第1、第2、第3、第6、第5、第7仮設住宅の人居が順次始まる。

4月23日、第1回茶話やかテントを住吉公園仮設に開催。好評を得る。

8月5～7日に、瀬戸公園、六甲アイランド南、深江浜のふれあいセンターがそれぞれ開所となる。以後、ふれあいセンターの管理運営、プログラム作成とその実施などの活動に取り組む。

8月17日、六甲アイランド北ふれあいセンター、少し遅れて11月5～12日に、六甲アイランド第2、第3、第4ふれあいセンターが開所する。

仮設住宅地域での活動、ふれあいセンターの活動が安定してくる中で、これらの活動を一般市街地でも展開すべく、11月16日に第1回「ふれあいサロン」を開く。

この1年間に行った目立ったイベントとしては、瀬戸内寂聴さんの六甲アイランドでの青空対話集会、浜田市のやまたのおろち舞などがある。六甲アイランド復興フェスティバルも共催し、活動の幅を広げた。

2. ボランティアの活動内容の件数の推移——救援、生活支援、地域交流活動へ

地域や仮設住宅でのニーズは、救援から生活支援へ、さらに地域交流活動へと大きくシフトしていった。この流れと変化をボランティアの活動件数の推移から見てみよう。（表2参照）

ネットワークの年間の活動作業件数は 7,615件である。この作業は大きく、個人・在宅の支援活動とコミュニティ活動等に分けられ、前者は 7,037件、後者は 588件となっている。

個人・在宅の支援活動は水汲み、安否確認、瓦礫片付けなどの震災救援活動と介護、住宅改善、訪問調査、家事などの生活支援活動に大別され、前者の震災救援活動が 1,314件で約 2 割、後者の生活支援活動が 5,723件で約 8 割となっている。

個人・在宅への支援活動のうちで最も多いのは介護（2,359件）で3分の1を占めている。次いで、住宅改善（1,247件）が18%、訪問調査（906件）が 13 %、水汲み（803件）が11%となっている。

これに対してコミュニティ活動といえるものは茶話やかテント、ふれあいセンター、ふれあいサロンなどで、合計 210件となっている。かわら版等情報活動は 378件となっている。

個人・在宅支援活動について、活動時期の変遷をみると、2月、3月は震災救援活動が8～9割を占め、2月には4分の3が水汲み、3月は水汲みと安否確認で二分される。これが4月には6%となり、6月には殆どなくなる。逆に、4月以降は生活支

援活動が主役になり 9～10割を占めるようになる。

生活支援活動について、同じように活動の変遷を見てみれば、4～5月に多かったのは訪問調査である。これは仮設住宅約1,200戸を個別訪問し、今後の生活上の要望を聞いた活動である。ふりかえってみれば、この活動により、その後の仮設住宅での活動方向を決めることが可能になった。6月には介護が4分の3を占めて一番多く、その後も中心的な仕事となっていく。7月には住宅改善が6割弱を占めて多いが、これは仮設住宅の段差解消のための踏み台の配布と取り付けであった。その後、この作業が10月頃まで断続的に続けられている。10月頃からは家事、移送が増えていく。12月には介護と家事がいずれも3分の1強を占めて並んでいる。年が改まって1月には車による移送（81件、30%）が増え、家事（73件、27%）をこえ介護（104件、38%）に次いでいる。

一方、コミュニティ活動を見てみると8月から増えはじめ、その後も月を追って増えていく。コミュニティ活動のうち、大きなウェイトを占めるのは、ふれあいセンターで11月以降は30件をこえるようになる。

2～3月に多かった震災救援活動は、4月以降、生活支援活動へと推移し、10月頃からは家事、移送へと仕事が多様化し、11月頃からはコミュニティ活動が多くなっている。震災救援⇒生活支援⇒コミュニティ活動への大きな流れが読み取れる。

以上を活動作業件数の月別にみてみれば、7月（1,200件、39件／日平均）が最も多く、12月（274件、10件／日平均）が最も少ない。年間の日平均作業件数は21件であるが、10月以降はこれを下回っている。しかし、ボランティア参加者数は減っていない。これは、コミュニティ活動が増加してきたことによっている。コミュニティ活動は集団的に取り組む必要があり、1件当たりのボランティア参加者が多くなるからである。

表2
東灘・地域助け合いネットワークの仕事

活動の分類と種別		2月		3月		2～3月計		4月		5月		6月		7月		4～7月計		8月		9月		10月		11月		8～11月計		12月		1月		年合計		
震災救済活動	水汲み	602	75	201	33	803	57																								803	11		
	洗濯代行・仮設風呂	75	9	25	4	100	7																								100	1		
	安否確認	2	0	199	32	201	14	15	2					7	1	22	1														223	3		
	瓦礫、解体等	30	4	55	9	85	6	42	4	37	7	11	1	6	0	96	3	1		6						7	0				188	3		
	小計	709	88	480	78	1189	84	57	6	37	7	11	1	13	1	118	3	1	0	6	1					7	0				1314	19		
生活支援活動	家事（掃除等）	63	7	7	1	70	5	64	7	40	7	42	5	49	4	195	8	39	9	33	5	58	16	56	25	186	11	73	34	73	27	597	8	
	訪問調査			34	6	34	2	624	66	242	44					866	25															906	13	
	介護（話相手等）	9	1	31	5	40	3	122	13	181	33	622	71	403	35	1328	38	302	68	285	47	131	36	90	40	808	49	79	37	104	38	2359	33	
	住宅改善（修理等）									27	5	120	14	659	57	806	23	66	15	251	41	97	27	10	4	424	26	6	3	11	4	1247	18	
	心のオアシス	3	0	4	0	7	0					2	0	2	0	4	0	1	0	1	0	1	0			3	0					14	0	
	車による移送	通院等																					17	5	23	10	40	2	18	9	57	21	115	2
		引越運搬等																					43	12	44	19	87	5	23	11	24	9	134	2
	その他（引越他）	24	3	56	9	80	6	72	8	24	4	44	5	32	3	172	5	32	7	35	6	13	4	3	1	83	5	13	6	3	1	351	5	
	小計	99	12	132	16	231	16	882	94	514	93	830	99	1145	96	3371	97	440	100	605	99	360	100	226	100	1631	100	212	100	272	100	5723	81	
個人・在宅サービス小計		798	100	612	100	1420	100	939	100	551	100	841	100	1158	100	3489	100	441	100	611	100	360	100	226	100	1638	100	212	100	272	100	7037	100	
コミュニティ活動	茶話やかテント							1		3		7		6		17		1		3		5		4		13		4		3		37		
	ふれあいセンター															0		13		14		15		31		73		36		35		144		
	ふれあいサロン																						1		1		2		4			7		
	その他イベント	2		8		10				1				1		2				1		2		3		6		4		0		22		
	小計	2		8		10		1		4		7		7		19		14		18		22		39		93		46		42		210		
情報活動	情報収集・提供活動	5		55		60		10		7		16		19		52		12		4		8		13		37		7		46		202		
	ボランティア研修会											3		3		6				1		1		1		3		2		1		12		
	会議出席等外部交流							9		21		24		13		67		11		21		21		18		71		7		19		164		
	その他																																	
	小計	5		55		60		19		28		43		35		125		35		26		30		32		111		16		66		378		
活動作業件数の合計		815		675		1490		959		583		897		1200		3639		468		655		412		297		1832		274		380		7615		
日平均活動作業件数		29		22		25		32		19		30		39		30		15		22		13		10		15		10		16		21		
参加ボランティア総数		不明		不明		不明		664		805		879		867		3215		850		668		711		732		2961		852		562		7590		
日平均ボランティア数		不明		不明		不明		22		26		29		28		26		27		22		23		24		24		24		23		26		

3. 参加者の変遷——幅広いボランティア層

「ネットワーク」のボランティアは、年齢や職業別に見てもかなり幅広い層にわたっている。（図1～4参照）

ネットワークの10カ月のボランティア参加者数は延べ7,590人である。2月、3月は記録をとっていないため、不明であるが、震災救援活動期で、少なく見積もって、1日平均50人が動いたとしても3,050人。従って、95年2月～96年1月までの1年間で延べ1万人を超える人が参加したと考えられる。96年1月31日現在のボランティア登録者数は1,141人であるから、登録ボランティア1人当たり平均8.8日間活動していることになる。また10カ月間における日平均参加者数は26人である。

月別にみて、最も多かったのは6月（879人、日平均29人）、少なかったのは1月（562人、日平均23人／7日まで休む）、4月（664人、日平均22人）、9月（668人、日平均22人）である。上記の他、日平均参加者数で年間の日平均数（26人）を上回るのは、7月（28人）、8月（27人）であり、下回るのは10月（23人）、11月（24人）、12月（24人）である。

傾向的に夏場に参加者が多く、秋、冬に少なくなるといえるが、日平均参加者数も20人を切ることはなく1年を通して参加者の変動が少なく、参加者数も一定しているといえる。

参加ボランティアの構成はゴールデンウィークを境に、それまで主体であった学生から主婦の占める割合及び地元比率が急激に高まった。最近の状況は以下の通りである。

- ・性別——平日活動者の70％が女性となっている。但し、土日は男性比率は50％近くになる。
- ・年齢——10代から70代まで広い年齢層にわたっている。
- ・職業——主婦50％、勤労市民＋学生＋シニア＝50％となっている。特に学生層の参加が少なくなってきたので、対策を考慮中。

これらを、1年間に登録したボランティアの統計から見てみよう。

- ・性別——女性（67％）が3分の2、男性（33％）が3分の1となっている。

表2

- ・職業——1番多いのが勤め人（24.3％）であるが学生（24.2％）、主婦（22.0％）、不明（23.0％）はほぼ並んでいる。
- ・年齢——最も多いのが20才代（26.3％）、次いで40才代（19.3％）、50才代（16.0％）、30才代（12.7％）、10才代（11.9％）の順になっている。
- ・地区——最も多いのは大阪府（36.1％）、次いで東灘区（19.4％）、関東地方（11.6％）、京都・奈良・和歌山（10.4％）の順である。東灘区、その他神戸市、芦屋、西宮の被災地からの参加ボランティアの合計（21.9％）は2割を超えている。

図1 男女別ボランティア登録者数

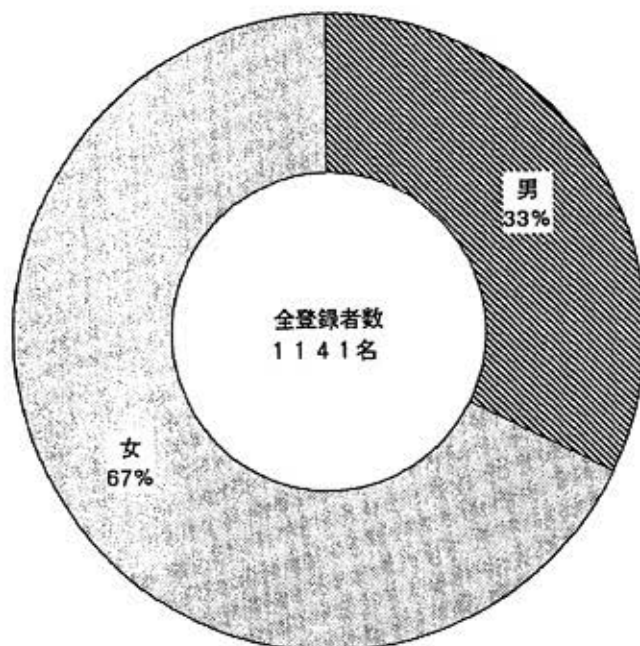
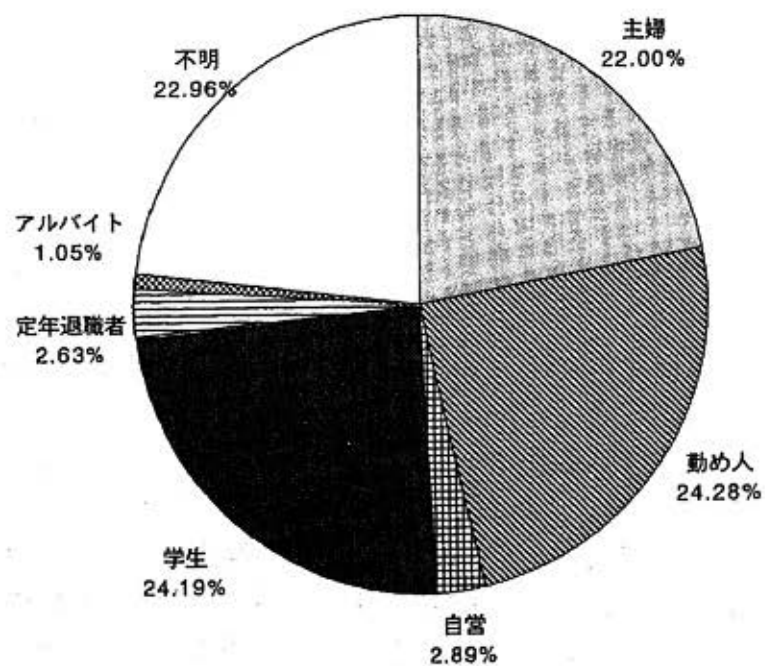


図2 職業別ボランティア登録者数



1996.1.31現在

図3 年齢別ボランティア登録者数の推移

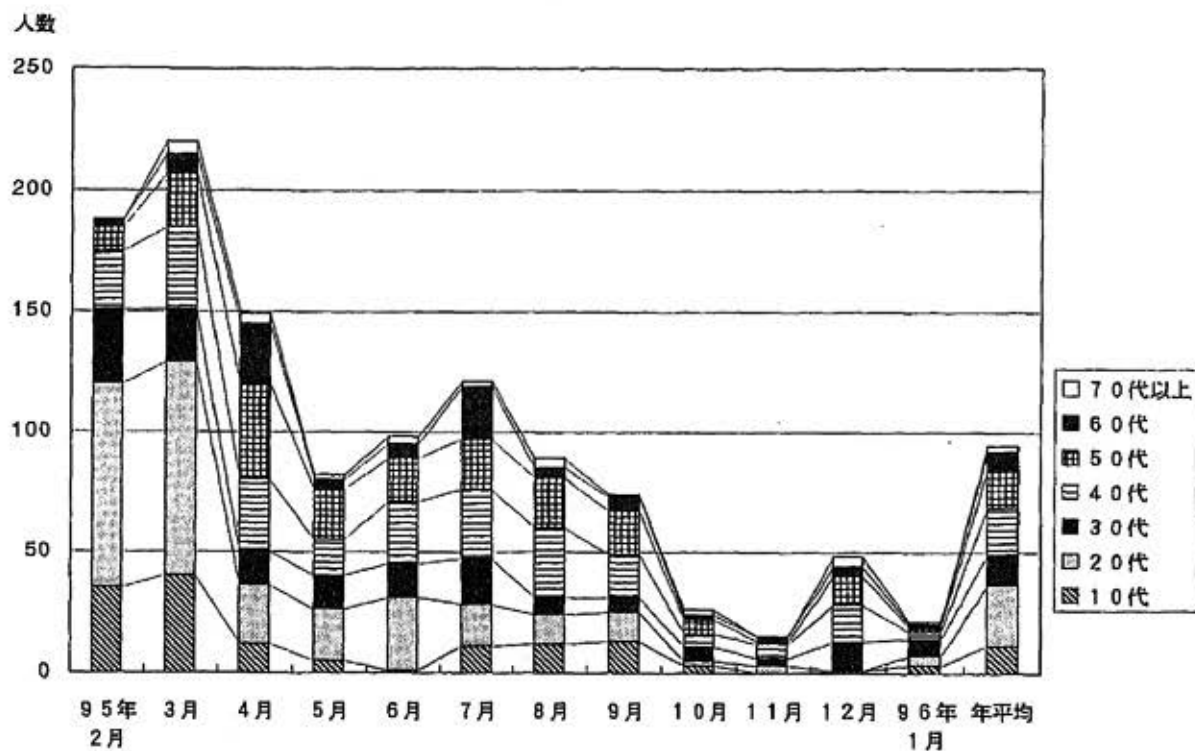
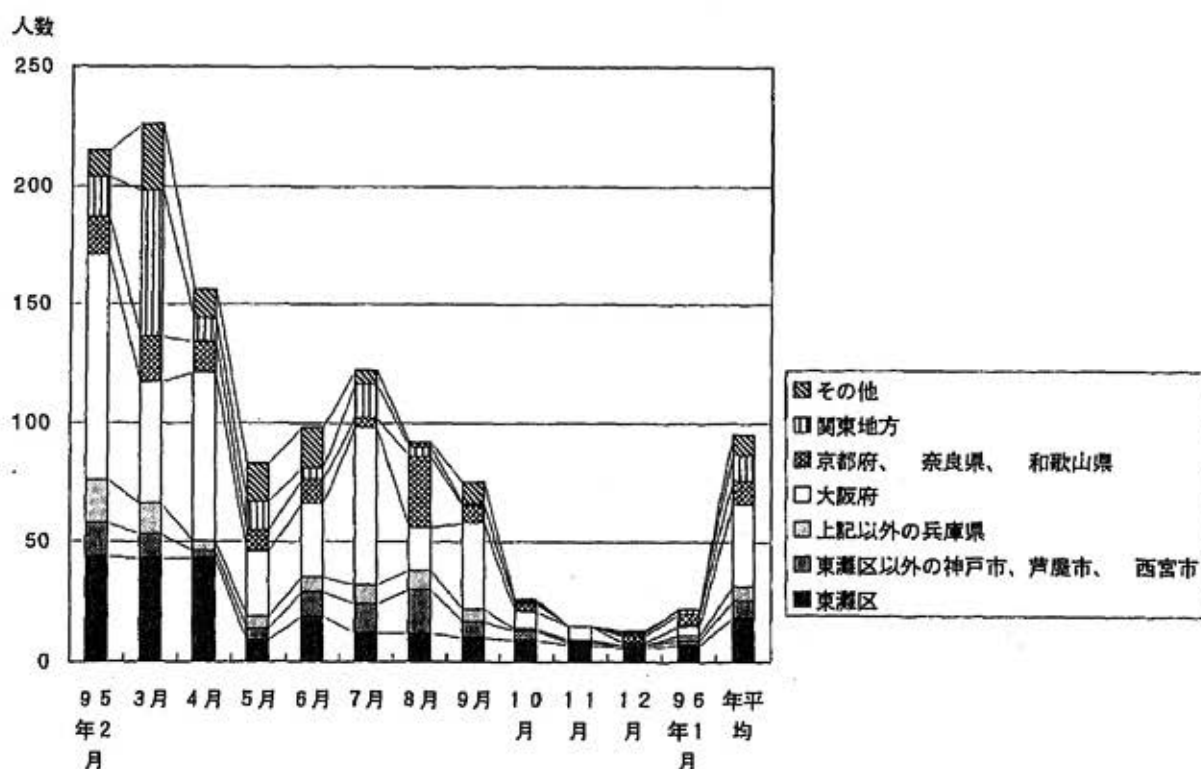


図4 地域別ボランティア登録者数の推移



2 震災ボランティアを越えて——時期別の活動概況とその問題

東灘・地域助け合いネットワークの1年の活動は、初動期（95年2～3月）、仮設活動期・前期（4～7月）、仮設活動期・後期（8～11月）、地域活動への助走期の4期（12月～96年1月）に分けることができる。この1～4期の活動の内容とその問題点などを振り返ってみよう。（表3参照）

1. 第1期／初動期の活動〔2～3月〕——「在宅」の高齢者支援

初動期は地元外からのボランティアが最も活躍した時期であり、被災地全体でボランティア総数は100万人とも150万人ともいわれた。「ネットワーク」の立ち上がりは2月に入ってからであり、この頃すでに避難所は他のボランティア団体や多数のボランティアによって支援がされていた。「ネットワーク」は避難所外の一般地域での活動にとりくんだ。

1) 途絶したライフラインを支える

地震直後からライフラインの途絶した2～3月が初動期である。

東灘・地域助け合いネットワークは、避難所の支援を他のボランティア団体に任せ、家屋の損壊は比較的軽かったものの在宅で不自由な生活をしている高齢者を対象にした活動を行った。水、ガスが開通する3月末まで、生活に不可欠な水など、ライフラインを支える作業に人海戦術で取り組んだ。

旧知の高齢者をポイントにしながらも、どこに人々の要望があるのかは手さぐりの状態であり、街角にサービス案内の吊り看板の掲示をし、ちらしを貼りめぐらす、道行く人に聞き出すなど、ゲリラ的に人々の要望の掘り起こしを行った。

①水汲み・洗濯・暮らし・よろず……110番活動

サービスの内容としては、水くみのニーズに応える「水くみ110番」をはじめ、何でもやりますという「くらしの110番」「よろず110番」のサービスは、買い物、引っ越し、瓦礫の撤去、ブロック塀こわし、ピアノおこしなど、力仕事が多岐に求められる仕事であった。水の出る山（北）側の地域の人々が洗濯を引き受けるという「せんたく110番」も、多くの人のニーズを満たし、海山（南北）の地域協力や地元ボランティアの発掘にも寄与した。

また、仮設入居を目前にし、各地域で、どこに給水場があるのか、どこに人浴施設や医療機関、店舗が開いているのか、交通機関の運行状況はどうか、などの最新の生活情報を調査、整理し、その結果を印刷物（かわら版）にまとめる準備をした。このような生活情報の提供もまた、地域の人々の生活を支えるツールとなったといえる。

この時期の主要な仕事は単純労働だったが、力仕事が多く、ボランティアの8割が学生だったことで、体力のある若者の活躍に助けられた。事務局メンバーも手薄で、

表3
東灘・地域助け合いネットワークの活動年表

時期 活動	初動期		仮設活動期								地域づくりへの助走	
			前期（入居期）				後期（地域活動期）					
	95. 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	96. 1
水くみなど緊急生活サービス	←	→										
生活支援サービス	←											→
仮設住宅でのニーズヒアリング調査			←	→								
仮設住宅への情報提供（かわら版）		←	→									
仮設住宅ハード改善					←	→						
茶話やかテント			←									→
ふれあいセンター							←					→
ふれあいサロン										←		→
ボランティア研修					←							→
パソコンによる情報処理と発信												←

ボランティアは毎日50～70名を投入して、小学校区の2～3校区くらいのエリアをカバーするのがやっとだった。

②一人を大切に——地域のローラー作戦

介護経験のあるボランティアは地域に入って、今後も継続してサービスする必要がある人を拾い出していった。

③成約3件に終わる——ホームステイ、ホームビジットの紹介

震災直後より全国から400を超える個人・団体から被災地の人々に、お風呂、食事、休息、宿泊の場を提供したいという申し出を受けた。これに対し、問い合わせが数件、成約はたった3件という結果に終わった。居住地域を離れると仮設住宅への入居権利がなくなるなどの噂が飛び交ったことなど、さまざまな理由からホームステイやホームビジットの実現はむずかしかった。今後課題を残すプロジェクトとなった。

(2)立ち上がりの苦しさ——初動期の問題と課題

この時期の大きな問題は、活動拠点の確保であった。活動拠点があるかないかで、活動ができるかどうかにも決まる。初動期の混乱の中で、活動拠点を甲南同胞幼稚園の園庭（2月2日～）、市橋クリニックのガレージ（2月11日～）、現在の東灘区役所中庭（3月15日～）と、3度にわたって変えることは大きな負担であった。

拠点確保とならぶ運営資金の確保は、今までつながりのあった団体や個人から早々にカンパ、寄付が寄せられ、額が増えるにしたがい、1カ月、3カ月、半年と活動の継続が可能になっていった。平素のネットワークづくりの重要性を再認識させられたが、この最も大変な時期に活動拠点と資金の獲得に相当のエネルギーを費やし、本来のコーディネート業務に全力投球できなかった状況は、防災機能などの社会的整備課題でもある。

もう一つは、ボランティアのあり方とボランティア間のコミュニケーションをめぐる問題である。特に、大多数を占める学生ボランティアと地元ボランティアやリーダーとのコミュニケーションがうまくいかない場面が多々あった。これには、初動期で救援活動を終える外部ボランティアと、地域に住み長期的に活動の行方と意味を考えるボランティアとの考え方や立場の違いが反映していた。活動拠点を代えざるを得ない物理的な問題もコミュニケーション確保上の制約になっていた。

大多数の若者ボランティアがかかわった震災直後の災害ボランティアの仕事（ライフラインの復旧までの水汲みなどの仕事）の役割やその仕事の終了時期（仕事別撤退時期）などを予め明らかにする必要があったのかもしれない。もしくは、仕事の内容の変化に備えて、ボランティア研修を準備すれば、若者ボランティアの情熱の行き場があったのかもしれないと反省している。

この他のボランティアに関する問題では、遠隔地からの宿泊付きボランティアの申

し出には、気持ちはいがいが閉口した。避難所の場合は昼夜わかつた活動が要求され、宿泊可能なボランティアでないと対応できにくいけれど、避難所以外をケアする団体には、ボランティアの宿泊先をアレンジをする余裕はない。遠方からは被災地に負荷をかけないかたちでのボランティアの派遣をお願いしたいと思った。コーディネートする人間がさえおれば、初動期のボランティアは日替わりで十分である。

最後に、ニーズ把握も重大な問題であった。この時期、人々の要望は緊急課題から、短期間のサイクルで個別化、多様化し、これらへの対応が求められた。しかし、ニーズの把握に対しても、なかなか組織的に対応することができなかった。手さぐり、模索、混沌、の初動期であった。

2. 第2期／仮設活動期／前期（入居期）〔4～7月〕——生活支援・住宅改善・住民交流

2月下旬から始まっていた仮設住宅への入居が、4月から本格化した。水、ガスが出てほっとする反面、被災者の心の問題などが浮上してきた。新学期の季節になって学校が始まり、ボランティアの構成も、8割を占めた学生が4割と激減、全体の半数以下となった。それとともに、ライフラインの復旧で地元の主婦やシルバーがボランティアに加わってきた。

同時に、求められる活動やサービスの内容も、力仕事から、心の問題や日々の生活の支援など生活感や人生経験などが必要な活動に大きくシフトし、主婦やシルバーの活躍が目立っていた。「ネットワーク」では、復興状況に合わせボランティア募集のポスターを出すなど、地元ボランティアの確保につとめたため地域のニーズとボランティア層がうまくスライドしていったといえる。

①継続支援希望は5%——ニーズヒアリングと情報提供

特に初期の仮設住宅の入居者には、他の地域から移動してきた人が多かった。（東灘では平均的に区内より7割、区外より3割）地域コミュニティから切り離された互いに見知らぬ高齢者の人達とボランティアはまず信頼関係を築かなければならなかった。仮設住宅の人々に対してどんなことでも力になりたいと考え、住民の味方としての「ネットワーク」の存在を伝えた。サービスのやり過ぎがあったとしても、あえてやろうとした時期だった。

そのため、仮設住宅入居に合わせ、まず3月の終わりから4月にかけて、様子伺いと安否確認を兼ねて、ニーズのヒアリングを行った。そして、本庄中央、瀬戸、魚崎第1、魚崎第2、住吉、深江浜のそれぞれの仮設地域において、逐次ニーズのヒアリングを実施した。5月25日までには、市街地仮設住宅1131戸のうち、入居済みの856戸について第1次ヒアリング調査を終えた。

その上で、まず、地域の地理やお店などの情報提供にとりかかり、必要に応じて地域情報（かわら版）の提供をおこなった。

第1次ヒアリング調査を行うなかでフォローアップが必要な個別ケースがあがってきた。具体的には、話相手、家事（調理、買い物）、病院の付添い、荷物運び、シャワー介助などについては、これらへのパーソナルサービスとして対応した。入浴など専門性の求められるケアについては、行政機関との連携をはかりながら支援体制を整備していくこととした。

しかし、この調査で今後も継続してほしいとのニーズは全体の5%しか上がらなかった。仮設入居直後だったので、入居者にも、本当のニーズが見えていなかったのかもしれない。

この頃から、被災者も後は自分でやりますという人と、何らかのケアを必要とする人にはっきり分かれていった。後者は高齢者や障害者、また、震災で直接に障害を受けた人たちだった。

(2)1000台の踏み台を配る——仮設住宅のハード面の改善

仮設入居が始まって、仮設住宅自体や周辺環境の改善に対する要求が高まった。仮設周辺のぬかるみに砂利を敷いて整地してほしい、街灯設置、標識設置などの道路整備の問題、軒やひさしをつけてほしい、住宅入口の段差に踏み台がほしい、住宅内部の段差解消用の踏み台がほしい、手すりをつけてほしい、クーラー設置のため物干しをあげてほしいなどの住宅自体への要望である。

この問題の対処にはシルバーの男性ボランティアが活躍した。加えて、踏み台については、3団体より材料費助成を受け、8団体からは製作協力をいただき、希望者のほぼ全員に約1000台を配布することができた。

しかし、ハードの問題では手がでないことも多く、行政につないでも、街灯、家屋外、家屋内の整備については担当部署が違ふことで、たらい回しをされるということがあった。その中で改善されたことに、クーラーの設置がある。手すりや段差対策も従来の住宅改造助成の枠内で対応できるようになったが、かなり後になってのことであった。

(3)茶話やかテント——移動集会所事業

この時期、ある程度生活が安定してくると心のケアが大きな問題となって取り上げられるようになった。個人的なこころのケアの問題もさることながら、仮設住宅では隣の人ともあいさつをしない、道ですれちがっても何処の人だかわからないというような、住民同士の交流ができない状況が明らかに見えはじめたのである。深刻な症状は出ていないが、夜眠れない、不安でしかたないという人たちも多かった。

「ネットワーク」では、第Ⅰ期からパーソナルなこころのケアについては「こころのオアシス」という形で取り組んできていた。ボランティアの素人判断に任せず、臨床心理士につないで専門家の対応をあおいでできていたのである。

しかし、こういう状況に対して、住民同士の交流や気晴らしとなるような機会や場が必要だと考えていた。コミュニティのない孤独な暮らしにボランティアがどうアプローチするのか、「茶話やかテント」は「ネットワーク」が出した答えだった。

「茶話やかテント」を始めるきっかけとなったのは、たまたま、あるバザーの後、テントに幕を張り、その中でお茶のサービスをし交流や囲碁をしたことであつた。それがかなり好評だったことから、「茶話やかテント」のアイデアが生まれた。

「茶話やかテント」での交流は、別の仮設や棟の離れた人に知り合いや友人ができるなど人間関係づくりの成果をもたらし、仮設地域コミュニティ組織の基盤づくりのきっかけとなった。実際に、本庄中央、住吉、深江浜はじめ多くの仮設地域では、この活動がきっかけで住民組織が立ち上がっていく。また、ここで活躍した人たちが、後述する、ふれあいセンターの運営委員になっていくのである。

さらに、ボランティアと住民との接点の役割も果たし、ボランティアが地域住民への広い意味でのカウンセリングを行える場にもなっている。

「茶話やかテント」が好評であることから、地域型仮設や小規模仮設からも要望があり、そこへは、テントよりひとまわり小さい、「茶話やかパラソル」で巡回することにした。

「茶話やかテント」での催しやイベントの内容は、各種バザー、炊き出し、各種相談、リズム遊び、演芸、折り紙、手芸、腹話術、人形劇、表札づくり、など多彩なものとなっている。

本企画は手軽にできて効果的という評価が高く、2団体より特定助成を受けて「ネットワーク」から13のボランティア団体へ、テント等機材を提供した。1996年1月現在、被災地全域で月間平均40回程度実施される活動に成長しながら展開されている。

(4)全体をどう見るか——第Ⅱ期の問題と課題

活動資金の確保が一番大きな問題だった。今後、「ネットワーク」の活動が存続できるかどうかにかかわる問題だったからである。

つぎには、やはり、仮設住宅地域での本当のニーズやどこが一番困っているのか、の見きわめができないことだった。あの時期、全体を見ることができたのは行政だったのではないか。

また、それまで避難所で活躍していた他のボランティア団体が仮設住宅地域に集中し、バッティングの問題も起こった。この問題については、社協に調整を頼んだ結果、ボランティア団体会議が開催され、そこで、お互いに大まかな情報交換ができ、整理

ができた。この場での話し合いが、団体同士の顔つなぎの役割を果たし、ネットワークできる基盤ができ、それぞれが独自にパイプを持てるようになった。

さらに、ニーズの把握と掘りおこしについても、以下のような問題があげられる。踏み合の配布については、3000戸にチラシを入れ（新聞等の利用）たので、1000台という要望がでたのではないか。この例のように、細かく対応すれば、ニーズはでてくるのかもしれない。そういう意味でこぼしているニーズがあったかもしれないという反省はある。

ニーズをきちんと把握するために、ニーズ調査が不可欠なのだが、そのための時間、人手ともに足りなかった。800世帯のヒアリング調査をしたが、調査は初めてというボランティアも調査に入ったので、その方法や結果も十分とはいえない。また、日替わりのボランティアにとって、ヒアリングの引継ぎは負荷の重すぎる仕事だったといえる。この時期、保健所、福祉事務所、警察、消防などのそれぞれの行政機関も個別、立て続けにヒアリングを実施し、仮設入居者から「ヒアリング公害」と敬遠されたことは大いなる改善点として行政にも見直しを求めている。

3. 第3期／仮設活動期・後期（地域活動期）〔8～11月〕——ボランティアの新たな挑戦

8月に入ると、仮設住宅でふれあいセンターが続々と開所し、「ネットワーク」はふれあいセンターの運営の立ち上げにかかわっていくことになる。これによって、「ネットワーク」は個人へのケアとともに、地域や地域組織ともどのように関わっていくのかという課題を与えられた。

(1) 地域や組織の支援をどうする——ふれあいセンター

家や肉親をなくした人が仮設住宅に入居しても、すぐに新しいことに取り組むには無理を感じたり気力が出なかったりするのとは当然である。

仮設住宅での老人の死後発見のニュースが新聞紙上などで大きく取り上げられたのもこの時期であった。仮設住宅地域でのコミュニティづくりの必要が世論ともなり、兵庫県が7月から100戸以上（現在は基準が緩和されて50戸以上）の大規模仮設住宅を対象に、常設集会所（ふれあいセンター）の建設を始めた。地縁住民組織がまだ未結成であったこともあり、ふれあいセンターの開所に際して運営はボランティア団体に任せられることとなり、「ネットワーク」は東灘区におけるふれあいセンター運営の受け皿的機能を引き受けた。

まず、8月5日、瀬戸でオープンした「瀬戸ふれあいセンター」を皮切りに、本庄中央、深江浜、六甲アイランドなどの運営も任せられるようになる。

「ネットワーク」のふれあいセンター運営の考え方は、住民の人が集まりやすい、

来たくなる場やプログラムづくりをしようということで、自治会づくりと重ねる考え方をとらなかった。自治会は住民のものであり、センター運営とは関連するが別個のものである。しかし、ふれあいセンター運営の主導権は、できるだけ早い時期に住民の方に移管するというスタンスで活動を始めた。運営を引き受ける以前から、仮設住宅へのヒアリングや仮設住宅の相談員の方への聞き取りなどを行っていた地域では、おおまかな地域の実態や要望を把握できていたので、運営はスムーズにすべりだした。

しかし、そういう段階を踏むことができなかった地域では、いろいろな問題が起こった。地域の人たちの思惑や気持ちとずれがあってトラブルが発生したこともあった。ふれあいセンターの運営は個人ではなく、地域の組織とどうかわるかという話であり、「ネットワーク」がどういうスタンスでどうかわるのか。そのあたりを配慮しなければならないむずかしさがあった。

紆余曲折はあったものの、現在、「ネットワーク」がかかわっている8つのふれあいセンターすべてが住民主体の管理運営に移行し、「ネットワーク」は部分的にかかわるというスタイルになった。情報の集約や提供・交換のコーディネーションを中心とした後方支援という役割に徹している。

なお、ふれあいセンターの設置にともない、茶話やかテントは、ふれあいセンターのない地域型仮設住宅6か所を定期的に巡回訪問し継続することとした。

(2)生活情報MAP——地域型仮設住宅へのサービス

5月中旬より8月にかけて区内8か所に建設された地域型仮設住宅（高齢者・身体の不自由な方を対象）に対し、生活情報MAPを作成して配布する。

(3)労組との連携——移送サービス

仮設住宅は交通機関（駅）から遠く、不便なところにあるので、病院の送迎や買い物などの移送サービスを始めることとした。かつて運転手の仕事をしていた人をボランティアにリクルートしたり、労働組合（連合）と組織提携して車や運転手を計画的に受け入れる。

(4)地域とボランティアの新たな関係——第3期の問題と課題

個人への生活支援に加えて、ふれあいセンターのような地域の組織とどうかわるか、という方向に活動は進展してきたが、プログラムや場づくりという点でこれに充分取り組めたとはいえず、試行錯誤を重ねざるを得なかった。

それは、「ネットワーク」、ひいては地域ボランティアの社会の中でのポジションに関わる問題でもあり、「ネットワーク」がふれあいセンター運営の受け皿になったことに関連して、一部の地域住民やボランティア団体の反発があったり、行政との関

係のあり方が問われた。一度はボランティアに反発した地域の住民の人々からも、その後の住民内部の利害対立に際して、中立的な立場で調停、調整するものとして、再び「ネットワーク」のボランティアが参画を求められた。現在では、東灘区の全ての（13の地域と組織）ふれあいセンターの交流会開催の世話役、事務局の役割も求められ、それらを果たしている。

生まれて間もないボランティア団体が、地域での場や組織づくりの支援を行い、地域組織間のつなぎ役や交流の場づくり、地域組織と行政との関係のつなぎ役を行うような状況は、これまで日本の地域社会ではあまり考えられないことであった。これはあくまで震災地域の特殊事例なのか、他の地域にも適用できるようなボランティアと地域の活動をめぐる新しい事例となるのか、いずれにしろ、このような役割を担い続けるためには、「ネットワーク」というボランティア団体はどのようなあり方をすべきか、どのような内部機能と体制の整備をすべきか、が検討課題になっている。

ふれあいセンターに関わり、実践を重ねる中で「ネットワーク」はいわゆる震災ボランティアから確実に脱却したといえるのかも知れない。

4. 第4期／【12～1月】――地域づくりへの助走

「ネットワーク」の仕事一覧でみれば、年間144件あったふれあいセンターの活動のうちの約半分（71件）をこの12～1月で行い、コミュニティ活動全体（210件）で見ても42%（88件）はこの2カ月で行っている。情報収集・提供活動でも1月は46件と年間（202件）の5分の1をこえる活動を展開している。

そして、ふれあいセンターの活動とならんで、センターでの活動の経験を一般地域にも広げるふれあいサロンの活動がはじまった。

①ふれあいサロン

仮設住宅での活動がある程度の成果をもたらし、安定期に入ったのを見届けて、仮設以外の既成市街地でも在宅高齢者を対象としたふれあい交流事業に取り組みたいと考えた。コミュニティの再構築という視点を入れ、ふれあいセンターなどでの経験の積み重ねを生かし、11月からふれあいサロンの活動を始めた。ボランティアが地域の既存の資源を活用し、既存の地域組織の人々と共働して行うコミュニティ・サロンである。東灘区医師会の協力のもと、初年度はとりあえず、在宅高齢者のふれあい交流の場とし、医療機関の待合室等に民生委員が周辺の高齢者を誘い、ボランティアが運営をサポートする形で、医療、保健、福祉の連携を推進している。11月に1回、12月から定期的に実施しているが、毎回平均20名の高齢者が集い、健康づくりの話やリズム体操、おしゃべりを楽しんでいる。2月現在4ヶ所、4月からはさらに増やす予定である。

ある日の活動の例をあげると、民生委員が呼びかけた21名が参加し、活動内容は医師が一口健康講座を担当、警察からも2名参加してお年寄り向けの交通ルールの話、歌体操や手芸、などとなっている。民生委員にふれあいサロンへの地域の人の参加勧誘を担当して頂いているが、これには福祉事務所から民生委員への声かけをお願いしている。人集めから人づくり、さらにグループづくりから働きがいづくり、それらが生きがいにつながって自分の住んでいる地域において即実践できる本格的実施にむけて、最適な運営方法を検討中である。

(2)ホームページ開設——情報処理・発信

パソコン導入に伴い、ボランティア登録、活動実績のデーター処理を行っている。「ネットワーク」のホームページもデザインして、インターネットへのアクセスも始まった。

開設当初の1月、ホームページは「ネットワーク」の活動、東灘区の被災状況や仮設住宅の概況、仮設住宅内のふれあいセンター、茶話やかテントの紹介といった一般的なことを掲載し、ボランティア・物資の募集といったニュースを随時差し替えていく形で始めた。2月下旬より、ボランティアの生の姿を捉えていくことを目的として、「あるボランティアの一日」と題し、一人のボランティアの活動の様子を取材し、記事にして掲載。ふれあいサロンや茶話やかテントの様子やそれにかかわるボランティアの声をまとめた「今日の茶話やかテント・ふれあいサロン」というコーナーも設置した。これらのコーナーはシリーズとして順次、新しい記事を載せていく予定である。

まだ、ホームページに対する反響はあまり来ておらず、どんな情報が求められているかもはっきりしていない現在、編集方針を探っている状態である。当面、全国のインターネットを利用している個人（特に若い世代が多いと思われる）に向けて、ボランティアの生の声を伝え、卒論作成の参考にしてもらったり、漠然とボランティアに興味のある人にボランティアをより身近かに感じてもらうのに役に立てばと、担当者間で話し合っている。

◇ホームページURL: <http://www1.meshnet.or.jp/~tasukeai/>

◇電子メールアドレス: tasukeai@mx.meshnet.or.jp

当面は、市民・連合ボランティアネットワークとの通信と、全国のNPOへの情報発信を通じて、被災地支援の輪を広げることに活用していきたいと思っている。

(3)地域復興の本番へ——第4期の問題と課題

在宅高齢者救援への110番サービス、仮設住宅での活動を経て、この期は地域の復興に関わるボランティアの長い長い活動の始まりなのかも知れない。

「ネットワーク」は仮設住宅が解消されるまで活動を存続することを社会に公言し

てきた。これは法的には2年間であるが、他地域の事例などから長期化することは避けられない。「ネットワーク」の活動はこの長期化に対応するのは当然のこととして、被災地域における新たなコミュニティ活動のプログラムなどを開発しながら、全国各地のコミュニティの参考にもなるような活動をつくってゆける柔軟で多重多層的な組織を創造していくことが課題である。

第2章 ボランティアの世界（アンケート調査と研修から）

「ネットワーク」には1,100人を越す登録ボランティアがいる。最近の活動は毎月実動約170人程度のボランティアによって支えられ、毎日約20～30名前後のボランティアが活動を行っている。

現在ボランティアの年齢層は男女とも10代から70代までの各層にわたり、職業などもバラエティに富んでいるが、「ネットワーク」の活動が立ち上がった初動期、水くみなどの力仕事をこなし、活動の大きな部分を支えたのは、学生などの若いボランティアであった。震災直後の2月～3月の混乱期が過ぎ、春休みが終わって新学期が始まると、多くの若者たちは学業に戻っていった。

この時期にボランティアとして「ネットワーク」に参加した若者たちひとり一人は「ネットワーク」の活動の中で、何を見、何を感じたのだろうか。同じ時期に活動に参加したボランティアの小林理咲さんたちが、初動期に活動した若者ボランティアの声を聞き記録に残そうと、1995年3月～4月にかけてアンケート（第1回）を行った。

さらに、これに加え第1回のアンケートを補足する形で、初動期に活動した若者に再アンケートを行い、また、それと比較してその後も継続して活動しているボランティアや現在活動中のボランティアの声も聞きたいという提案があった。提案者は高橋、一井さん。いずれも初動期に活動した若いボランティアであり、高橋さんはいまも活動を続けている。この提案は、「ネットワーク」の記録を作成する作業とちょうど重なり、2回目のアンケート調査は1995年12月～翌1月に実施された。

この章の“1 ボランティアの声”は、高橋、一井さんによるアンケートの調査結果のまとめである。

また、「ネットワーク」では、1995年6月以降ボランティア研修を実施してきた。この研修のうち、特にB、C研修では、活動の中で悩み迷うボランティアの声が沢山出されている。これらの声を“2 研修におけるボランティアの声”で紹介する。

1 「豊かな出会い」と「感謝される喜び」——ボランティアの声

初動期に活動したボランティアは圧倒的に10代20代の若者によって占められていた。活動の現場で若者の情熱と思いはプラスにもマイナスにも作用した。しかし、日本にはまだ未消化だったボランティアという言葉を定着させたのは、彼らの働きでもあった。新学期になると、彼らは引き潮のように引いていった。若者が身体を動かして活動した経験から感じ取った感想で最も多かったのは、「豊かな出会い」という声だった。また、現在のボランティア層は10代から70代までと広いが、若者と共通する声として聞こえてきたのは、「感謝される喜び」だった。

1. ボランティアを知ってもらいたい……アンケート調査の目的と内容、方法と回収状況

活動に参加した若者の声、また、いま現在活動している人たちの声を聞きたいと、アンケートを2回（第1回は1995年3～4月と第2回は1995年12～翌1月）実施しました。（以下：高橋、一井さんの報告）

①アンケートの目的

アンケートを行った目的は2つありました。まず一つは日本人はボランティアというものに慣れていません。アメリカや他の外国は常日頃からボランティアをする、してもらうという習慣があります。その習慣がない日本ではボランティアとは何か、どんな人が一体見ず知らずの人に何をするのかという不安と疑いがあるのです。特にお年寄りの方々にはボランティアをなかなか受け入れてもらえません。二つ目は若い人が大勢参加していることです。もちろん来る動機はさまざまで、「何か少しでも役に立ちたくて」という人もいれば、「ひまだったから」という人もいました。しかし、やることは同じです。そのことをミーティングで話し合ったりすると、とてもよくわかりました。どんな人がいて、どう思ったのか、被災者の人達にもっと私たちのことを知ってもらえれば、少しずつでも受け入れてもらえて安心感を持ってもらえると思ったのです。

②アンケートの質問内容

アンケートは2回実施し、2回目には初動期に活動していた人達に再アンケートを実施しました。それぞれの内容は以下のとおりです。

●1回目アンケートで聞いた内容：対象は初動期に活動した人

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①名前（年齢）②職業または学校名③ボランティア活動をするにあたってのきっかけ、または動機④ボランティア活動をしていて嬉しかったこと、悲しかったこと⑤被災者の方たちへ一言⑥「東灘・地域助け合いネットワーク」というボランティア団体に対して思うこと、望むことetc. |
|---|

● 2 回目アンケート（再アンケート）で聞いた内容：対象は初動期に活動した人

- ①名前
- ②実名を載せることについて（実名／イニシャル／匿名希望の別を聞いた）
- ③ボランティア活動期間
- ④参加した仕事
- ⑤ボランティア活動を通して得たこと
- ⑥ボランティア活動を経ての自己変化（成長面、反省面など）
- ⑦近況報告

● 2 回目アンケートで聞いた内容：対象は現在活動している人

- ①名前（年齢）
- ②実名を載せることについて（実名／イニシャル／匿名希望の別を聞いた）
- ③職業または学年
- ④ボランティア活動をするにあたってのきっかけ又は動機
- ⑤いつから活動しているか（活動のペース）
- ⑥参加している仕事
- ⑦ボランティア活動をしていて嬉しかったこと、悲しかったこと
- ⑧「東灘・地域助け合いネットワーク」というボランティア団体に対して現在思うこと、望むこと、問題点など
- ⑨被災者の方たちへ一言
- ⑩これからの方向性について
 - 1. 自分自身の方向性について（ボランティア活動との両立）
 - 2. 団体の方向性について 3. 東灘の方向性（被災地復興に対する思い）

● 2 回目アンケートで聞いた内容：対象は初動期から現在まで継続活動している人

- ①名前（年齢）
- ②実名を載せることについて（実名／イニシャル／匿名希望の別を聞いた）
- ③職業または学年
- ④ボランティア活動期間
- ⑤ネットワークでの主な仕事（役割）
- ⑥初動期と現在の対比（変化面、改善面など）

③アンケートの方法と回収状況

アンケート方法、配布数、回収合計、回収率は以下の通りです。

実施時期	アンケート名	アンケート方法	配付数	回収数	回収率
1回目 1995.3～4	初動期の声	手渡し	約90	53	約59%
2回目 1995.12～ 1996.1	初動期の声 (再アンケート)	郵送	53	26 (1回目の返 答ありが27)	51%
	現在の声	手渡し	60	20	33%
	継続者の声	手渡し	20	3	15%
合 計			約220	76	約35%

2. 出会いの感動——アンケート調査結果

アンケートの意見を設問ごとのマップにまとめました。なお、この作業は以下の6名で取り組みました。

(作業者名：一井美智子、高橋良輔、松村一史、多田信之、大八木祥仁、竹山芳弘)

まとめの方法としては、似通った意見を集めてグループをつくり、それに題をつけていくKJ法を使いました。しかし、いろいろな人のいろいろな意見を型にはめ込んでしまうという事になってしまうのではないかと疑問を抱えながら作業をしていました。いちばん難しかった作業は題をつけることでした。なかなか意見がまとまらず大変でした。でも、完成したマップを見て、とりあえずホッとしました。

(1)若者のボランティア体験——初動期に活躍したボランティアの声のまとめ

初動期のボランティアの声については、アンケートの中から3つの設問(①ボランティア活動をしていて嬉しかったこと、悲しかったこと〔1995年3～4月調査〕 ②ボランティア活動を通して得たこと〔1995年12月～翌1月調査〕 ③被災者の人達にひと言〔1995年3～4月調査〕)についてまとめ、マップを作成しました。回答者はほとんど10代20代で、兵庫県以外からのボランティアが多くを占めました。遠方から

のボランティアの参加が多く、人の入れ替わりが激しい時期でもありました。

マップ①～③についてコメントしてみますので、これを手引きにマップを読んで下さい。

▲（マップ①——ボランティア活動をしていて嬉しかったこと、悲しかったこと）

ボランティア活動をして嬉しかったこと、悲しかったことについての声には、大きく分けると4つの段階があります。1つは神戸に対する第一印象。2番目は忘れかけていた感情や現実であり、ボランティアが活動した結果感じた感想であると思います。3番目はさらに踏み込んで、心のふれあいやボランティアってなに？というような、喜びや迷いや疑問も含めた意見です。4番目はそれでも続くボランティアという率直な声でした。

▲（マップ②——ボランティア活動を通して得たこと）

ボランティア活動を通して得たことについての声には、5つの意見があります。1つは豊かな出会いという感想で、この感想が一番多く、様々な出会いがあったことがよく分かりました。2番目は思いがあればという感想で、気持ちがあれば誰でも参加できるという思いが伝わってきます。3番目は人間を考えたという意見で、人と人との助け合いの強さや哲学的な思いです。4番目は喜びと難しさの間でという感想で、ボランティアという立場や人間の色々さ、自分が成長したという実感です。5番目は体験を生かすという意見で、震災地を実際に見て、この経験を生かしたいという思いでした。

▲（マップ③——被災者の人達にひと言）

被災者の人達にひと言という声には、3つの意見がありました。1つは励ましの言葉という意見で、この意見が一番多く、被災者の人達に、頑張ってくださいや前向きにという意見でした。2番目は被災者の自立を要すという意見で、自分で出来ることは自分でという意見です。3番目は地域への提案という意見で、被災者の気持ちを一つに、人と人とが助け合って地震に強い町をつくってほしいという思いでした。

(2)主婦・シニアの声は——現在活動中のボランティアの声のまとめ

現在活動中のボランティアの声については、アンケートの中から2つの設問（④ボランティア活動を通して嬉しかったこと、悲しかったこと ⑤東灘・地域助け合いネットワークに対して現在思うこと、望むこと、問題点など〔いずれも1995年12月～翌1月調査〕）についてまとめ、マップを作成しました。

回答者に多かったのは地元の主婦・シニアです。

マップ④～⑤についてコメントしてみます。

▲（マップ④——ボランティア活動を通して嬉しかったこと、悲しかったこと）

ボランティア活動を通して嬉しかったことについては、いろんな人との出会いやクライアントの人達からの「ありがとう」のひと言に対して、感謝される喜び、充実感といった声が多いように思います。その反面、悲しかったことという声については、クライアントから震災時の話を聞き、言葉が出ない思いや、自分の力不足を感じたという声もあります。

▲（マップ⑤——東灘・地域助け合いネットワークに対して現在思うこと、望むこと
問題点など）

東灘・地域助け合いネットワークに対して思うこと、望むことについては、どこまでがボランティアなのかという疑問や、団体が継続的に活動してほしい、また団体に参加できたことに対する感謝の気持ちなどが多くあり、またそれに対しての団体への提案といった意見があります。

(3) 多くの人に読んでほしい——まとめを終わって

このアンケートをまとめる作業をしていて、3つのことを感じました。

まず、意見の内容ですが、全体的にマップを見ても、「豊かな出会い」という欄に意見が集中しています。多様な人に出会えたことに感動したボランティアが多かったことがよくわかります。人と人の出会いの素晴らしさを皆が感じたんだと思います。そして、ささやかでも人の役に立てた体験から、「ありがとう」のひと言の素晴らしさ、感謝される喜び、充実感など、大切なことを再確認できたようです。この点は、ボランティアの一人として、僕も強く思いました。

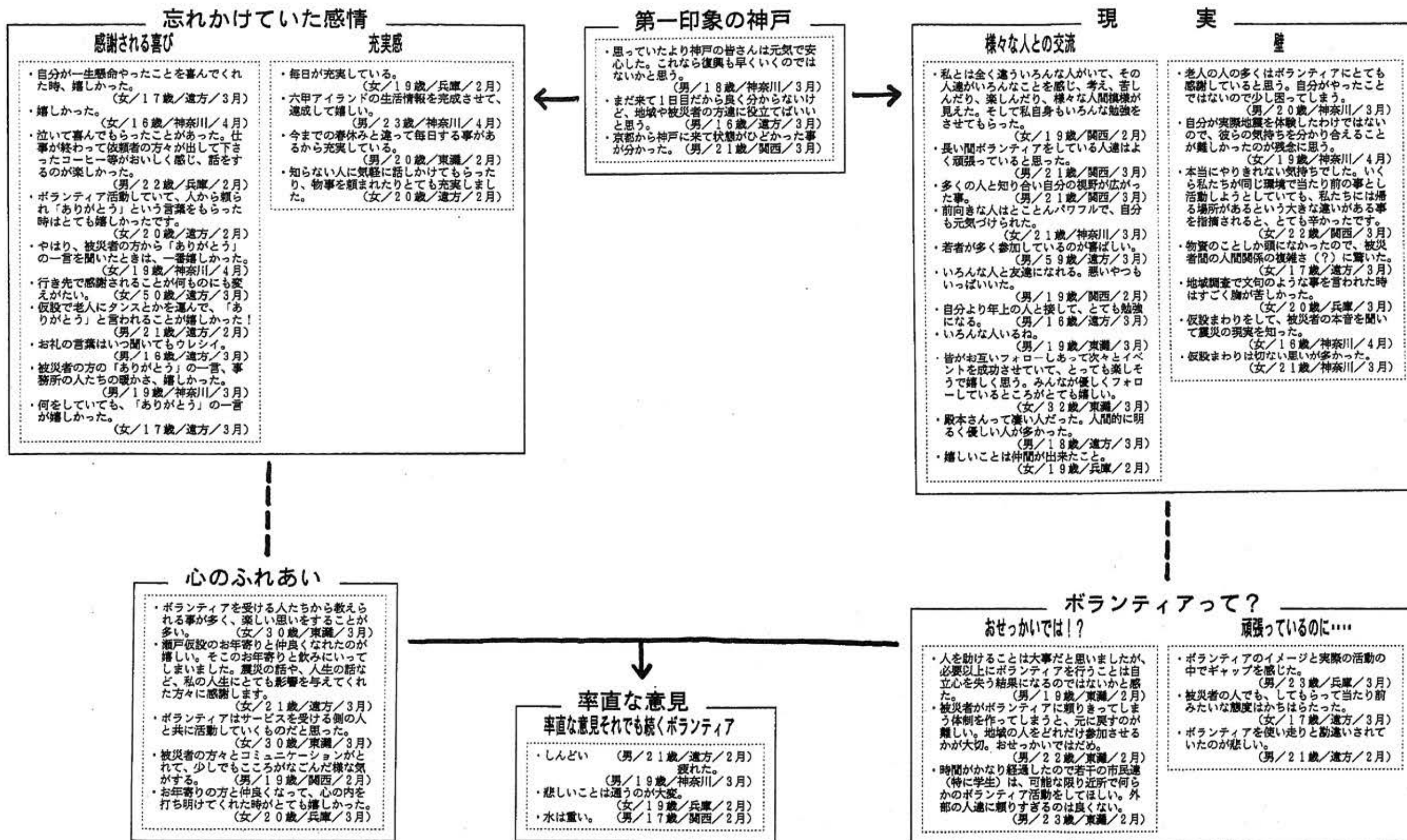
また、第1回アンケートの目的のうちの一つは「神戸の人達にもっと私たちボランティアのことを知ってもらいたい」というものでした。この目的を達成させるため、このアンケートをふれあいセンター等に配布し仮設住宅の人たちにも読んで頂けたらと思います。

さらに、初動期だけではなく、現在でも「東灘・地域助け合いネットワーク」の活動内容の方向性に対して疑問を持っている人もいたんだなあと思いました。そこで、このアンケートはさらに、まとめかたを工夫して、ボランティアの声や情報の1つとして「ネットワーク」に参加するすべての人達に読んでもらいたいと思います。

(マップ1)
(初動期の声: 1995年 3月~ 4月に回収)

ボランティア活動をしていて 嬉しかったこと、悲しかったこと

注: () 内は、その意見の回答者のプロフィール
(男女、年齢、出身地域、活動開始時期)
出身地域は東灘区、兵庫県、関西、神奈川、遠方に区分



(マップ2)

(初動期の声: 1995年12月~1996年1月に回収)

ボランティア活動を通して得たこと

豊かな出会い

人とのつながり

- 友人、仲間 (男/19歳/神奈川/3月)
出会い、ふれあい (男/17歳/関西/2月)
- 素晴らしい友人、先輩を得た。 (男/18歳/神奈川/3月)
- 普段接することのない様々な人との出会いのおもしろさ (男/36歳/東海/2月)
- 自己中心的な人や、他人への思いやりの少ない人が多いなかで、特に若い人が大勢ボランティアで、青春のエネルギーを費やして活動していた姿には、とても感動しました。そして、一緒に行動した人達(若い人も)は、とても気持ちの素直ないい方ばかりでした。そういう人達だからこそ、わざわざ遠方より集まってきたのかもしれないね。いい人同士のふれあい...爽快です!! (女/50歳/遠方/3月)
- お年寄りや子供、障害者の人々とふれあうことが出来たこと(今まで、そういうことを経験したことが一度もなかったのに、周りの人に迷惑をかけたこともあったけど、とても楽しかった。) (男/20歳/東海/2月)
- ボランティア同士や、ボランティアと被災者の方々、そして被災者同士など、人とのつながりは、とてもスバラシイものだと思えることが出来た。 (女/17歳/遠方/3月)
- 「手伝いたい」と思っている人がたくさんいるので、びくびくし、みんないろいろな年齢で忙しい合間に来ているので、「世の中いらい人が多いんだな」と思った。 (女/17歳/遠方/3月)

多様な出会いで視野が広がった

- いろいろな意見 (女/19歳/兵庫/2月)
- 多くの人達と知り合い自分の視野が広がった。 (男/21歳/関西/3月)
- 被災者の方々との交流が持てたので、様々な物の見方や価値観に触れざるを得なかった。 (男/23歳/兵庫/3月)
- これまでの自分の世界に無かったことや、いなかった人々と出会ったことによって、自分の視野が広がったと思う。 (女/17歳/遠方/3月)
- 一人で暮らしている老人の方の気持ち、ボランティアに来ている人の若い学生の方々、いろいろな人を見ることができ、とても勉強になりました。 (女/20歳/遠方/2月)
- 震災直後の被災地などにわざわざ集まってくる人々、おまけにボランティアをするためにやってくる人々が集まる場所と一緒に活動していたわけだから、それは様々な出会いと多様な交流がもてたのは言うまでもありません。 (男/23歳/兵庫/3月)
- 同じネットワークの武内さん、高橋さんの両名からは多くを学んだような気がする。私の場合、高校、大学と限られた範囲の人としか付き合っていなかったから、別の世界の人との出会いは良かった。高橋さんと話して、人間、高校、大学へ行けば話が通じないと感じた。古くからのボランティアが帰っていく中で、7ヶ月も続けて神戸を支援している高橋さんの話を聞いたのはとても良かった。 (男/18歳/遠方/3月)

酒

- 酒 (男/?歳/関西/2月)

ネットワークと私

- 活動に参加するまでは、ボランティアは皆、個々で活動し、他のボランティアとの関係はあまり無いと思っていました。それが、こんなに組織化されていて、ミーティングも1日3回行い、全員とコミュニケーションをとっていたので大変驚きました。1日しかいない人も長い間いられる人も同じように意見を述べる事ができ、皆が仲間意識を持ち、活気づいている。これはとてもすごいことです。きっと、この雰囲気は、地域の皆さんも活気づけているでしょう。私はボランティア活動を通して、「助け合いのパワー」を強く感じました。 (女/17歳/遠方/3月)
- 中村さんと殿もとさん、星野先生等の熱意あふれる姿を間近に見、「マンパワー」の意味を理解することができたこと。 (男/20歳/東海/2月)
- 組織の効率的な運営、プランニング・交渉のスキルの向上。 (男/36歳/東海/2月)
- 助け合い・わかりあいの気持ち。 (女/19歳/兵庫/2月)
- たった10日間だったが、こんな私を受け入れてくれた、この「東海・地域助け合いネットワーク」さんには、とても感謝したいと思っています。

思いがあれば

その気になれば

- ボランティアは本当に気持ちが重要なものであると、手に職がなくとも気持ちがあれば、人の心を癒めるんだと思った。 (男/20歳/神奈川/3月)
- 自分の発する言葉一つ一つ気配りをし、責任を持たなければいけないという事を学んだ。 (女/17歳/遠方/3月)
- 若い人達の参加が多く、この様な心を持つ人があるということも実感して帰って来た。増加することを望みます。 (男/59歳/遠方/3月)
- 健康でありその気になれば、誰でも参加出来る。 (男/59歳/遠方/3月)

自信を持てた

- あまり最後までしっかりやる方ではなかったから、物事をやり通した達成感。 (男/23歳/神奈川/4月)
- 様々な出会いと新しい自己発見があったと思う。言葉にはうまく言い表せないが、何らかの自信がついたと思う。 (男/20歳/神奈川/3月)
- 多くの人々と出会う事ができ、しかも自分の意見をしっかりと持っている人達ばかりだった。そのため、いろいろな考えを聞くことができ、自分の思いを再度確認する事が出来たような気がする。 (女/19歳/神奈川/4月)
- バザーでほとんどの品物が売れたのを見た時、ボランティアというものがいかに被災者にとって必要なものであり、役立つものか分かった。 (男/18歳/神奈川/3月)

体験を生かす

震災ボランティア体験を生かす

- TVでは知ることの出来なかった震災を実際に感じ、より身近なものとしてとらえるようになった。 (女/18歳/神奈川/4月)
- 当地(神奈川)でも、いつ大きな地震が起こってもおかしくないと言われています。言葉は悪いかもしれないけれど、その時の為にも貴重な経験(組織作りなど)をさせてもらったと思います。 (男/19歳/神奈川/3月)
- これから得ること: アスベストによる病気。 (女/19歳/兵庫/2月)
- 地震に対する気構え。 (男/19歳/神奈川/3月)
- 実際被災地に行ってみて、ブルーシートや、電車の走れない線路を目の当たりにすると、それまでのブラウン管を通しての光景より、被害がどれほど甚大であったかが、わかり、ボランティアから帰った後も、テレビの特集や本などで復興具合を確かめるなど、関心が持てた。 (男/18歳/神奈川/3月)

人間を考えた

人間は強い

- 人の力の及ばない、自然の力のすさまじさを初めて体験した。そして、それに負けない程の人間の生きようとする強さを知ったと思う。 (女/17歳/遠方/3月)
- 大変な災害の中で自分だけ大変ではないと町の人(被災者)、ボランティアの人が、人と人として助け合い、生活をしている中、人間のつながり、人間の強さをとても感じました。 (女/20歳/遠方/2月)
- 一人一人の弱さと団結する事で生まれる強さを見る事が出来た。 (男/19歳/神奈川/3月)
- 当たり前の事だけど、人はお互いにこんなに助け合えるのだと再確認出来ました。大変な事件ほど、自分とは無関係なこととして、捉えてしまいがちですが、それはTVのトリックなのだと思います。あと、人って強いなと感じました。私達は、もっといろいろなことにかんばらねばと思います。 (女/22歳/関西/3月)

人類の実感

- 僕が来たのは、もう2ヶ月もたつてからだったからかもしれませんが、神戸の人達はタフで温かい人が多く、逆に僕等が元気付けられることも少なくなかった。愛な物言いかもしないけれど、「人間って捨てたもんじゃない」と感じた。 (男/19歳/神奈川/3月)
- 初対面の方々や数多く接することで、人間という、分類と同じ仲間であるという実感がわいてきたように思います。 (女/21歳/遠方/3月)

哲学した

- 「死」の存在。 (女/19歳/兵庫/2月)
- 家が崩れて、身一つとなったお年寄り...それでも仮設住居の中で涙としていらっしゃる方を見て、生きるって何だろう?...と、哲学的な事を考え直す機会を得たように思います。 (女/21歳/遠方/3月)
- ボランティアに行っていた時は、分からなかったことが、帰ってくると、とても重要な事だ!と思うことがたくさんあった。 (女/17歳/遠方/3月)

喜びと難しさの間で

違いが分かるボランティア体験

- ボランティアという立場の難しさを知った。 (女/18歳/神奈川/4月)
- いざという時に、ボランティアが大切だと思った。まだまだ日本は、金銭的にボランティアが成り立っていく状態ではないと感じた。 (男/18歳/遠方/3月)
- 人間って本当に色々な人がいることを知った。環境によるものも多いが、性格により物事に対する取り組み方も違うものだ。(前向きな人もいれば、逆の人もある)ボランティア側を見ても、一つの物事を見る目は一つではない事をつくづく感じた。(良い面、嫌な面ともに) (女/21歳/神奈川/3月)
- お金は怖い (女/19歳/兵庫/2月)
- 人の役に立つことがどれほど難しいことかわかった。というのは、何か役に立ちたいと思っても、実際どの様な行動をとれば良いか分からなかったし、実際どれだけ役立ったか分からなかった。 (女/20歳/兵庫/3月)
- 同じ地震ボランティアに対して、人によってそれぞれ違った考えをしていた事がわかった。例えば、こちらが被災者に対して同じように接していても、感謝してくれる人もあれば、ボランティアなんか必要ないと言いつつ怒りだす人もいたこと。 (男/19歳/東海/3月)

人の為に働く喜びと誇り

- 多分、私一人でしていたボランティアはたいしたことではないと思います。でも、一人一人が集まって行った事はとても大きい存在となり、自分達にも成長をあたえてくれたと思います。 (女/20歳/遠方/2月)
- 物事に対して、自ら動こうとする意思。 (男/19歳/神奈川/3月)
- 自分から進んで動けるようになった。 (女/18歳/神奈川/4月)
- 人の為に働く事の喜びを知ることが出来た。 (女/18歳/神奈川/4月)
- 今までひたすら人に頼って生きてきた自分にとって、生まれて初めて人に奉仕したわけだが、たった1週間ではあったが、自分の行為に誇りが持てた。 (男/18歳/神奈川/3月)

(マップ3)

(初動期の声:1995年 3月~ 4月に回収)

被災者の人達にひと言

被災者自立を要す

- ・ボランティアもこれから少なくなる可能性があります。これをプラスに考えがんばってください。
(男/20歳/神奈川/3月)
- ・本当に困っている人は遠慮などせずにボランティアを利用してほしい。そして少しでも動ける人は身の回りから自分たちでしていきましょう。神戸は神戸の人で!
(男/23歳/東灘/2月)
- ・自分でできることは自分でするように。
(女/20歳/兵庫/3月)
- ・早く自立できるように頑張ってください。
(男/23歳/兵庫/3月)
- ・自分で出来る事は自分で。
(女/19歳/兵庫/2月)
- ・自分で出来ることは自分でしろ。
(男/17歳/関西/2月)
- ・大変だと思うけど頑張って自立して欲しい。
(男/20歳/東灘/2月)

励ましの言葉

頑張ってください

- ・大変だと思いますけど、地域復興に向けて頑張ってください。
(男/21歳/関西/3月)
- ・一日も早い復興をお祈りします。お体に気をつけて、頑張ってください!!
(女/50歳/遠方/3月)
- ・自ら立ち上がろうとしている所を見ると何とも言えないががんばってや!
(男/21歳/遠方/2月)
- ・頑張ってください。
(男/19歳/東灘/2月)
- ・これからもっともっと不自由なことがあると思うけど、頑張って前向きに生きてさい。
(女/16歳/神奈川/4月)
- ・1日も早く以前の生活ができるように頑張らしましょう。
(女/32歳/東灘/3月)
- ・大変でしょうが頑張ってください。
(男/21歳/関西/3月)
- ・未来に向けて精一杯頑張ってもらいたいと思う。
(女/19歳/神奈川/4月)
- ・頑張ってくださいといしか言えません。
(女/22歳/関西/3月)
- ・頑張ってください。
(男/21歳/遠方/2月)
- ・頑張らしましょう。
(女/17歳/遠方/3月)

前向きに

- ・常に明るい気持ちを持って、前向きに生活してほしい。
(男/59歳/遠方/3月)
- ・悲観的に考えず、何でもいように考えましょう。絶対いいことがありますよ。
(男/22歳/兵庫/2月)
- ・一瞬にして自分たちの財産は無くなってしまいましたが、それをバネにすると、世界一の町に変わる。それを手伝わせてくれたことを感謝します。
(男/16歳/遠方/3月)
- ・「頑張ってください」なんて言っても、嬉しくも何ともないと思いますので、晴れの日もあれば嵐の日もあります。今は嵐ですが、これが過ぎれば天気になるので安心して、今度は絶対幸運がきます。
(女/20歳/遠方/2月)
- ・“人間万事塞翁が馬”私も被災地の住人の一人としてこんな大変な出来事さえプラスに出来るように共に頑張らしましょう。
(女/30歳/東灘/2月)
- ・人生楽あれば苦もある。生きていけば以前と同じ自分よ。
(男/18歳/遠方/3月)

地域への提案

被災者の気持ちを一つに

- ・被災者同志喧嘩をしないようにしましょう。
(女/17歳/遠方/3月)
- ・気合を入れて頑張。これからは被災した人達の気持ちが一つになることが大切。
(男/23歳/神奈川/4月)

地震に強い町

- ・自分の街を建て直せ。
(男/19歳/神奈川/3月)
- ・家族を亡くされた方はその悲しさを乗り越えて欲しい。今ある命を大切に生きて地震に強い街をつくってほしい。
(男/16歳/遠方/3月)

被災者意識を持つな

- ・いつまでも被災者意識を持つな。市は言ったら相手してくれる。そのうち何とかなるさ。
(男/19歳/東灘/3月)

大事なのは助け愛♡

- ・一緒に頑張りたい。
(男/19歳/関西/2月)
- ・“地域助け合いネットワークはずっとずっと続けます”と言いたいです。
(女/21歳/遠方/3月)
- ・元の暮らしに一步でも近づけるよう私は一つでもお手伝いしたい。
(女/19歳/関西/2月)
- ・地域・助け合い
(男/22歳/東灘/2月)

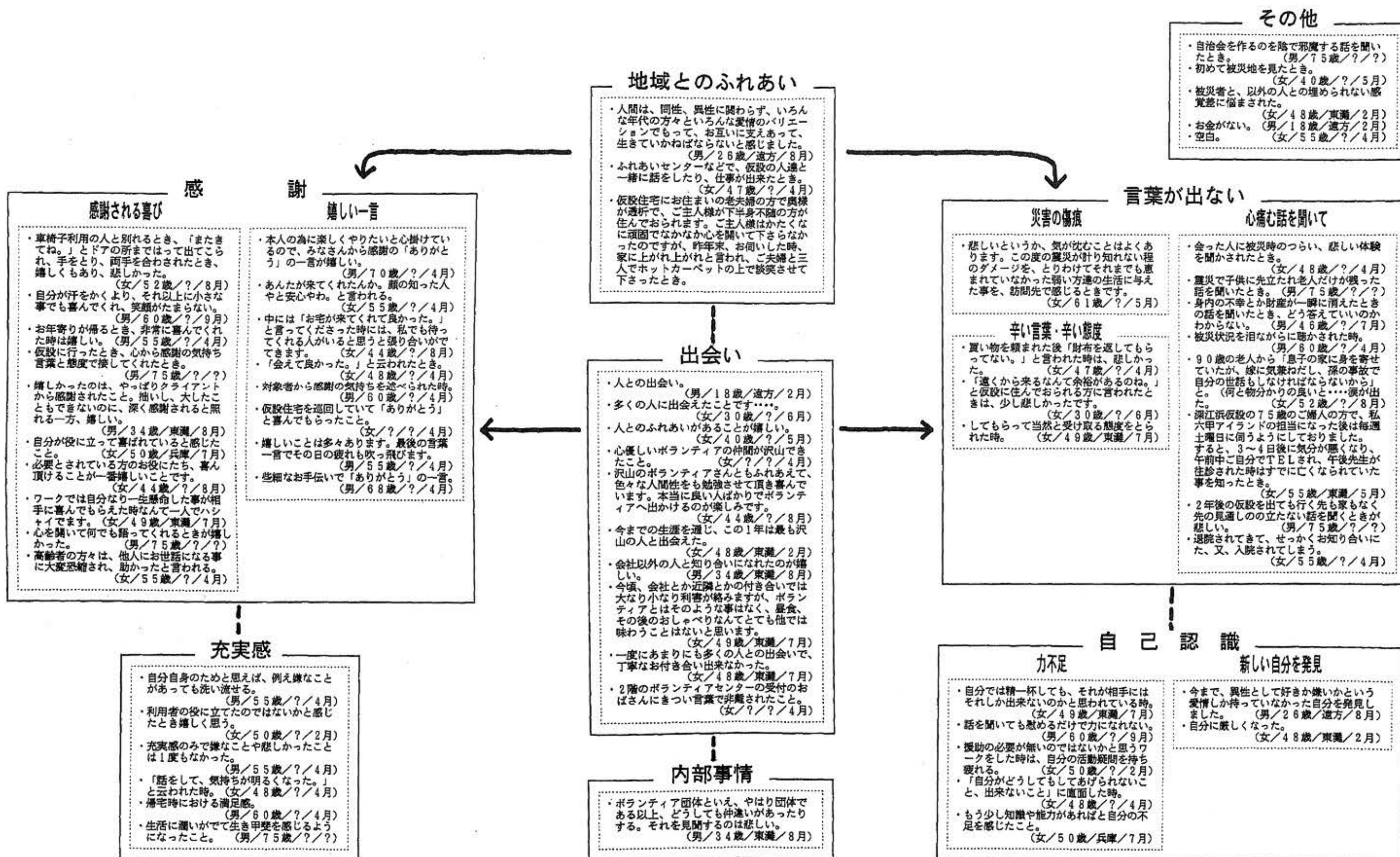
その他

- ・一刻も早く元の生活に戻れますように。
(男/19歳/関西/2月)
- ・言葉はまだ見つけれない。
(女/21歳/神奈川/3月)
- ・また、あおう。
(男/18歳/神奈川/3月)
- ・また来ます。(えっ?もうくるな?)
(男/19歳/神奈川/3月)

(マップ4)

(現在の声: 1995年12月~1996年1月に回収)

ボランティア活動を通して 嬉しかったこと、悲しかったこと



(マップ5)
(現在の声: 1995年12月~1996年1月に回収)

東灘・地域助け合いネットワークに対して 現在思うこと、望むこと、問題点など

疑問

- どのような基準によって、依頼を受ける断るかを決めているのか。ボランティア団体が便利屋になるのか。
(男/26歳/遠方/8月)
- 仕事内容など、詳しく頼んでいるか、疑問に思う。個人の判断で解決している事多い。
(女/52歳/?/8月)
- わからない。(どこまで被災者と関わっていいかわからない)
(女/48歳/?/4月)
- ホームヘルパーと同じ仕事をするのに疑問を感じます。
(女/47歳/?/4月)
- 地元の支援をするのか。
(男/26歳/遠方/8月)
- 今は同じ人からの依頼を多く受けているが、本当に助けを必要としている方々のサポートが出来るのか?
又、そうするにはどうすれば良いのか考えねばならないと思う。
(男/26歳/遠方/8月)

その他

- 勉強する機会が欲しい。
(女/30歳/?/6月)
- 話し相手、は・ひ・ふ・へ・ほでは話にならない。それかといって聞くだけでうっかりしゃべって後悔することが多い。
(女/52歳/?/6月)
- たまに来て少し首をつっこんだだけで帰って、申し訳なく思います。
(女/47歳/?/4月)
- 空白
(女/?/?/4月)
- 特になし
(女/40歳/?/5月)
- 空白
(男/60歳/?/9月)

提案

- ネットワークが進むこれからの方向性(計画)を何らかの形で知らせて欲しい。
(月に一度か2ヶ月に一度くらい)
(女/55歳/東灘/5月)
- 自主財源の確保。
(女/48歳/東灘/2月)
- 長期展望の設定。
(女/48歳/東灘/2月)
- 出来れば、もっと助けの必要な人が何処かにいらっしゃるのではないと思う。そのような人を見つけてあげて手助けしてあげてほしい。
(女/50歳/?/2月)
- ネットワークにはとても感謝している。息の長い活動を望みます。
(男/46歳/?/7月)
- 前もって細かい予定表が出来れば参加する人に便利と思う。尚、先に人員の予約を求め、時間に制約のある場合は直接現地に赴く様に指示する。
(男/68歳/?/4月)
- その根本となるボランティア精神といったものを現場で動いている人間にも示してほしい。
(男/26歳/遠方/8月)
- 地元(東灘)の人に、もっと参加してほしいと思う。
(男/34歳/東灘/8月)
- 本当に困っている人に手を差し伸べるべき。どうして探すのか問題があるが……。
(女/52歳/?/8月)
- ワークの振り分けの件ですが、どうしても嫌な所には誰も行きたくありません。でも、それでは行く人が決まってきました。皆さんが適当なく行き、経験を共有できるように、お考え頂けたらと思います。今は「行った事がある人。」と手を挙げさせていますが、初めて行っても出来ないことはありません。利用者の方には、不都合かも知れませんが、一度行けばわかり、ボランティアさんの勉強にもなります。
(女/44歳/?/8月)

批評

- 学生の参加が少ないのが残念。
(男/34歳/東灘/8月)
- 現状は非常に良い。
(男/60歳/?/4月)
- 私は他のグループにない和気相合いの非常に良い雰囲気は何とも言えない。
(男/75歳/?/?)
- 代表の中村順子さんの情熱には頭が下がります。
(男/70歳/?/4月)
- 代表者を筆頭にいい人ばかりで、楽しく参加できている。
(男/46歳/?/7月)
- 人の批判はいくらでも出来るが、自分がその立場に立った時、その人以上に出来る保証も自信もある人はいないと思います。
(男/75歳/?/?)
- 代表始め幹部の方々が誠心誠意やってくれているので多くを望まない。
(男/75歳/?/?)

現状維持

- これからも長い活動となりますので、あまり無理せず努力してください。
(男/70歳/?/4月)
- 当初(小生は4月より参加)よりも事務所、会員仲間、ワークの内容など、雰囲気、活動内容など良くなっており、現状通り続けてもらいたい。
(男/55歳/?/4月)
- 参加しやすい現状を永く維持継続してください。
(男/60歳/?/4月)
- ご苦労だと思いますが、とてもうまくコーディネートなさっていられると感心しています。様々なボランティアを心の深い受け入れ方で仲間に入れておられて(その恩恵に与っている一人です)素晴らしいと思います。何も特技のない者でも参加できるような今の状態を、これからも続けて頂ければ有り難いと思います。
(女/61歳/?/5月)

感謝

- 東灘・地域助け合いネットワークの活動微力ながら参加できた事は大変良い経験になりました。
(男/46歳/?/7月)
- 私にとっては、こんなペース(月2回)でワークが出来るのが丁度良かったです。
(女/30歳/?/6月)
- 多くの方々が協力している姿も素晴らしいです。
(男/70歳/?/4月)
- 長い間お世話になりました。今後ともよろしく願います。
(男/18歳/遠方/2月)
- ネットワークのおかげでボランティアワークに参加させて頂き感謝しています。
(女/50歳/?/2月)
- 事務や様々な問題があると思いますが、良いチームワークで運営しておられると思います。頑張ってください。楽しく活動できるので感謝しています。
(女/50歳/兵庫/7月)

2 「学び」から提案へ ― 研修におけるボランティアの声

1 ではアンケート調査におけるボランティアの声を聞いてみたが、ボランティア研修でも毎回、疑問やとまどい、また提案など多様なボランティアの声が出されている。それらの意見に対して、「ネットワーク」では、何らかの回答を提示するなど、できるかぎりの対応をしながら、ボランティア個々人とのコミュニケーションをはかっている。ここでは、その一端を紹介したい。

1. 認識・知識・提言・交流 ― ボランティア研修

震災後1か月を経た時点で、引き続き、高齢者を中心とした被災者に対して、地元
に根を張りながら息の長い活動を行うため、6月初旬よりボランティア研修プログラム（A研修・B研修）を実施している。さらに、11月からは、C研修を始めた。各研修の内容については以下の通りである。

〔研修の目的〕

- ・ボランティア自身に「ネットワーク」の目的をより良く理解してもらい、また、「ネットワーク」として活動していることを自覚してもらうこと。
- ・高齢者・障害者の方々への対応の仕方について、「こころ」と実際のケアの両面から最低限の知識を得ることにより、クライアントとボランティアの双方に安心感を与えること。

〔研修の種類と内容〕

①A研修 ―――基礎コース

- ・オリエンテーション（1時間）
「ネットワーク」の活動と被災地・仮設住宅の現状説明
- ・被災者のこころのケアについて（1時間20分）
臨床心理士による被災者との接し方・信頼関係の築き方

②B研修 ―――初級コース

- ・介護や介助に関するトレーニング（1時間40分）
看護資格者による高齢者・身障者の基本的な介護（ロールプレイ）
- ・被災者支援についての意見交換（40分）
経験者を交えて被災者訪問についての質疑と意見交換

③C研修 ―――リフレッシュ研修

- ・ブレインストーミング（1時間20分）
ネットワークの今後の活動のあり方について
- ・ディスカッション（1時間10分）
1つのテーマのもとに各自のアイデアを提案し討議する

〔研修の持ちかた〕

- ・講師や受講者に無理のないよう1回の研修時間は2時間30分程度とし、それぞれ月2回程度平日・週末の両方に設定する。
- ・各ボランティアが「ネットワーク」で活動を始めて2週間以内にA研修を受講することとする。
- ・B研修は介護のプラクティカルトレーニングを含むので、1回の受講は12名以内におさえる。
- ・AおよびB研修の両方を終了した受講者には、それぞれ終了証とともに、「ネットワーク」の名刺（氏名欄は空欄のもの）を50枚支給、今後の訪問先との連絡等に活用してもらう。
- ・C研修では、それぞれの被災地のボランティア活動を通じて得た考えや知識を今後の「ネットワーク」の活動に生かすべく、自由にアイデアを交換・提言し合う場とする。
- ・C研修は、受講者の希望により複数回（1～2か月毎）参加可能とする。なお、テーマは事前に発表し、参加を促す。
- ・「ネットワーク」の研修は広く一般に公開し、区内ふれあいセンターの協力者の方々などの積極的な参加をお願いする。

2. 活動アイデアの泉——研修におけるボランティアの声

ボランティアB研修は初級者用コースである。C研修はベテランボランティアのブレインストーミングである。双方の研修の参加者からは毎回、多彩な意見が出されている。

(1)イメージと現実——ボランティアB研修（1996年1月）の声から

ボランティアB研修は初級者用コースであるが、すでに以下のような、活動に対する不安や疑問と、同時に提案、アイデアなど積極的な意見が出ている。研修が単に研修に終わらず、ボランティア同士の交流の場になっている。B研修参加者のボランティアの声を聞いてみよう。

フ ー ク の 内 容 に つ い て	・ワークへは2人1組で行きたい 特に自分が初めて行く所へは、行ったことのある人と行きたい／緊急事態が発生した場合や遭遇した場合など対処できない／1人ではこなせない量の仕事を言われた時、1人だとゆっくりと話も聞いてあげられない／精神的に不安 ・曜日の関係もあるのだろうが、決まったお宅へ決まった人が行くというは避けてほしい。 ・男性1人での訪問はやめた方がいいのでは？ 相手の人も身構えてしまって、言葉が続かない／相手の人も困っている様（ex. 家事ができないなど） ・本当に手助けを必要としている人の情報を集めてはどうか ・家事介助について どこからどこまでがボランティアのやるべき範囲なのか、はっきりとさせてほしい／実際に、ご自分でやれそうな事までやらされる／じっと見ていたり、注意されたり、厭味をいわれたりする（信用されていないようで、悲しい、やる気がなくなる）／家事介助の内容をはっきり（具体的に）してもらいたい、でないと、ずるずると便利屋のように使われる ★助言 「今日は〇〇時までさせてもらいます。あるいは、〇〇時までですが、何をしましょうか」など、と聞く
ふ れ あ い セ ン タ ー の 利 用	・本当にふれあいセンターを求めている人はなかなか来れない ・六甲のふれあいセンターは、今は個別訪問はしていないが、もうそろそろ開始してもいいのではないか ・訪問の重要性の再認識 ・ふれあいセンターに来られる人は比較的な元気な方で、本当に寂しい方とはじこもりがちで、外にはなかなか出ない ・近所付き合いの苦手な人はボランティアが何回か足を運んで心を開ける状態にしてあげれば…… ★助言 小規模仮設では、手紙作戦などを考えている

- ・ボランティアの仕事をもっとオープンにしてみてもどうか
単にボランティア募集中ではなく、詳しい仕事の内容をオープンにする
と地元の人が増えるのではないか
- ・県外から来るボランティアは今のワークにがっかりしているのではないか
今は震災ボランティアから、単なる在宅ボランティアになってしまっている
- ・けっこう悲惨な状況を想像してくるのに、現実には落ち着いてしまっていて
また来ようという気にならない
- ・自分のやりたい事と現実のギャップがありすぎて、とまどう
- ・別に自分がやらなくても何とかなる内容のワークが多すぎて、少しがっかりする
- ・親身になりすぎたり、個別的に相談を持ちかけられたりすると、精神的に
重くなりすぎる、そして足が遠のく
- ・「ボランティアの集い」みたいな軽く話し合える場をもっと作ってほしい
- ・何でも話し合える場があれば……
- ・震災ボランティアとだんだん駆け離れていって思うように思う。

(2)「ネットワーク」のこれから——ボランティアC研修の声から

ベテランボランティアのメンバーが集まり、12月に第1回リフレッシュ研修が開催された。「仮設住宅の冬を快適に過ごすために」と「東灘・地域助け合いネットワークのこれからの活動」という2つのテーマについて活発な議論が行われた。

また、2月には第2回リフレッシュ研修が開かれた。「ボランティアとしての境界」、「高齢者の気分転換」、「『ネットワーク』の子どもの対応のあり方」の3つをテーマに議論した。

この2回のリフレッシュ研修で出された参加者の意見を、ボランティアの皆さんに読んでもらえるよう要約・報告したものの一部を紹介する。

①冬をどう過ごす——第1回C研修（1995年12月）

▲（仮設住宅の冬を快適に過ごすために）

- ・冬の快適さを求めて
居住性の向上／温かい食事／体を動かす、など
- ・冬の対策
外部水道の凍結防止／すき間風の防止／暖房効果の向上／寝具の乾燥
安全な調理器具（電磁調理器）の手配／散歩・銭湯への介助、など

- ・中古毛布の活用法

六甲YMCA寄贈の中古毛布をクリーニング組合などの協力を得て、無料や格安で洗濯、ビニール包装した状態で仮設住宅居住者に有料で配布、など。

- ・その他

今後、仮設住宅への真の自立の妨げになる無償配布を避ける／行政に対して、ハード供給だけでなく人の融通を求める／ボランティアのサービス提供のバランスの配慮

▲（東灘・地域助け合いネットワークのこれからの活動）

- ・「ネットワーク」の方向性

当分の間、震災ボランティアとして、東灘区内の被災者向けのサービスに集中、仮設居住者へのサービスは可能な限りの期間にわたって継続する／阪神大震災の記憶が全国で薄れゆく中で、被災地での活動を通して完全な復興まで人々の注目を喚起する／さまざまな層のボランティアを掘り起こし、年齢層を超えたボランティアの交流の場にする

- ・今後の課題

「ネットワーク」が活動内容を積極的にPRして、新しいボランティア参加のきっかけづくりをする／福祉団体や行政との関係を強化し被災者のニーズの的確な把握に努める／取材だけでなく、日常の活動で感じたことや提言を積極的に外部に発信する／ボランティア参加者の増加や活動の拡大が今後も継続可能なのか、必要なのか、慎重に検討する

- ・新しい活動について

映画鑑賞会などのお祭り／学生ボランティアを中心とした常設のフリーマーケット／温泉へのバス日帰り旅行、など

②ピクニックへ行こう——第2回C研修（1996年2月）

▲（ボランティアとしての限界）

ボランティアとクライアントの関係は見ず知らずの人同士であり、相性など難しい問題も多いが、生活の支援という領域では、友達とヘルパーの中間の役割を受け持つつもりで、臨機応変の対応が期待されている。ボランティアがどこまでやるべきか

（例：「買い物依頼」で訪問した際に、家事を頼まれる）について、個人の判断がつかかねるケースも否定できないが、マニュアル化された対応は、ボランティアとしてやりがいを感じない。ボランティアとして、自分なりにできることを考えて行動し、訪問先での一方的なボランティアの評価や比較（例：「××さんは××もしてくれた」）は絶対に気にしないように。

訪問先での仕事の効率性と分担（例：話相手と家事）、万一の事故の対応、誤解か

らくる摩擦をさける。適切な判断と対応などを考えて、必ず2人1組のペアで訪問することを徹底してほしい。また、可能な限りペアは、ベテランと経験の浅い人の組合せにして、ボランティアとしてやるべき限界やホームヘルパーへのシフトの判断などを、実地で学ぶ体制づくりが必要。

訪問先のクライアントと話しやすい雰囲気と信頼関係を築きつつ、お互いの変化のために、毎回違う顔ぶれで訪問したり、1人が張りつきになるのではなく、何人かの特定メンバーが交代で訪問する体制が望ましい。クライアントに関する特記事項は必ず詳細に報告書に記入する一方、必要であれば事務局に報告すること（例：ヘルパーのシフトの必要性）。問題が生じて、決して一人でかかえこまないようにする。

行政の住宅に関する施策についての質問や、相続・法律相談など専門性の高い質問を持ち込まれることも多いが、ボランティアではとても対応できない。「ネットワーク」の方向性も含めて、情報はできるかぎりミーティングなどの際に、みんなでシェアをしてほしい。

▲（高齢者の気分転換）

・花見や公園にお誘いする。

——春にはボランティア1対高齢者3～4人位で公園でピクニック。

・仮設住宅周辺の散歩マップを作成。

——高齢者に配布し、ボランティアもそれを散歩に利用。

・小旅行。

——移送サービス用のマイクロバスの空き時間を利用して、岡本の梅林やお地蔵さんなど近所の名所・公園などに2時間程度のピクニック。

・ふれあいセンター同士の交流。

——問題は仮設住宅間の格差の顕在化。

(3)お答えします——ボランティア研修からの声に対して

(1)、(2)のような研修でボランティアから出された疑問などに対して、「ネットワーク」では、掲示板などで何らかの答えを提案してきた。以下に紹介するのは、3月9日、主に生活支援ワークについての疑問に対して、「ボランティアの皆様へ、研修でのいくつかの疑問にお答えします」というかたちで、報告された内容のあらましである。

①「ネットワーク」の活動の基本的姿勢

震災直後から1年間を経過し、被災地の人々にも一定の落ち着きが見られます。

「ネットワーク」では、仮設住宅、既存住宅を問わず、被災地における日常ケアの必要な（主に）高齢者にさまざまな家事介護などの生活支援を提供してきました。

現在では、ホームヘルプを専門にする既存組織も立ち上がっており、ドアの中での

サービスはそこに任せ、「ネットワーク」は基本的にドアの外でできるサービスにシフトを変えています。（例、薬取り、通院介助、車椅子外出介助、散歩、話し相手、買い物、荷物運び、様子伺い、簡単な修理、掃除など）

この1年間、他団体のカバーをしていた面もあり、かなり立ち入った内容の活動もしていただいたかと思いますが、以上のような全体状況をご理解ください。

②これが震災ボランティア……？ という疑問に対して

震災時の体感は今なお身体の奥深くに恐怖として残っています。一見、普通の生活をしているように見えても、ぬぐいがたい不安を数年抱え込むことになるでしょう。いわゆるPTSD（心的外傷ストレス障害）で、高齢者は特にきつい不安を持っています。仮設、既設にかかわらず、その方々の生活の不便解消や快適さに結びつくことは何よりの心のケアにつながり、毎週〇曜日に来てくれるボランティアのあなたの存在は希望なのです。現象面だけでなく、心の奥を見てあげてください。

③もっと困難な人がいるのでは……？ という疑問に対して

高齢者を支えるシステムは行政の福祉サービス、有償サービス団体や企業などさまざまな供給主体があり、対象に応じてすみ分けながら全体を支えているのが現状です。私たち「ネットワーク」のボランティアは比較的軽度の方を対象として、初心者の方にも対応できるサービスを提供しています。現在のクライアントは、何らかの縁があって「ネットワーク」とつながっている方々です。この縁を大切にし関係を保っていきたいと考えています。

④ボランティアって便利屋……？ という疑問について

依頼の始まりは事務局への電話です。事務局は電話では①～③の観点で、「ネットワーク」が受けるかどうか判断します。そして、受けた件については朝のミーティングで、ワークシートにしてボランティアに紹介し、サービスが始まります。現場でのワーク内容は必ずしもあなたの価値基準に合致していないかもしれませんがあくまでボランティアは援助者ですから、相手の価値（依頼）を優先させてください。相手のできることは共にし、できないことをお手伝いしましょう。できることをさがし、一緒に作業する喜びをワークの中で見つけることができれば、あなたはボランティアではないでしょうか。

第3章 ボランティアがつくる社会——「ネットワーク」その担い手としくみ

この章では、「ネットワーク」の17グループの活動の内容を、ボランティア個人の活動体験の中から語ってもらうことにした。日常活動の細部や場面から、活動を具体的に理解してもらいながら、「ネットワーク」のしくみに触れてみよう。

1 ボランティア自由自在——17の活動グループ

東灘・助け合いネットワークには、以下の17の活動グループがある。（図5参照）

生活支援、仮設住宅ハード改修、小規模仮設、茶話やかテント、ふれあいセンター（本庄中央、深江浜、瀬戸、六甲2、六甲3、六甲5、六甲6、六甲7）、ふれあいサロン、ボランティア研修、食事班、の他に専従スタッフも入った情報処理担当、事務局の各グループがある。（注：初動期には救援支援のグループがあった）

これらのグループの活動を担当ボランティアの声を通して見てみよう。

1. 初動期を支えた力仕事ボランティア——被災難民を出さない

ポリタンクに水を汲み、マンションに住む高齢者などに命の水を運んだ若者ボランティア。また、仮設住宅そのものの不備や住宅周辺の悪環境の改善に取り組んだボランティアの声である。

(1) 高齢者の住める仮設住宅へ——初動期の活動グループから（高橋良輔）

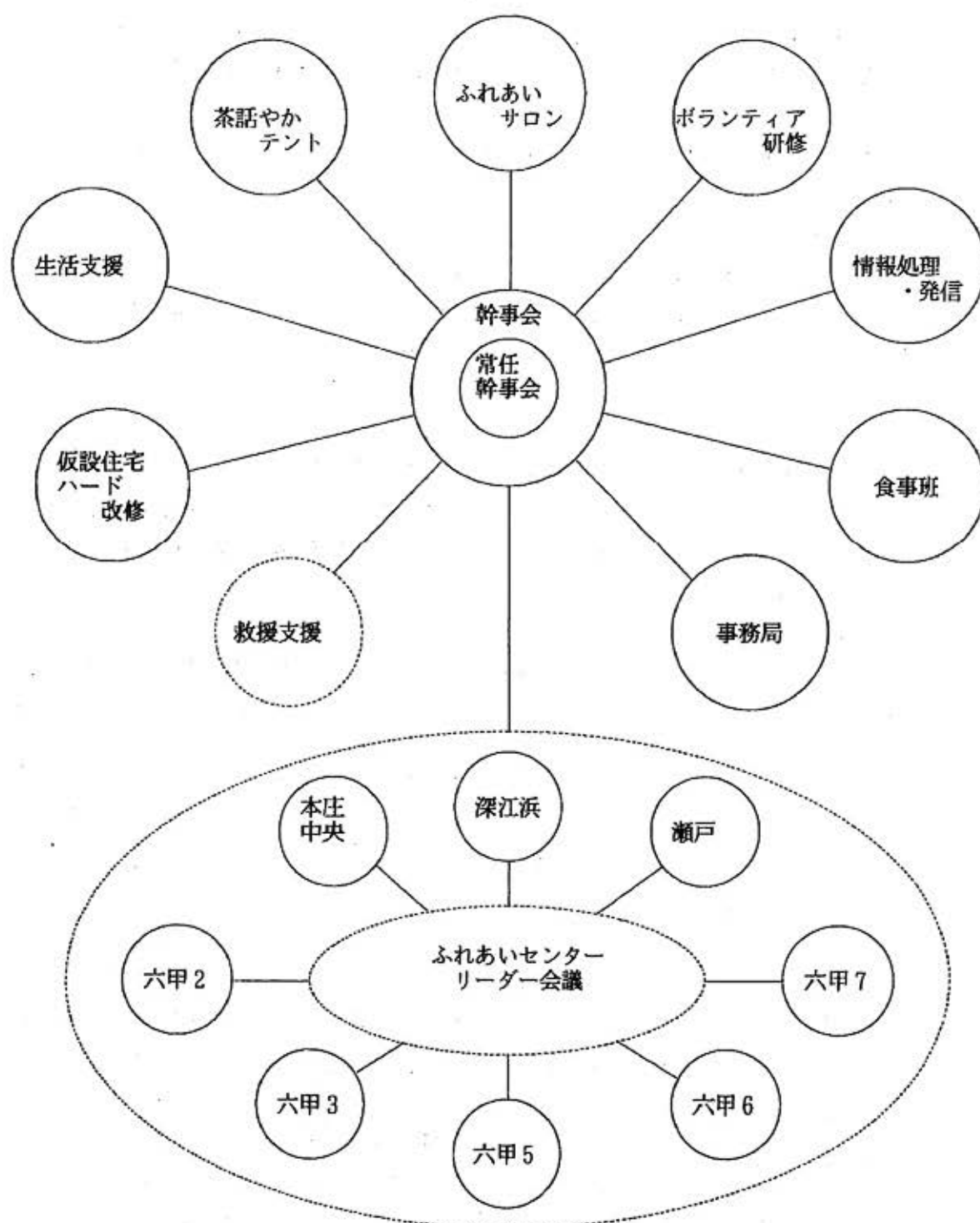
僕が初めて「東灘・地域助け合いネットワーク」の活動に参加したのは、震災から約1ヵ月後の2月13日です。当時、ネットワークでの主な仕事は、まだ、ライフラインの復旧が出来てなかったので「水汲み110番」という、いわゆる水汲みでした。

3月くらいになりますと、仮設住宅入居などで引っ越しが多くなりました。3月中旬くらいになりますと、ほぼ毎日が引っ越しでしたから。あと、荒ごみ捨てとか、解体現場の荷物の取り出しとか……多かったです。力仕事。

そして、引っ越しなどして4月を迎えますけど、仮設住宅の人のニーズに「出入口と裏口の段差がきびしい」というのがありまして。目につくんですね。引っ越しなどで移動中だとかに、倒れたブロックの壁が。だから、みんなで相談して、そのブロックを、理由を話しゆずってもらい、事務所に持ちかえって、ブロックにコンクリートとかへばりついててぼこぼこしてちゃ危ないから、1個1個ハンマーとかバールとかで、普通のブロックの形にして、仮設住宅に届けるんです。一軒につき2個ということで。喜んでもらえました。これは。

そして、6月になりますと、俗に言う梅雨ってやつで、雨が降ります。雨が降ると

図5
東灘・地域助け合いネットワークの組織と仕組み



仮設住宅っていうのは、元々グラウンドだった所に建ててるんで、本当にひどい水たまりで身動きがとれないんですよ。そこで、砂利でもまこうかってことになりましてまいたんです。ちょっとは効果ありましたが、キリがなかったです。ほとんど……。

6月くらいでしたっけ。仮設住宅では、お風呂に入るときとか便所とか住宅のなかでも段差がすごいです。だから、踏み台を配ろうとして、募集したんです。「踏み台欲しい人っ」で感じで。そしたら、約900通くらい応募のハガキがきて、7月初めから10月中旬くらいまでかかって、全員（約900人）に配りおえました。

7月か8月か忘れたんですけど、元々砂利の上に建ってたか、僕たちか、ほかの誰かが巻いた砂利なのかは分かりませんが、仮設住宅の住民の人が「砂利の上だと車椅子がなかなか思うように動かない。何とかできないか。」ということで、シートありますよね。選挙か何かのときに使うゴムシート。「それじゃ、あれを敷きましょう。」でことになって、その車椅子の人の部屋から仮設の敷地外に出る所までシートを敷きました。

今までに述べた他にも、仮設住宅の手すり付けなど、いろいろ改善しました。仮設住宅というものは、高齢者の方や身体障害者の方には、そのままでは住めない状態だと言っても過言ではない、と思う今日この頃です。

(2) 悩みの小石拾い——仮設住宅の改修について（殿本弘）

震災後、家を失った多くの被災者の方は、避難所から仮設住宅へ移行している。

ここで問題になるのは高齢者・障害者の多い仮設住宅で、その中比較的便利な市街地近辺の仮設住宅は65歳以上の高齢者が60%以上で占められ、超高齢化社会を現出している。私たちボランティアは、震災直後のライフライン未調整時より水汲み・瓦礫処理・倒壊家屋の荷物引出し・引っ越し等の言わばハード面の火事場のボランティアと言うべきワークを行ってきた。被災者の仮設住宅への入居が始まってからは、ワークの中心を仮設住宅に移し、当初は個別訪問からいろいろな生活困窮ニーズの聞き取り調査を開始し、一方で仮設住宅周辺の買い物先、病院、交通機関等の生活情報マップを作り配布した。困窮ニーズのうち可能なものは即時その場で解決していった。文字通り仮設住まいの為に建てられた仮設住宅は多くの欠陥不備を抱えており、高齢者、障害者にとって住みにくい欠陥住宅であった。

当初、神戸市、兵庫県の仮設住宅関連の窓口は住宅と周辺環境に関する苦情に対し責任のたらいまわしするだけで一向にアクションを起こさなかった。

本庄の仮設で段差の為、足を滑らせ骨折するという事故があり、いたずらに貴重な時間を空費するより自分らの手で出来る事から解決していこうというのが立ち上がりの動機であった。

そこで、主に男子ボランティアが中心になり、金も物もない、善意の労力のみでボ

ランティアこととて、入口段差解消の為のブロックは壊れた塀のものを家人了解を得て貰うけ仮設に運んだ。

高齢者や障害を持つ方は狭いスペースの中でトイレと風呂が同設されたユニットバスはとりわけ使いにくく、大きくまたいで入らねばならない浴槽への出入りに難渋した。

そのための踏み台を石川県の大工さんのボランティアチームが作ってくれ、それを希望者に配布して回った。新聞・テレビ等で報じられ、それを契機に各地での後方支援が広がっていった。泥濘む仮設内道路の砂利引きの材料も、善意の一貫として区内砂利業者に無償提供して貰った。

洗濯物干しの位置の上下調整、手すり取り付け等私たちが手掛けた作業の中には、高齢者・障害者の多い仮設住宅固有の住まい改善ニーズも含まれる。

最近、被災者の心のケアという課題がクローズアップされている。

被災者は仮設を出てからの暮らし向き、住まい、肉親の死去など、瓦礫のように悩みが心のなかに一杯に詰まっている。ドアの軋みを直し、入口段差を解消する行動が被災者の悩みの小石拾いとして私たちに出来た小さな心のケアだったとの思いを深くしている。しかし、仮設の現状はまだまだ厳しく外出もせず、近所との接触もなく閉じこもったままの独居老人も多い。

大きな被害を受け、避難所を出てからは給食も無く自活の道を歩まねばならない高齢者の中に日常生活の維持さえ困難な人々がいる。このような方々の受け皿はあるのだろうか。職もなく収入も少ない人々の多い仮設の現状では、行く先のてだてもままならない人々の支援をこれから本腰を入れて取り組まねばならない。

贅沢でなくとも必要な設備の整った公営住宅を一日でも早く建て、家賃などの入居条件の高いハードルを高齢者、障害者の生活支援の為引き下げねばならない。行政も政治家もこの事を真剣に考えなければこの一見豊かと言われる日本で、大量の被災難民を出すことになるかもしれない。

2. 生活支援活動——ともに生きるということ

震災ボランティアという言葉から受けるイメージは、人命救助などの劇的なシーンを想像させるものである。しかし、震災直後の混乱期が過ぎれば、仮設住宅での日常の生活が待っている。それは、劇的でもなんでもない当たり前の暮らしであり、当たり前の生活を支えるのが、「ネットワーク」の生活支援活動である。地味な活動であるが、ボランティアの原点かもしれない。それとともに、生活のアクセントである楽しみや息抜きを提供しているのが、茶話やかテントの活動である。

(1)あきまへん、しんどうて——Aさんの生活支援（芝崎信子）

高齢者は地域社会や家庭生活から、やゝもすると孤立して自分の殻に閉じこもりたがるものです。身体的な衰えや此度のような大震災による社会的変化からくる生活の激変は、それに一層拍車をかけることになりました。Aさんもそんなお一人と思われ

ます。
「お早うございます、Aさん。助け合いネットワークから参りました芝崎です」
鍵はかかっていませんでした。入ってすぐが台所兼食堂、そこを通り越して奥の部屋のベッドのAさんの側に行きます。お元気なお顔を見られるか、ドキドキする瞬間です。

「あんたやったんか」
と目を細く開けて答えてくれました。体を少し「く」の字にして休んでおられしんどそうに見えます。

「今朝は、ご気分如何ですか」

「あきまへん、しんどうて」

「お寒くありませんか、外は雪ですよ。今もチラチラしています。」

「さよか」

とおっしゃってガラス戸越しに外を眺められるが、雪の実感はなさそうでした。

エアコンが利き、とてもあたたかいお部屋です。

Aさんは一人住まい。奥様は昨年亡くなられたそうです。94歳という高齢ながら“自分の家がいい”と頑張っているらしいです。大変気丈な方で、お子様方の心配をよそに一人暮らしを楽しんでおられるかに見えます。長年、船場の紙問屋さんで番頭をしていたこと、最年少の番頭で仕事仲間の酒の付き合いが大変だったこと等、良き時代のお話を聞かせてもらって、まだ半年も経っていません。

「何か召し上がりますか」

「重湯を作ってくれるか」

小さな土鍋でお米を三分の一カップほど洗い火にかけます。ガス台の前とベッドの側とを行ったり来たり。

「冷蔵庫の中にスープがあるやろ、あれも少し薄めてや」

「はい」

「そこにすり鉢おませんか」

流しの横に見えたので

「はい、あります」

「お粥さんをようすってや」

いつの間にか、流動食になっておられます。ヘルパーさん、娘さんと誰かが毎日来られるようで

「わしは我が儘やから」

が実行できるのでしょうか。柱には緊急の電話先のメモも見えます。

歳をとって、住み慣れた家、地域で暮らしたい、これは。誰にも共通の願いです。しかし社会構造の変化と共に、どのような状態で歳をとろうと、願望を満たすのは難しいことです。震災後の状況ではなおさらでしょう。

「共に生きる」を強く認識し、心を開き地域住民による共助活動、即ちボランティア活動が益々大切になるでしょう。

(2)ほんのり化粧で会いましょう・・・"茶話やかテント" (武田純子)

昨年3月初旬より仮設住宅の入居が始まりました。一日誰とも話をせず家の中に閉じこもりがちなお年寄り、元の住まいから遠く離れ、さみしい思いをしている人・・・そのような方が寄り、ちょっとおしゃべりする場があれば・・・と、4月の暖かい日より移動集会所"茶話やかテント"がスタートしました。

ある夏の日、テント2張、長机6卓、丸イス20脚を載せた車が目的地に到着しました。"アレっ?"その日予定している仮設住宅横の空き地に、数台の車が駐車しています。急いでテントの設営場所を移動・・・これも四本足のテントならばこそ。ヨイショと持ち上げて移動できる訳です。15分程でミニ集会所が出来上がり、女の早いお年寄りは、それを見守るようにして待ち受けてくれます。最初は遠慮がちな人も、テントの中に知った顔を見かけると足早に寄ってきて、今ではすっかり「お馴染みさん」になって、後片付けをするときは申し訳ない気もします。

その日のメニューは、ミニバザーとかき氷でした。テント設営と同時に、かき氷器のコンセントの電源を仮設の住民にお願いすることや、バザーの品物の陳列、そしてテントの中のレイアウト等、イベントが二つ以上になると小道具も増える代わりに、集まる人も多く賑やかです。かき氷で童心に戻り、昔話に話のはずむ人もおれば、バザーの品物の品選にジャンケンまで出てくる賑やかさも、2時間のテントは、またたく内に「満員御礼」といった所です。

茶話やかテントのスタッフは14～5人、ミニイベントは季節に合わせて、七夕飾り作り、クリスマス飾り作り、切り絵、ビーズ手芸等、またバザー、民謡など、講師も本業講師、自称講師、にわか講師等々多彩な顔ぶれでいつも盛り上がります。またお茶とお菓子以外に、時折、かき氷、ソーメン、粕汁、うどんのミニ軽食も添えています。

「今度いつ来てくれはんの？」と心待ちにされると、つい「あした！」と言いたくなる気持ちを抑えながら、二ヶ月後にも必ずお元気でお逢いしましょう、と約束をして帰ります。

やがて一年になりますが、今では、公園内にある地域型仮設住宅を主に、民生委員

の協力も得て周辺の一人暮らしのお年寄りも誘っていただくことになりました。

うつ向き加減にボソボソ話していた人が、その次にテントで逢った時には、ほんのりお化粧をした顔に思わず「何か嬉しいことありましたか？」と聞いてしまいました。スタッフの私たちも、さわやかな雰囲気を残して帰りたいと思います。

(茶話やかテントの活動報告&活動日誌は資料編：資料4—①～③参照)

3. 仮設住宅ふれあいセンターの活動——コミュニティを産む

仮設住宅ふれあいセンターの活動は、住民の方にいかに楽しんでもらうかという意味では、茶話やかテントの活動の延長線上にあった。同時に、楽しい「住民自身の場」として自主運営して頂くことを通して、コミュニティのない町にコミュニティを生むことを期待されている活動である。

(1)賑やか元気な女性軍——深江浜から(島敦子)

1995年8月8日、「深江浜ふれあいセンター」の開所式を迎えた。

ホールの内も外も色とりどりの風船や輪つなぎで飾られ、お天気も上々(暑過ぎたけど)。あとは住民の皆さんの来館を待つだけとなった。

「だれも来なかったらどうしよう」

心配でじっとしてはおられず、ハンドマイクを持って住宅内を呼びかけて回った。

式開始の10時半、50平方メートルのホールには50人近い人が集まり賑やかに開所式が始まったのである。遅れて参加する人もあって狭いホールは一杯となり、ソプラノ歌手の独唱と住民参加のカラオケ。ボランティアによる、プラスバンド演奏とギターの弾き語り。どれもみな喜ばれ、会場の外でのかき氷屋さんも大好評だった。大勢の住民、ボランティアに支えられて深江浜ふれあいセンターはスタートしたのである。

スタートはしたものの、果して利用者はあるだろうか。

月曜から金曜までボランティア数名で当番を決め、午前10時から午後4時まで開館した。

8月はお茶とお菓子を用意し、おしゃべりで時を過ごした。ボランティアの一人が自宅からカラオケの機器を持参したところ、これが大受けで、少ない曲数ながらマイクを握り、「アッ、もう4時」とうらめしそうに言われたこともある。

住民の代表の発案で、9月15日の敬老の日までに千羽鶴を折ることを呼びかけたところ、数名の参加があり、70才から80才の方々に「生まれて初めて鶴を折る」という人もいて、暑さのせいもあるが冷房のきいたホールで汗びっしょりであった。自宅で折って下さる人や民生委員の応援もあって9月15日までに立派な千羽鶴ができ上がり、大勢の人達を迎えることができた。

9月15日には住民の方の舞踊、関西学院大学の学生の落語、住民によるカラオケ大

会と、老いも若きも参加して半日を楽しみすごすことができた。

日常的なこととしては男性軍は囲碁を毎日の様に行い、女性軍は折り紙でくす玉を作った。折り紙の先生は住民の一人である。また、カラオケも住民の中に先生がおられ、自分のCDGを持参して歌唱指導も行われ、多い時は20名余の参加者があるまでになった。

外部のボランティアの応援で囲碁は順調に行われ賑やかであったが、11月ごろから、就職する人も出て参加者が減り、外部のボランティアも12月で終わりにしてもらった。男性の来館者はぐっと少なくなった。

女性軍は賑やかに元気である。

10月から週2回、編み物教室を開いた。初日の参加者は5名。毛糸持参者1名。我々が持ち寄った毛糸で何とか始めたが毛糸が不足することは目に見えている。そこで、ネットワークの協力で神戸新聞に毛糸がほしいと掲載していただき、沢山の毛糸を贈ってもらえることができた。「針だけ用意して」と再度呼びかけたところ20名の参加者があり、毛糸だけ持ち帰った人や転出した人もあるが常時、10数名の参加者がある。一言もしゃべらず編んだり、しばし手を休めてはじける様に笑い、話したりお互いに教えあったり、と、なごやかな雰囲気の中で一日をすごしている。クリスマスには帽子、マフラー等が20数点集まり、抽選で住民に贈った。

月に一度、原谷・安元両先生の指導で音楽療法を行っている。音楽に合わせて指の運動やゆったりとした全身運動をする。又、皆で歌いながら身体を動かす。9月から始めて6ヶ月がすぎたが「次はいつ？」と楽しみに待たれているのである。

単発的に来てくださったボランティアによってバザー、試食会、茶話会等も行われた。又、公的機関による講習会も行われた。

編み物、カラオケ、折り紙と重複して参加している人、どれか一つだけ参加の人、大きな行事の時だけ参加する人、ただ来て椅子に腰かけている人、と様々だが明るく、楽しいセンターを目標にやっていきたいと願っている。

(2) トイレ掃除担当します——六甲アイランドから（坪 光子）

「六甲アイランド北ふれあいセンター」それが、その立ち上げから私の携わった所です。そこは民生委員が中心となって友愛訪問グループがしっかり活動をしていて特に一人暮らしのお年寄りについては、毎週訪問し、安否確認、話し相手、通院介助などの援助もおこなわれています。六甲アイランドに関しては道路の事情もあり、「東灘・地域助け合いネットワーク」は個別訪問は行っておらず、ふれあいセンターの立ち上げで初めて住民の方々と知り合い、どんな人達とどの様に運営していくのか、なかなか見当が付きませんでした。民生委員の方々の推薦で運営を手伝ってもらえそうな人達を集めて頂いて話し合いをもち、手さぐり状態で8月17日オープンを迎えまし

た。8月は不定期にお茶会や外部のボランティア団体によるイベントで、なるべく多くの人にふれあいセンターを知って頂く様にしました。住民、民生委員、友愛訪問グループ、そして私共が何度か話し合い、徐々に運営委員会の組織もでき、鍵当番の申し出もあり、9月からは定期的の開館できるようになりました。ある高齢のおばあさんは「私はトイレの掃除だけさせてもらいます」とおっしゃって毎朝必ずふれあいセンターに来られて、トイレ掃除をもくもくとなさる姿は、まわりの者も励まされ和やかな中にも当番の責任をしっかりとそれぞれが果たされる様になりました。

昨年11月末には、あるボランティア団体が赤倉温泉にバスの一泊旅行に招待して下さい、40数名が温泉につかり、ご馳走を食べ普段の苦勞を忘れてのんびりと楽しい時を過ごしました。私も付き添いとして参加させて頂きましたが、普段は知ることのできないお年寄りの方たちのたくましさ、(バスの休憩毎にサービスステーションの中に行き飲食されたり、おみやげを買われる速さにはおどろかされました)くつろいだ姿に接したり、また男性の方たちとのざっくばらんな交流など思わぬ経験をさせて頂くことができました。

ここは自治会が無いめずらしい仮設ですが、ふれあいセンター独自の運営ができ、住民の方たちによる適材適所の仕事ぶりはとてもスムーズにいらっています。現在私は、時たま相談にのる程度で殆どイベントも住民の方たちだけでこなされているのをみますと、住民のふれあいセンターに対する意識の高まりを感じます。

ある老人1さんは、あまり人との交流ができず、初めのうちはこわい顔して、一言もしゃべらず、ただ中へ入ってくるだけだったのが、お茶の時間や趣味の集まりに参加するうちに顔なじみになり、声をかけてもらえるようになり、少しずつ笑顔がでてくるようになり、ふれあいセンターが休館日でも何かの用事で運営委員の人が来られてたりするとすぐに出てきて、今では冗談も言ったり仕事のお手伝いも積極的にされるようになった。こんな様子を見ていますと、震災でご苦勞なされた人達がたまたま知り合いになられたのですが、ふれあいセンターを通してあたたかい“ふれあい”ができ本当によかったと思います。まだまだ、利用者が少ないことが問題ですが、一人ずつでも口コミで増えていき、どこも行くところの無い方たちにとって、また今後、震災前の所に戻って行かれる方が増えてくるにつれて寂しい思いをしないためにも、ふれあいセンターが心のよりどころとなり楽しい仲間の集会所として生かされていくことを願っています。

4. コミュニティ活動への展開——仮設から一般地域へ

ふれあいセンターでの活動体験を一般地域へ広げられないだろうかと思ったのが、ふれあいサロンである。ふれあいサロンはまだ始められたばかりの新しいプログラムであるが、福祉と医療を結ぶ試み、多様な人々や組織の共同による楽しい試みとして

注目されつつある。

(1)みんな手づくり——ふれあいサロンから（橋本倫子）

地域に住んでおられる高齢者の方を、民生委員さんが誘い出して下さり、お医者さんの待合室やリハビリ室を会場にして、楽しくなごやかな午後のひとときを過ごしています。これが、ふれあいサロンです。

昨年11月より試みに始め、今年1月から4ヶ所の医院で本格的に始まりました。わたしたちは企画と運営をまかされています。一時間半の間に、体を動かすこと、頭や手を使うこと、声を出すこと、いろいろな要素を取り入れて誰もが気軽に出来ることや、ふれあい交流をめざす企画をたてます。

チラシを作り、民生委員さんや医院へ配布する仕事や、手芸材料を、当日30分位で作品が出来上がるように下準備をすることは、大勢のボランティアの方に手伝ってもらっています。当日、午前中は準備に追われ、忘れ物のないように持ち物のチェックが欠かせません。2時から始まりますが、30分前に着くと、お寒い中、もう待っておられる方がいます。どこの医院も20名前後、30名近い会場もあり、スタッフと合わせると4～50名となり、うれしい悲鳴をあげています。付添いの方と一緒に来られる方、御夫婦で来られる方、車椅子で来られる方、診察を受けにきてパチンコで時間をつぶしたあと現れる方と様々です。以前に「お話し相手」のボランティアでお訪ねした方もみえていて、その時は、今の一番の望みは早く死にたいことと口癖の様でしたが、ふれあいサロンでは生き生きとなさり、欠かさず参加しておられます。

最初に、体をほぐす簡単な体操や腹式呼吸をしたり、じゃんけんゲームで頭を使ったりと和気あいあいのうちに心も身体もほぐれてきます。次の手芸の時間は又にぎやかで、ワイワイガヤガヤと教えあい、失敗しながらも最後には可愛い作品が完成します。男性の方達も楽しそうに参加して下さいます。ドクターの一口健康講座は、毎回あります。日常の生活で特に年をとってから気をつけるべきことを、わかりやすく話して下さい、皆静かに聞き入っています。これは、ずっと記していけば健康管理の立派な本ができそうです。歌の好きな方も多く、童謡はどの歌もしっかり覚えておられみんな童心に帰って大きな声で歌います。40曲の童謡を歌集にしていって、一回に五、六曲歌っています。二組に分かれて輪唱をすると、いっそう座が盛り上がります。最後には毎回、福引があります。寒い間は新品の電気ストーブを一台ずつ出しました。ボランティアのKさんが作ってくださった色とりどりの手編みの帽子や、お客様が作られた折り紙の見事なくす玉、医院からも色々な物を出していただき、回を重ねるごとに景品の数は増えてきました。くじに当たった方は大喜びです。

皆さん帰りには、「また来月楽しみにしていますよ」とニコニコ笑顔で帰っていかれます。

またあの顔に会いたい、あの声をもう一度聞きたい。そんな小さな思いからでも足を運んでもらえる様なサロンにしたいなあと思っています。

(ふれあいサロン活動報告&活動日誌は資料編：資料6—①～②参照)

5. ボランティアを支えるボランティア——学び、食べる

第2章では、BおよびC研修参加者の声を紹介したが、ここでは、その担当者の声を聞いてみた。また、ボランティアカフェでは、毎日ボランティアのために心づくしの昼食が用意されている。この昼食を楽しみにボランティアに来る人もいるぐらい、「ネットワーク」の活動に欠かせないだけでなく、「ネットワーク」の雰囲気象徴する場になっている。

(1)ムズムズ大歓迎——ボランティア研修から(鷲池美智子)

まず、ボランティア研修について、少し説明します。この研修は、被災地支援について地元に根を張りながら息の長い活動が続けるべく、昨年6月頃から実施しています。ボランティア自身の自覚を高め、活動への参加意識を高めると共に、相互のコミュニケーションを密にし、こころと実際のケアの両面の知識を持つことで、安心して活動に取り組めるようになります。

A. B. C研修について、もう少し詳しく説明すると、

A研修—基礎コースとして、オリエンテーション。これは、ネットワークの活動目的と活動実績、そして被災状況と仮設住宅の現状説明。また、被災者のこころのケアについて臨床心理士からの被災者との接し方、信頼関係の築き方、震災での影響等についての講義があります。

B研修—初級コースとして、介護、介助に関するトレーニング。看護資格者による高齢者、身障者の基本的介護と車イス介助と盲人の手引き等の実施研修。次に、被災者支援についての意見交換、経験者(ベテランボランティア)を交えての質疑応答と意見交換。

C研修—リフレッシュ研修として、被災地の環境が変化する中で、ネットワークが常に活性し、ひとりひとりが活動に各々の“やりがい”を見いだす為に、A・B両研修を修了された方を対象に企画されています。また、その都度、いくつかのテーマを決めて、話し合いの場としています。

私がこの研修を担当して、まだ5ヶ月程ですが、おもな仕事内容は、会場の手配・設営、講師の方との連絡やチラシ作りでした。が、最近は各研修に参加させてもらいボランティアの方々のいろいろな意見を聞かせてもらっています。そんな生の声をきくことで、私自身も勉強になるし、「へえー。こんな風に考えれば、ボランティアも楽しくできるんだ!」と考えさせられたりで、けっこう、気持ちの軽くなったりもし

ます。

また、最近の研修についていえば、堅苦しい〇×研修というのではなく、「お茶を飲みながら」とか「食事をしながら」何でも話す会と題して、思いつくまま、楽しくワイワイとおしゃべりしました。そんな普段着の会話で集まった生の声を大切に、それを今後の研修に生かせたらと思っています。でも、本当はこういう研修という形で様々な意見を出し合い、話し合うのではなく、日々の活動の中で、その都度話し合い、問題解決できたらなあと思うのですが……。

とにかく、これからは、A・B・C研修共に月一回程度、予定していますので、皆さんふるってご参加ください。特に、B、C研修は何度参加していただいてもけっこうです。何か、しゃべりたいことがたまっていて、ムズムズしておられる方、ぜひ、その声をきかせてください。

(2) ボランティアカフェ——食事班から（太美 京）

午前中、仮設住宅を廻られたり、それぞれ違った役割任務を終えネットワークに帰って来られた方々の昼食の支度をしております。

猛暑の日、又寒い冬の日、外より帰って来られた方がホッと安堵の一時に、季節に添った温度差を心掛け作りました料理を、美味しく、明るい雰囲気と同業のもとで食していたゞけたら準備しました者も幸せな時間です。

材料は前日、余裕の有る限り求めに行き、肉類はこちらのお店、野菜はこちらのお店、と鮮度、素材も考慮、価格も大きな要因の一つです。私の場合、月曜と木曜とに参加しております。当日は、朝のミーティングの9時30分に来まして、先ず、人員数をチェック、お米を洗っておきます。カレーライスや炊き込み御飯は平素より少し多めの御飯が必要です。お名前の記入を忘れておられる方がおられ、人員数が多くなり、最初は戸惑う事も有りましたが、現在ではだんだん慣れ、慌てないようになりました。平均 25、6 名ですが、日によりましては40名参加で、この折りには前日購入の材料では不可能ともなり、急遽メニューの変更、この時には人変でも有りますが、気持ちに依っては、脳の活性化に役立つ事と楽しみながら作っております。

御飯、お汁、主菜にはボリュームを考え、牛、豚、鶏肉のいずれかをお出しに、とりどりの野菜を多めに入れ、材料からのうまみを基に味付けは健康考慮で薄味に仕立てています。結構美味しく出来ます。手前味噌かもしれませんが、煮魚も加えたいのですが、人員の変動で無理な点も有るかと思えます。

私方、震災で半壊ながら健康に暮らせます事に感謝し、昨年4月よりこちらのボランティアに参加させて頂いており、多くのお若い方々との貴重な触れ合いを大切に、これからの人生を送って行けたら有り難い事と思っております。

※注釈

東灘・地域助け合いネットワークでは、ボランティアの昼食を毎日、テントで作っています。近所の県営住宅に「悠友の会」という主婦中心のサークルがあり昨年4月より昼食作りボランティアをお願いしています。始めのころは、水場は100メートルほど離れた駐車場隅の蛇口まで坂を上り下りしなければならなかったし、カセットコンロ2台しかなく鍋二つで御飯炊いたあと、おかず作り、と大変でした。少しずつ炊飯器、ポット、冷蔵庫、食器も増えてきて、7月にLPガスコンロが設置、8月には事務所の横まで水道が引かれ流し台もつきました。こうしたなかでの食事作りの苦労は、30人分ぐらいという量と献立決めです。どんな食事でも、ワークの後、みんなでにぎやかに食べるとおいしいものですが、作る側も次第に「次は違うものを」「もっと喜んでもらえるものを」となってきた、いろいろ悩まれたこともあるようです。メンバーの方も、引っ越しや仕事などで減り、今は週3日が「悠友の会」それ以外の日はその日のボランティア・ワークにしています。

6. 「ネットワーク」の裏方たち——報われている苦労

ここまで紹介してきたのが、「ネットワーク」の表舞台だとしたら、最後に紹介するのは、ネットワークを陰でささえる裏方たちである。「ネットワーク」の活動をインターネットで情報発信する作業は、未来への先行投資でもある。また、日々の活動の人的、物的調整を仕事とする事務局は、「地域で共に助け合って生きる」もう一つの現場である。

(1) パソコン番で申し訳ない——情報処理担当から（滝澤めぐみ）

気がついたら情報処理担当になっていた。ボランティアを始める直前には家のパソコンで遊んでいた。たまたまワープロを打っていて事務の専従になった。インターネットに関わるようになったのも偶然だ。

4月にボランティアを始めた。午前中、生活支援のワークに出かけ、午後は日々の活動の記録をワープロで入力する。単純ながら、これが私の情報処理の始まりだった。

5月から事務専従になった。9月、大学生2人がパソコン担当としてやってきた。

ある日、パソコン担当のT君が「市民団体のためのインターネット講座」に参加すると聞いた。個人的な興味でついていくつもりだったら、彼は当日になって急用で行けないと言う。私は急におまけから担当者になった。それで後日の情報処理の打合せにも出るようになったのだ。

その後、マッキントッシュのパソコン一式が寄贈され、無料でインターネットのホームページを開設させてもらえるという話も来た。10月には活動記録の委員会にも出席させてもらった。とんとんと来たが、その後はそうでもなかった。

ホームページには、まず活動の説明、東灘区の被害状況など、それに茶話やかテン
トの記録やバザーの記事なども作ってみた。でも、文書だけで終わりではない。イン
ターネットには“HTML”という記号がありそれで文字の大小や改行、背景の色、ペー
ジからページへボタン一つで移動する指示などを出す。週3日の事務所の仕事中には
手が周らず、家でもつい締切りがないから後回しになる。日が経つ。いい加減やらな
くちゃんと参考書と首っ引きで徹夜に近いこともした。11月下旬には少し形になった。

ある日、事務所に電話があった。高校時代の同級生で、筑波に住むNさん。奥さん
共々15年来的付き合い。でも、ここの電話番号は教えていないのに。今回のインター
ネットの協力者Iさんがパソコンネットワークにここの連絡先と私の名前とホームペ
ージ作りのお手伝いを求めます、という情報を流したらしい。そんな所でつながるな
んて。Nさんは私たちのホームページの仕上げ担当となった。情報処理の責任者の星
野さんやNさんとのやりとりは電子メール。急に毎日がパソコンに占められる様にな
った。

やっとできた原稿を星野さんに送る。山ほど修正が入ってくる。直したのをNさん
に送り、“HTML”の訂正してもらおう。そんな往復を繰り返す。沢山修正原稿が溜まって、
古いのと新しいのを間違えて送って慌てたりするうち、開始は年を越すことになって
しまった。

結局、ホームページのオープンは1月24日。ほっとしたけど、まだまだこれからと
言うところだ。開いたものの、まだ反響はない。こんな仕事をしていると、直接被災
者の方のお世話をしている他のボランティアの方々に申し訳ないようにも思う。でも
将来、こんな活動の積み重ねがパソコンでのボランティアネットワークの基礎になる
かも、と思って続けている。

(インターネット・ホームページは資料編：資料7参照)

(2)そこに「人」がいるから——事務局から(原 俊子)

事務局は現在、中村代表と私が週6日、それに週3日のTさんの3人でやっている。
ここに常任幹事のSさんがほぼ毎日、ワークに出かける以外は加わって、通常業務を
している。通常業務というのは、一言でいえば、あの小さなプレハブ事務所の中で
できることすべて、とっていいだろう。

なにが大変かといえば、なんといってもその忙しさである。朝9時すぎから夕方ま
で、電話がひっきりなしに鳴り、遠くからも近くからもいろんな人が訪ねてくる。ボ
ランティアも入れ替わりたち替わり来ては、コピー、印刷をし、ワープロ、パソコン
を使う。また、ワークの報告もある。そういう中で、いろんな事務処理をこなしてい
かなければならない。

電話の用件は様々だ。ボランティアの依頼であれば、その内容を詳しく聞き、引き

受けられる事なら日時を確かめた上で、その日に既に決まっている他の仕事の量と参加予定ボランティア人数も考えて返事しなければならない。原則的にワークは二人ペア。しかし、引越し手伝いなどになると、4～5人はいるし、車も使うとなると運転できる人が限られているので、そのやりくりも要る。

参加予定ボランティア人数というのが、またクセもので、協力団体からの人数はリストがあるのでおおよそわかるが、個人参加者となると、その日にならないとわからない。それでも現在は、継続参加者が多く、曜日で「明日はTさんが来る」とわかるし、毎日の参加者名簿から曜日ごとのおおよその人数がわかるようになった。

ボランティアの数がワークの必要人数より少なくて、ペアが組めず、一人でシンドい思いをさせてしまった人も少なくない。原則を守るためには、今日は人が少なくて無理、と判断し、後日に変更するなどの対応が必要だろう。が、その一方で、依頼者から直接電話を受けた私には、助けを求めている人がそこにいる、なんとか今日行ってもらえないだろうか、という気持ちもあり、そのへんの揺らぎでボランティアの人に迷惑をかけていて申し訳なく思っている。

その反対に、ワークよりボランティアが多くて、いざ仕事を割り振る段になって、数名がすることなし、というのも実によくあることなのだ。ボランティアのために仕事をつくるのも妙な話だが、そういうときは、急きょ仮設住宅巡回などを入れたりしている。

東灘・地域助け合いネットワークのボランティア・ワークは、依頼があつてのものだから当日までどんなものがあるのか予測がつかない（茶話やかテントなどの企画ものは別にして）。だから、ワークの数と内容、ボランティアの人数というのはまず合致しないものと思っている。その時々で柔軟な対応ができるようにならなければ。

電話はこの他、ボランティア志願者だったり、新聞社だったり、イベントの問い合わせ、支援協力団体からの最近の状況伺い、講師依頼、物品の提供申し出や東灘・地域助け合いネットワークの活動を教えてほしいとか、FAXしてくれとか、まあ、実に次々とかかってくる。

それから、来訪者も多い。アポをしってくる人だけでも、時間をずらして日に3組ぐらいの時もあるのに、そこへ突然やってくる人も必ず、毎日一人はいる。来訪者があると狭い事務所の半分がうまり、対応するのは中村代表。その横で帳簿をつけていると電話。話を聞いていると、もう一つの電話が鳴りだした。とる人がいない。FAXの受信だった。ワークを終えて戻ってきたボランティアから報告のファイルをもっていると、宅急便がきた。受取の最中に、いきなり「今日、行ってきた家ねえ・・・」と話しかけてくるボランティア。印刷機を使いだす人もいたり、仕事は一向にはかどっていないのにグッタリしてしまう。

ここまで書いてきたことは、一日のうちのほんの一部、仕事のごく一部にすぎな

い。

震災で傷ついた神戸の東灘で、東灘・地域助け合いネットワークがこれからどのような活動を展開していくのか、その方向性と意思確認は常任幹事会、幹事会で討議、決定される。決まったことを具体化、実現化させるために事務局が仕事をする。関係者との連絡調整、資料づくり。毎日の活動記録をきちんとつけ、活動を広めるための情宣（パソコン通信もその一つ）も欠かせない。

全国の多くの団体・個人からの寄附金で活動しているわけだから会計管理もいい加減にはできない。寄附金だけでは足りないのです、これはと思う所へは活動費の助成申請をする。助成金が出ればきっちりした会計報告も作らねばならない。最近になって、茶話やかテントやふれあいサロンも別会計になり、各々担当ボランティアがいるので幾分楽にはなったが、毎日のワークに付随する仕事と並行して、こういった先々の活動のための仕事もけっこう多い。

ここの事務局が、こんなに毎日忙しいのは、きっと人を相手にしているからだ。生きて、生活しているお年寄りが、そこで困っていたり、孤独な思いをしているからだ。私たちが少し手を貸してあげることで、その人が生き続けようとする力になっているんじゃないか、そのことで私たちも励まされる。これが「地域で共に助け合って生きる」ことと思えるからこそ、大変だけどやりがいもある。

最後に、東灘・地域助け合いネットワークは、一年365日、そこに集まるすべての人たちの屈託のない笑顔と元気な活動、明るい雰囲気満ちていて、事務局の「苦勞」もずいぶん救われていると言っておきたい。

（注：「ネットワーク」事務局では毎日、活動日報を作成している。資料編：資料3—①～②参照）

2 共生社会の担い手として——「ネットワーク」の組織とその運営

「ネットワーク」には、当初から定められた事業計画があったわけではなく、地域の人々の要望に添って活動をすすめている間に、活動や事業が自然発生的に生まれてきている。もちろん、新しい活動を始める際には、東灘区内や神戸市内の中での、他のボランティア団体の活動とのバランスや行政との接点を、たえず留意し配慮してすすめてきた。

多くのボランティア団体が撤退した現在も、「ネットワーク」が活動の幅を広げながら活動できるのは、地元住民によるボランティアが半数以上を占める組織であること、人々の要望に忠実であり、そのことに常に柔軟に対応できる運営方法をとってきたことによっているの。「ネットワーク」の組織の特徴は、17の活動グループがフラットな作業共同体をつくり有機的につながりながら活動している点である。

そして、こうしたグループの活動を縁の下で支えるのは事務局である。現在「ネットワーク」の事務局には1.5人の専従スタッフがいる。ボランティアは基本的には本人の都合の良いときに活動すればよい。しかし、「ネットワーク」全体の活動の引き継ぎや連絡や外部との交渉、会計処理をするために、その作業に責任を持つ専従スタッフが必要である。当然、専従スタッフは有給（世間並の給与が払えるかどうかは別として）でなければ続けられない。日本では、一般にボランティアというと無償の活動と理解されているため、ボランティア団体（市民活動団体）がふつうに活動を継続するためには専従スタッフが不可欠なことがなかなか理解されていない。

いま「ネットワーク」には、ほぼ毎日活動しているボランティアは5名を超えている。

1. フラットな作業共同体——組織とボランティアのあり方

17のグループのボランティアリーダーは、月1回、昼食時にリーダー会議をもって有機的に連携をとりあっている。

「ネットワーク」の活動の意思決定や方向性については、3か月に1回の幹事会、（8名 リーダーは4名参加）また、月1回の常任幹事会（4名）で、討議している。ボランティアからの提案は日常の朝のミーティングやB研修、C研修を通して積極的に取り入れ、即改善につながるもの、方針に活かすものを逐次吸収している。

(1) 小地域集団（疑似大家族）の魅力——「ネットワーク」のボランティアたち

「ネットワーク」のボランティアたちは大きく分けて、①シルバー（退職者）、②学生、③勤め人、④主婦、の4つの層からなっている。

この4つの層はいつもまんべんなく活動している。そしてこれは、たまたま偶然に構成されたわけではなく、各層の人材が揃っていて生き生きと活動できるように、リ

クルートの方法やメニューの構成に気を配り、人材の供給を計画的に行ってきた結果である。なぜ、このような配慮が必要か。3つの理由がある。

①どんなニーズにも応えられるように、また、どんなボランティアも受け入れられるように。

②組織の活性化のために。

③事業や活動がより地域に適合し受け入れられるために。

たとえば、主婦層のボランティアにはもとよりヘルパー感覚が備わっているし、勤労者は組織的感覚を身につけている。シルバー世代は豊かな人生経験を持っている。

こうした多様な層で構成される組織の魅力は、それ自体が小地域集団であり、疑似大家族の雰囲気も持ち合わせていることである。祖父母から孫の世代までのメンバーの関係から意欲や癒しの力がかもし出される。現代社会で失われつつあるこのような人間関係を体験できることが、エネルギーの源泉にもなっている。ボランティアの評価に関しては、経歴、出身、学歴、肩書、所属、家族など属人的要素は一切加えず、「今のあなた」で捉えるようにしている。興味本位のうわさ話は慎み、気持ちのよい距離感を互いに保ちあっている。提供できるすべてではなく、80%の力でより長くかわれるような配慮もしている。

また、ボランティアに継続して活動してもらえるように、食事や交通費の提供、保険の整備、研修の充実、ボランティアの疑問に答える場や機会をつくることなどに、気を配っている。

(2)社会をつくる主体——新しい形のボランティアを求めて

ボランティアにもいろいろある。従来型のボランティアのタイプに施設型ボランティアが多く、それらは対象者や職員に感謝されるが、責任性や社会性には乏しいところがあった。

「ネットワーク」の活動の中でボランティアに期待される役割はそのようなものではない。「ネットワーク」の活動では、自らボランティア活動をしたいという自発性に加えて、自らのワークに責任を持ち、各自がさまざまなレベルで企画を立て、それを実行する主体となる。そのプロセスの中には、ボランティア個人が成長できる機会や場が豊富に存在する。それが、「ネットワーク」のボランティアの特徴であり、これが、「ネットワーク」のもつ可能性をつくっているといえる。

ボランティアをされる対象との関係においては、ボランティアの力を得ていつしか自立の歩みを始め、共にパートナーになっていくインタラクティブな（双方向性）関係を大切にしたい。

「ネットワーク」は、ボランティアが社会の有益な活動をもっと担えるし、担うべきというスタンスにたっている。ある意味で社会の生産の部分を手助けたり、担える力

を持った団体に成長できればという思いもある。

(3) 仕事がリーダーをつくる――ボランティア・リーダーの育成のプロセス

どの団体でもそうだろうが、立ち上がり期に力を発揮できるボランティアには、かなりの経験ある人材（リーダー）が要請される。

東灘・地域助け合いネットワークの立ち上がりでは、既存ボランティア団体で主力になって活動していたメンバーが数名、最初の段階で参加していた。所属団体の活動が休止していたことが理由だったが、そのことが立ち上がり期の大きな力になった。しかし、リーダーに仕事が集中しすぎて、過剰ワークになっていった。

また、茶話やかテント（移動集会所）の事業を始めたときに、数名のリーダーでボランティアをコーディネートするのはむずかしく、早急にリーダーを育てる必要にかられた。

そのため、まず、仮設住宅ごとにボランティアの中から仮設担当リーダー（各仮設に2名）を決めるという、担当制をしいた。リーダーには地元ボランティアを優先させ活動の継続と地域性を前面に出し、ボランティアは日常活動の中で、場所・曜日を決めて仮設住宅の巡回をした。

仮設担当リーダーは朝のミーティングで必要な数のボランティアを引き連れて、担当の仮設住宅を回った。さらに、月1回は、茶話やかテントを持って担当の仮設住宅に出かけるのだが、その時には、巡回訪問で出会った住民を呼び出すということにした。この茶話やかテントで、後々、ふれあいセンターの運営の中心部分を担う人材を発掘できたという成果もあった。

2. ありがたい地域外からの支援――「ネットワーク」を支えるネットワーク

「ネットワーク」がここまで活動を続けてこられたのは、さまざまな地域外のネットワークの連携や支援によるものが多い。

きわだったものだけでも、YMCA関係からの物資やボランティア、さわやか福祉財団等、在宅支援団体からの義援金や情報の集約発信、「応援する市民の会」からはスタッフの配置など、枚挙にいとまがない。他に多数の団体、個人を合わせると、実に500件以上数多くのネットワークに支えられて今日に至っているのである。さまざまな団体と連携できた結果、資金や物資や情報を集められたのだといえる。

震災以前に作られていたネットワークは現在の広がりの2～3割で、立ち上がりはそのつながりによって助けられた。以後は、訪問団体をまきこんだり、個人的なつながりでひろげ、新しく獲得したネットワークが全体の7割ぐらいいのぼる。

（表4参照）

表4

東灘・地域助け合いネットワークのネットワークマップ
(団体のみ) 1996. 2月現在

注：■は震災以前よりつながりのあった団体

3. 地域の内に根ざし外へ展開する——「ネットワーク」の移植と増殖

「ネットワーク」の活動は地域の内外で注目され、「ネットワーク」方式が移植されたり、増殖が行われている。

(1) 求められる支援プログラム——地域内のネットワークの展開

住民への運営移管後のふれあいセンターの運営をめぐって、東灘区内ふれあいセンター交流会が開かれている。当初、「ネットワーク」が関わっているセンター8カ所の参加で開かれたが、第2回目からは区内13カ所の全員出席で開かれるようになった。ふれあいセンターの運営委員会の半分以上は自治会とも重なっているため、この交流会は区内仮設住宅地域住民組織の協議会の様相を呈している。「ネットワーク」はこの地域ネットワークの世話役、事務局となっている。今後は、開催場所を持ち回りとし、持ち回り地域のセンター運営委員会と共同して、事務局を続けることになっている。この地域ネットワークのための情報やノウハウ、プログラムの提供能力が問われている。（資料編：資料5参照）

(2) 活動モデル（作業・ノウハウ等）を通して——被災地・地域助け合いネットワークへ

一方、東灘・地域助け合いネットワークを各地に移植して、被災地全体をカバーする地域ケアの体制がとれるように活動をしている。

既に、市民・連合ボランティアネットワークと連携した神戸西・助け合いネットワーク（須磨区）、神戸中央・助け合いネットワーク（中央区）の他、東灘・地域助け合いネットワークの参加者の中からの株分けとして、西宮・地域たすけあいネットワークが設立された。協力団体としてマイム・マイム（尼崎）も加わり、これらの団体では、東灘・地域助け合いネットワークのノウハウが生かされている。移送サービス、茶話やかテント、茶話やかパラソル、研修等の事業は各団体の共通したメニューとなっている。

市民・連合ボランティアネットワークとの連携事業は1997年4月までで、その間、活動事業モデルの提供、共催事業の開催などを協力して行うこととなっている。東灘・地域助け合いネットワークは市民・連合ボランティアネットワークに、「東部事務所」を提供し、また、事業モデル及びノウハウを提供することで、「市民・連合」側からアドバイザーフィーを受け取る関係である。

このプロジェクト終了後も、被災地の地域助け合いネットワークとして各団体が地域ケアの供給団体として活動できるよう引き続き連携・支援したい。

(3)信頼関係を築く——講師、パネラー派遣

4月から11月まで計38回、月平均5回の派遣を行ってきた。ボランティア活動への理解と広がりネットワーク化に期待を寄せ、今後も継続的に実施予定。特に、代表幹事の中村順子が〈財〉さわやか福祉財団のリーダー研修会講師として、定期的に全国の市民互助型団体のリーダーと交流し、信頼関係を築いていたことは、資金・人材・情報・物資の迅速柔軟な供給につながった。平時の関係が危機管理ネットワークの形成に最も重要であることを教えられた。(表5参照)

この経験に基づき、さらに、実態調査をふまえて緊急時の団体間協定を策定していきたい。

(4)ボランティアを増やす——勤労市民ボランティア養成講座

被災地復興と支援を目指す市民レベルのボランティア養成を目的に、特にサラリーマン、OLを対象に実務入門講座として開催。11月に第1回を開き、既に70名が修了。年4回開催予定である。

「ネットワーク」から、カリキュラム編成、講師派遣や紹介、など全体の企画協力にあたり、修了者は、各助け合いネットワーク団体に所属し活動することになっている。(構成団体は全労済、市民・連合ボランティアネットワーク)

4. パートナシップを求めて——行政との関係

「ネットワーク」はボランタリー団体(市民活動団体)として、自立の道を模索し続けている。自立していることによってこそ、行政とも真の連携・パートナーシップができるのではないかと考えている。

(1)ボランティアを手足に使う時代は終わった——情報の共有

3章でも述べたが、ボランタリー団体は自分たちの活動で手いっぱいであるから、地域全体、地域の本当のニーズや他のボランティアの活動も見えない。それをボランティアや市民に見せてくれるのが行政の一番大きな役割ではないのかと思う。

ニーズ調査にしても、同じ仮設住宅に行政の調査が、警察、消防、保健、福祉関係の4つが入る。そして、ボランタリー団体も地元だけでなく、全国規模でいろいろな所が入る。そうするとどうなるか。真面目な住民は調査に7~8件は答えることになる。これでは、住民から、一本化してほしいという声が出るのは当然である。

せめて、行政の調査は行政内部でまとめてヒアリング調査して、その結果を情報公開すべきではないか。ところが、こちらが、公開される情報についての管理をきちんとする(たとえば、責任者を決める、安否確認にしか使わない、絶対もらさない)ということで、行政に公開をお願いしても、いまでも、なぜか答えは「公開はできない」

表5

講師・パネラー派遣などの記録 (1995.4~1996.3)

95	取材	講師・パネラー	会議
4月	・日経新聞/大阪支社 ・「ミセス」 ・NHK/大阪、京都、高松 ・毎日新聞/神戸支局 ・産経新聞/神戸総局 ・神戸新聞	・NHK大阪(芝崎信子)	・NGO連絡会議(4/12, 4/26) ・茶話やかテント企画会議(4/13) ・幹事会(4/9, 4/13, 4/16, 4/22) ・市民・連合ネットワーク(4/24)
5月	・読売新聞新聞/大阪 ・神戸新聞 ・毎日新聞/神戸 ・NHK/高松 ・サンテレビ ・日経新聞 ・関西TV	・神戸市とV団体の懇談会(星野裕志) ・WACヘルパー研修(中村順子) ・阪神大震災・被災地を応援する オホーツク市民の会(中村順子) ・大阪市立婦人会館(中村順子)	・仮設リーダー会議(5/2) ・幹事会(5/3, 5/15) ・NGO連絡会議 (5/9, 5/10, 5/18, 5/24) ・市民・連合ネットワーク (5/10, 5/11, 5/16, 5/31) ・仮設改善会議(5/13) ・東灘区V連絡会(5/23) ・応援する市民の会(5/29) ・東灘区社協評議員会(5/30) ・東灘区ネットワーク連絡会 (5/19, 5/26)
6月	・サンケイ新聞/神戸 ・NHK/高松、大阪 ・毎日新聞 ・MBSラジオ/神戸 ・日経新聞 ・神戸新聞 ・朝日新聞/大阪 ・読売新聞 ・共同通信 ・神大附属小 ・月刊オール関西 ・「くらしの木」 ・ロータリークラブ ・コープこうべ ・県立女性センター ・「インテリジェンス」	・高齢者の今後の生活を考える旅 同伴(芝崎信子) ・6/11「明日の福祉への提言」長崎 (中村順子) ・6/11「震災復興体験をふまえたこれから の市民活動」(坪光子) ・6/20伊丹ふれあい公社ヘルパー研修 (中村順子) ・6/24東灘区もっとボランティア講座 (星野裕志) ・6/24エイ・フォーラム(中村順子) ・6/30河合塾エンリッチ講座(中村順子)	・市民・連合ネットワーク (6/6, 6/17) ・仮設住宅支援会議(6/7) ・高齢者財産管理研究会(6/8) ・NGO(6/9, 6/14, 6/21, 6/28) ・幹事会(6/10, 6/26) ・東灘ネットワーク連絡会(6/16) ・ふれセン運営会議(6/18, 6/24, 6/28) ・応援する市民の会(6/19) ・ふれセン深江浜(6/25) ・ならまちづくり(6/2)

95	取材	講師・パネラー	会議	支援協力事業
7月	・読売新聞/大阪 ・NHK/東京 ・読売新聞/神戸 ・NHK/大阪 ・フジTV ・神戸新聞 ・毎日新聞 ・読売新聞/大阪 ・朝日新聞とわく ・週刊文春 ・文芸春秋 ・サンテレビ ・県民運動推進本部 ・朝日新聞/大阪 ・大阪府企画調整部 ・尼崎被災市民ネットワーク ・サンケイリビング ・インテリジェント	・阪神淡路大震災から学ぶ パネラー(中村順子) ・「阪神大震災と ボランティア」兵庫県 リポーター(中村順子) ・「市民互助型団体さわやか リーダー研修会」 講師(中村順子)	・NGO仮設支援連絡会 (7/5, 7/12, 7/26) ・ヒューマンネットワーク 研究会(7/19) ・東灘ネットワーク連絡会 (7/21) ・神戸西助け合い ネットワーク会議 (7/21, 7/27) ・東灘警察対策会議(7/17)	・踏み合配布 世田谷協 大阪ガス ・神戸西助け合いネット ワーク立ち上げ支援 ・くらしのべんり販配布 1000部 ・ふれあいセンター (深江浜、瀬戸) たちあげ支援 (六アイ北・南) ・神奈川県超党派視察団 受入(7/22) ・協同の苑開所式
8月	・時事通信 ・朝日新聞 ・毎日新聞 ・神戸新聞 ・文化放送 ・読売新聞 ・NHK/大阪 ・神奈川TV ・サンテレビ	・東灘区社協Vr養成講座 ・「大地震から」横浜 パネラー(中村順子)	・NGO連絡会 (8/3, 8/9, 8/30) ・神戸西スタッフ会議 (8/9, 8/22, 8/29) ・東灘区ボランティア グループ連絡会 ・県「被災者復興支援会議」	・杉並区議員団視察受入 ・全労災介護VTR編集 ・ふれあいセンター オープニング (深江浜、瀬戸、 六アイ北、六アイ南) ・ホームヘルプシステム 研究 ・神商子供サマー フェスティバル ・西宮たすけあい ネットワーク ・市民活動支援システム 研究会
9月	・NHK/神戸 ・朝日新聞/神戸 ・NHK/大阪	・「阪神大震災復興フォーラム」 中央労協協 パネラー(中村順子) ・「ボランティア活動に あたって」(中村順子) マーブル主催 ・「仲間づくりのための 私開発講座」 (中村順子) 県女性センター講座 ・「市民と市長の ふれあいトーク」 (中村順子) ・市民互助型団体 (中村順子) ・さわやかリーダー研修会 (中村順子)	・インターネット活用 セミナー ・神戸西スタッフ会議 (9/4, 9/12, 9/26) ・NGO連絡会議 (9/6, 9/13, 9/20, 9/27) ・東灘区ボランティア連絡会 (9/8) ・市民・連合ボランティア 三役懇談会(9/14) ・市民・連合ネットワーク 幹事会(9/14) ・コーディネーター 養成企画会議(9/13) ・WACアクティブ グループ運営(9/20) ・東灘ネットワーク連絡会 (9/22)	・「勤労市民向け ボランティア 研修講座」 全労災-市民・連合-東灘 ・「災害とボランティア」 調査プロジェクト ヒアリング ・六甲北ふれセン立ち上げ ・本庄ふれセン立ち上げ ・ロータスガーデン開所式 ・市民活動システム研究会

95	取材	講師・パネラー	会議	支援協力事業
10月	・毎日新聞(希望新聞) ・神戸新聞 ・神戸大・震災研究室 ・エル・コープ ・町田市サービス公社 ・SVA/神戸 ・東京近郊映画 ・読売新聞/大阪 ・サンケイリビング ・インタークエスト	・市民講座「震災報道を問う被災 住民はマスコミをどう見たか」 読売新聞 パネラー(阪本弘) ・「今、なぜボランティアか」 ゼンセン同盟 講師(中井真子) ・さわやかボランティア研修会 講師(中井真子) ・「震災からの精神的復興と 福祉のまちづくりにむけて」 県社会 パネラー(中井真子) ・ホームヘルパー2級研修 WACやわらぎ 講師(中井真子) ・自治研全国大会「被災地とまちづく り・阪神大震災の経験と学ぶ」 講師(阪本弘) ・地域医療シンポジウム シンポジスト(中井真子)	・NGO支援協議会(10/4,11) ・NGO支援全体会議(10/6) ・神戸西・地域がけ合いネットワー クスタッフ会議(10/4,11,23) ・六甲アイランド北ふれあいセンタ ー運営委員会(10/7) ・東灘区ボランティアグループ連絡会 (10/13) ・常任幹事会(10/13) ・市民・連合ボランティアネットワー ク現地視察会(10/17) ・神戸西・地域がけ合いネットワー クボランティアランチの集い(10/26) ・「市民活動支援システムに関する 調査研究」東灘区委員会(10/27) ・「市民活動支援システムに関する 調査研究」総務調査委員会(10/30) ・全労済ホームヘルパーボランティア 集い(10/31)	・神戸ふれあいセンター健康診 断の呼び込み(10/25) ・六甲アイランド南ふれあいセン ター健康診断の呼び込み(10/25) ・「市民活動支援システム形式 に関する調査研究」 ・東灘ボランティア協会 アンケ ー ト協力(10/16) ・さわやかボランティア(10/18) ・インストラクター養成講座受入 ・多岐町受入 ・神戸ふれあいセンターイベント 受入れ ・東灘区社会福祉協議会 アンケ ー ト協力 ・東灘区福祉「ウォークラリー」 ・「ワイルドフラワー」被災地巡回 5000株配布
11月	・時事通信社(11/29) ・京都新聞 ・朝日新聞とわーく ・NHK大阪 ・日本女子大 ・グラフ「神戸」 ・兵部県「ニューひょうご」 ・神戸新聞 ・読売新聞/大阪・京都 ・朝日新聞/神戸 ・WAC「ふれあいやうと」 ・毎日新聞/阪神 ・兵部県社会協 ・NHK神戸WAC	・震災と地域づくり京都生協主催 講師(中井真子) ・「仲間づくり」大阪ドーンセンター 講師(中井真子) ・JA主催ホームヘルパー養成講座 講師(中井真子) ・神戸市ヘルパーグループ勉強会 講師(中井真子) ・第1回「神戸市ボランティア養成 講座」講師(星野谷志) (斉藤文夫) (中井真子) ・さわやかボランティア研修会 講師(中井真子) ・ボランティア入門講座 講師(芝崎信子、武田純子)	・学習会「かせつ寺子屋」(11/1) ・全労済介護ビデオ制作会議(11/2) ・保護者自治会づくりフォーラム (11/4) ・ふれあいセンター情報交換(11/6) ・第4回 拡大幹事会(11/9) ・東灘区ボランティアグループ連絡会 (11/10) ・東灘区ネットワーク連絡会幹事会 (11/13) ・東灘区ネットワーク連絡会(11/17) ・神戸中央 神戸西 助け合いネッ トワークスタッフ会議(11/21) ・神戸YMCA協議委員会(11/29)	・神戸ふれあいセンター健康診断 の呼び込み(11/1) ・六甲アイランド南ふれあいセン ター健康診断の呼び込み(11/2) ・六甲アイランド北ふれあいセン ター健康診断の呼び込み(11/16) ・保護者自治会づくり等の視察研修 広島県広島市(11/29) ・第一回助成・市民ボランティア 養成講座(11/18-12/3) ・東灘区福祉入居者(11/17) ・東灘区福祉入居者(11/17) ・新田市「住みかた」本中公演 ・六甲アイランド第2・第3ふれ あいセンターオープン(11/7)
12月	・東海大 岡本助教授(12/22) ・長岡まちづくりネットワーク ・大阪教育大/松井(12/20) ・連合大阪(12/21) ・東灘ボランティア(12/21) ・時事通信(12/2,7,21) ・東北放送 ・NHK/西館 ・毎日放送/神戸 ・読売新聞 ・NHK/大阪 ・「ふえみん」婦人民主新聞 ・イズミヤ ・NHK/静岡	・市民・連合 阪神東灘大震災東京フォーラム 講師(星野谷志)	・第20回神戸キリシタン賞授呈式 (12/1) ・「市民活動支援システムに関する 調査研究」東灘区委員会(12/1) ・東灘区内ふれあいセンター交流会 (12/5) ・東灘区ボランティアグループ連絡会 (12/8) ・東灘区地域ケアネットワーク会議 (12/15) ・草の根団体(市民活動型団体)全国 ネットワーク連絡会総会に関する 意見交換会(12/16) ・NGO支援全体会議(12/20) ・ふれあいセンター情報交換(12/4)	・復興中ふれあいオープン ・軽費老人ホーム「住吉荘」再建 署名活動 東灘区出町所 被災者区民センター打ち切り反対 署名活動 東灘区民会 ・神戸ふれあいクリスマス会 ・マリンライオンズ・羽毛ベスト 配布 1000着 ・六甲アイランド 第3地味餅つき大会 ・六甲アイランド 北地味クリスマス会 ・六甲アイランド 南地味クリスマス会 ・「市民活動支援システム形成 に関する調査研究」 イギリス訪問 12/9~12/17 ・アンケート協力 ・兵庫県21世紀教育協議会 東灘区ボランティアセンター 「サチアボ」ディラット ・生活支援ガイドブック配布 2000部

96	取材	講師・パネラー	会議	支援協力事業
1月	・ルービーエンス氏(1/10) ・新田研所インタビュー (1/10) ・週刊現代(1/13) ・テレビ東京「もっと知りたい ニッポン」(1/16) ・読売新聞(1/23) ・WACふれあいネット (1/24,26)	・ひょうごフェニックスセミナー 「ボランティア、これから」 パネラー(中井真子) ・日本労働組合総連合会震災シンポジ ウム「あの日から365日」 シンポジスト(中井真子) ・全労済1/21イベントボランティ アのオリエンテーション 講師(星野谷志) ・阪神・淡路大震災とボランティア 活動シンポジウム「金沢リライフサ ークル」シンポジスト(中井真子) ・市民福祉大学「NPOとボランティ ア活動」講師(星野谷志) ・「在宅介護とボランティア 豊かに 助け合い、ささあう地域を目指し て!」パネラー(中井真子)	・「市民活動支援システムに関する 調査研究」総務調査委員会(1/11) ・常任幹事会(1/12) ・東灘区ボランティア部会(1/12) ・「わくわく神戸」設立総会(1/17) ・市民・連合VNW現地視察会 (1/17) ・東灘区地域ケアネットワーク会議 (1/19) ・東灘ボランティアと交流会(1/19) ・平成8年度ライフサークル新年会 (1/21) ・知事会「復興計画の推進とその 課題」講師(星野谷志) ・東灘区民生総務会(1/23) ・神戸中央 神戸西 助け合いネッ トワーク代わき者会議(1/26) ・民部省活動支援のあり方検討委員 会(1/29) ・神戸YMCA協議委員会(1/30)	・市民・連合イベント「かんぱろ う会」(1/14) ・全労済イベント「1/21」 (1/20) ・復興支援 新春 花とふれあ いフェスタ(1/21) ・豊川高校(名古屋)六甲アイラ ンドイベント受入れ ・「市民活動支援システム形成 に関する調査研究」
2月	・アルプラン一級建築事務所 ヒアリング(2/1) ・共同通信(2/6) ・震災・活動記録室(2/6) ・全労済(2/15) ・情報発信(2/15) ・NHK神戸(2/17,22) ・さわやか健康(2/20) ・日本農業新聞(2/22)	・全労済ホームヘルパー研修講座 講師(中井真子) ・長寿社会文化協会ホームヘルパー 養成講座 講師(中井真子) ・さわやか健康講座「リーダー研 修会」講師(中井真子) ・県立神戸生涯学習センター「平成 7年度生涯学習アドバイザー養成講 座」講師(中井真子) ・宝塚市環境福祉サービス公社 「阪神大震災からみた地域の役割」 講師(中井真子) ・第2回全労済神戸市ボランティア 養成講座 講師(斉藤文夫) (中井真子) (中井真子) (中井真子) ・神戸市「ボランティア活動と人権 〜阪神・淡路大震災から一年〜」 講師(中井真子) ・新田研所「生活文化フォーラム まちづくりとボランティア」 講師(中井真子)	・ふれあいセンター担当者 意見情報交換(2/5) ・第20回神戸市評議会(2/8) ・県社会文化協会「ボランティア 活動支援全国フォーラム」 (2/8) ・東灘区ボランティアグループ連絡会 (2/9) ・第2回東灘区内ふれあいセンター交 流会(2/15) ・「市民活動支援システムに関する 調査研究」東灘区委員会(2/16) ・東灘区地域ケアネットワーク会議 (2/16) ・多岐町社会福祉協議会「ボラン ティア・リーダー交流会」(2/19) ・「阪神大震災からみた地域の役 割」金鑑(2/21) ・「市民活動支援システムに関する 調査研究」総務調査委員会(2/23) ・市民・連合VNW現地視察会 (2/27)	・東灘区民会 東灘区民会「可 張ろう」映画会(2/24) ・第二回全労済神戸市 ボランティア養成講座 (2/17-3/3) ・ジャスコ 節分ふれあい式司書 3000本 (2/3) ・市民連合 「NGO法案」ハガキ要請活動 ・アセック「元金メイル」配布 ・国際ロータリークラブ視察受入 ・東灘ロータリークラブ視察受入 ・中国農村地域支援カンパニー NGO地元連絡会共同集約 ・「市民活動支援システム形成 に関する調査研究」
3月	・NHK神戸(3/1) ・「パシフィックフレンド」 (3/2) ・神戸市出社ヒアリング(3/5)	・市民活動の制度を考える連絡会 公開フォーラム 講師(中井真子) ・ジャスコ近畿4県本部「社会責 任活動分科会」講師(中井真子)	・第2回市民活動支援のあり方 検討委員会(3/2) ・東灘・地域がけ合いネットワー ク各担当者月例会(3/4) ・第21回神戸市評議会(3/5) ・地元NGO連絡会(3/5) ・神戸マリンライオンズクラブ 3月第一例会(3/7) ・阪神・淡路大震災ボランティアフ ォーラム「開拓地委員会」(3/8) ・東灘区ボランティアグループ連絡会 (3/8) ・保護者・ふれあいセンター関係者 交流会(3/12)	・横浜 舞岡公園を育む会「震災 時の市民活動に関する検討」 視察受入れ(3/8) ・本区民会民会(3/12) ・多岐町社会福祉協議会 1100 枚 ・兵部県復興10年委員会 みどり紙 裁断セット 4000部 配布 ・阪神ホットゾーン ミニコンサート現地受入れ手伝 い ・神戸ボランティア協会 花と野菜の贈り物 受入準備 ・論「VIG「HAYOT」ふれあ いセンター」受入 ・「市民活動支援システム形成 に関する調査研究」

である。

ボランティアが活動しやすいように、地域の利益につながることは、情報の共有化は絶対の条件であろう。

プライバシーの問題があるというのだが、要はボランティアや市民がまだ信用されていないということだろうか。情報公開がないばかりに、こちらでも独自の調査をしなくてはならず、ボランティア自身や活動に大きな負荷がかかった。

仮設住宅は出入りが激しく、実際に仮設の自治会の人達もそれを確認できなくて困っているということがある。

また、情報公開についていえば、地域の高齢者や障害者についてもデータが出てこない。老人ケアに際しては、それがないと、とんでもないこと（持病を知らずに処置をするなど）になって、取り返しがつかないことが起るという危惧もある。

逆に、行政はボランティア団体に情報提供をさせ、手足として使うということがあるのではないだろうか。市民をアリバイづくりや情報の一方的吸い上げのみに利用せず、情報の共有化や一部権限の委譲を大胆に行ってこそ真のパートナーになるのである。

(2)公の場所は共用を——拠点の提供

「ネットワーク」の活動拠点は立ち上げ当初1ヶ月半の間に3回も移転している。結果としては幸い、現在の区役所の中庭を行政から借りることができた。

この間の場所探しは、リーダーにとってその都度「もし見つからなければ活動を閉じるしかない」と思わせるほど悩み深いものであった。電話、ファックス、コピー機、印刷機、ワープロ、パソコンについても、すべてが揃うのに2ヶ月を要し、その間の不便やロスタイムは活動の質の低減、減速となった。これらへのエネルギーを、立ち上げの時だからこそ、ニーズ把握やニーズに沿った活動にふり向けたいものである。

(3)必要な市民活動基金——資金の確保

差し迫ったニーズに対応することを先決として生まれた「ネットワーク」に資金の目処などは持ちようもない。個人レベルの寄付が初動期を支え活動を軌道に乗せてくれたが、大震災という特殊事情下でのことである。

このような状況下においては義援金の柔軟な運用、さらに、市民活動を平時から支援できる自由な市民活動基金などが検討されるべきだろう。

第4章 地域コミュニティをつくる——「ネットワーク」の今後の課題

この「ネットワーク」の記録は過去の「活動報告」ではない。これは現在を確認する「経過報告」であり、さらに未来への「展望報告」でありたい。

いま、「ネットワーク」はボランティア団体として地縁組織や地域諸機関と肩を並べ、それらをリードするようなコミュニティづくりに踏み込んでしまっている。ここでは、まず、「ネットワーク」のボランティアとコーディネーターの現実とそのあり方を整理するとともに、震災ボランティアの地域活動モデルを提案してみる。さらに、新しいコミュニティづくりを担うためには、「ネットワーク」がどのような問題と課題を持っているのかを明らかに、「ネットワーク」の未来への課題を見てみた。

1 さらに広く、さらに深く——ボランティアとコーディネーターのあり方

地域の人々の要望があって、それに対応するボランティアがいて、活動が生まれる。コーディネーターはその両者をつなぐ接点であり、スムーズに活動の流れをつくることが仕事である。ボランティアをする側とされる側の関係も難しい。ボランティアの引き際などについての意見も紹介して見よう。

1. 支援される側との人間関係——くじけず、さりげなく

ふれあいセンターの運営にかかわるまでに、瀬戸（それに付随して魚崎第1、第2）、本庄、深江浜の仮設住宅では、ヒアリング調査に入ったり、茶話やかテントの活動などで地域の人々とのコミュニケーションや人間関係ができていた。（住吉、御影は他のボランティア団体が入りやすい場所にあったので、他のボランティア団体に任せた）

瀬戸（それに付随して魚崎第1、第2）、本庄、深江浜のふれあいセンターでの活動が軌道に乗り始めたころ、六甲アイランドの2つのふれあいセンターの運営を任せたいという話が持ち上がった。六甲アイランド北ふれあいセンターは500戸、南ふれあいセンターは1500戸対象という大規模なものだった。（現在六甲アイランドには7つのふれあいセンターが建設されている）

(1) 雨降ってボランティアの位置固まる——ふれあいセンターでの体験

六甲アイランドのふれあいセンターには、はじめから行政と社会福祉協議会がからんでいた。社会福祉協議会が友愛訪問のボランティアを呼びかけ組織していた。そこへ、「ネットワーク」に管理運営を任せたいという申し入れがあったものの、当初「ネットワーク」で引き受けるのは無理だと判断した経緯もあった。

最終的には引き受けることになって、行政や社会福祉協議会と3回会議を重ね、オープンの日を迎えるが、その日は思わぬ展開となる。住民のひとりが、オープン会場に激情してあらわれたのである。避難所ではリーダー格の人物で、地域住民が主役のふれあいセンターをなぜボランティアがしきのかという不快感やとまどいを持たれたらしかった。事情は説明したけれど、感情論を述べられるのでなかなか収拾できなかった。その場に役所の職員も同席していたが、援護発言もなかった。「ネットワーク」側は、そうした人物の存在も知らされなかった上、住民からの非難の矢面に立って、ふんだりけったり、結果として貧乏くじを引かされた。

その事件の後、「ネットワーク」は、一部住民の案にしたい南ふれあいセンターから一旦全面的に引くことにした。しかし、その後間もなく、「ネットワーク」にもう一度帰ってきてほしいという依頼が舞い込む。第三者的立場のボランティアに入ってもらいたい、楽しいイベントや催しをしてほしいというのが、その理由だったようだ。うまくおさまるまで、2〜3ヶ月間の軋轢があった。

最終的に、「ネットワーク」は、ふれあいセンターの運営委員の一人として参加、一週間に一日の当番を引き受けることとなった。

仮設入居者はその全員が自宅をなくし、ある人は家族を亡くしたなどの喪失体験者で占められ、日常生活の切りもりに神経をさく日々の中、自分の生活以外にさく力には限界がある。又、自己表現に乱暴さや悲壮感も否めないのかも知れない。このような深層を理解する必要性と難しさをとおぼえた一件であった。

(2) 同じテーブルで——六甲アイランドのふれあいセンターでの教訓

行政主導の事業でのボランティア団体の協力の仕方は、必ず、地域住民と行政、ボランティア団体の3者が同じテーブルについて活動や事業をすすめなくてはいけないということ。

そもそも、行政主導の事業に、ボランティア団体が協力するのがよかったのかどうかも課題として残ったのではないか。その分、六甲アイランド以外の市街地のふれあいセンターの活動を深める方が意義があったのではないかという意見もある。

(3) 自然に聞く——ふれあいセンターの成功は仮設地域でのローラー作戦

仮設住宅はどこに誰が入っているのか、わからない。表札を見ながら、地元ボランティアと応援ボランティア又は新人ボランティアが組んで、一軒一軒ヒアリングに入ることから始めた。この時、注意したことは、相手にいやがられそうなことは避けながら聞くこと。年齢、家族構成、電話番号なども話の成り行きで自然に聞けたら書きとめるということで、その時の記入調査票を見ると、電話番号が空白など完全に記入できていないものがいくつもある。聞いたことを目の前で調査用紙に記入しないこと

もこころがけた。

また、分担を決めて、同じ地域に同じ人ができるだけ訪問することにした。いつも同じ顔が訪問すれば、住民の人にとって一つの安心材料となる。いつの間にか、顔見知りになり、お茶でもという関係も生まれはじめる。

実際、仮設住宅には、母子家庭や老人のひとりぐらしも多く、ヒアリング調査に答えることに對して慎重になるのは、身の安全のためにも当然のことであろう。ヒアリングをするボランティアは人生経験の豊かな年齢層の方が安心されるということがあった。

こういう住民の方とボランティアとの個人的なコミュニケーションが成立する中で、ふれあいセンターにおいて活躍してもらえる人材発掘も可能となり、ふれあいセンターの運営のイメージなども浮かんだ。

ふれあいセンターのオープンまで、センターらしく整える（買い物など）作業は「ネットワーク」でとりしきった。その後半年くらいは「ネットワーク」で管理運営をしたが、半年の後、すべてのふれあいセンターの管理運営は住民組織をつくって住民の手に返した。

立ち上がりの運営には協力するが、できるだけ早い機会に住民の方に管理運営を移管するという「ネットワーク」のスタンスを実行した結果であり、その後は当番制のある所では当番とプログラムや催しのサポートに徹している。

(4) ボランティアの引き際——その見極めのポイント

ふれあいセンターの活動はいまは完全にうまくいっている。その理由はボランティアが完全に黒子になっているからだ。住民との距離の取り方がポイントとなるが、いまは丁度いい距離感がとれている。やや不足気味ぐらいの関係がいいのではないか。

ボランティアが前面にすぎているはいけない。「ネットワーク」がかかわっていない他の地区の例だが、うまくいっていないところは、お金と鍵をいまでもボランティアがにぎっているなど、ボランティアが出すぎているところである。

震災直後の外部からのボランティアの引き際についてはいろいろなことが言われたが、どのようなボランティア活動の場合にも、引き際は大切な問題だろう。ふれあいセンターの管理運営を住民に返すときも、それぞれ特徴があって時間差ができた。引き際の目安がはっきりわかれば苦労はないわけで、なかなかそこが見極められず、住民からボランティアはもう要らないというような声が聞かれるケースもおこる。抽象的な表現になるが、引き際の見極め、その兆候をつぎにいくつかあげておこう。

①それまでは、全ての要望に応えなければと思っていたのに、ある時、してほしいという要望に応えるのが何故かしんどいと感じてしまう。

②住民が動いているのがわかると、もうそろそろいいんだなあ、と思う。

③リーダーっぽい人が地域にあらわれる。

(逆にそういう人があらわれないと、いつまでも自立できないのかもしれない)

もし、引き際のマニュアルができれば、ボランティアの自己診断に使えるのではないだろうか。

2. コーディネーター論——多様性を認める力

仮設住宅で担当リーダーとなった人たちは、ふれあいセンター運営の時には自然に、そこでもリーダーとして活躍している。リーダーが現場から帰ってきたら、その日のワークについて、よく話を聞き、そして評価できるものは評価する。

コーディネーターが育つまでには3～4年かかるといわれている。基礎理論は必要としても、基本的にコーディネーターは実地の実践の中で育つものである。人は100人いれば、100通りに違う。ケーススタディの積み重ねが、その人の財産となるからだ。

(1)受けとめる・説得する——違いのわかるコーディネート

ボランティアとクライアントのコーディネートは「ネットワーク」の日常業務であり、この仕事を遂行する際には、次のような点に留意している。

まず、コーディネーターはクライアントに対して、クライアントの生活のしかたや価値観をきちんと受けとめられる人でなければならぬ。クライアントそれぞれの暮らしの違いをわかった上で、それぞれの多様な価値観を受けとめる力をもっている必要がある。さらに、相手を大事にし、主体を相手に置かなければならない。古い言い方では自分を殺すということである。もちろん、無理な要求などに対しては、納得してもらえるように話せる力も必要だ。ゆめゆめ、自分の思いが違うからと、自分の価値観を押しつけたりしてはいけない。反対に自分の思いと違うと批判に回る人もいるがそれは論外。

一方、ボランティアに対しては、クライアントに対するそういう対し方をきちんと語って説得できる力が必要である。

クライアントと、ボランティアに対する双方向のコーディネーターの能力を持つコーディネーターを育てるためには、実践を積み重ねるしかない。東灘・地域助け合いネットワークでは、リーダーが悩んだり、疑問を持つケースや問題に対して、研修やリーダー会議で納得のいくまで話し合う。リーダーが直面する解決しなければならない問題が、そのリーダーを成長させ、その解決のたびに新しい価値観をまた一つ身につける機会となる。

(2)地域性が鍵——6つのコーディネート

さらに「ネットワーク」におけるコーディネートを細かく見れば、以下の6つのタイプがある。

① 企業と市民とのコーディネート

企業が市民に対してモノなどの提供を行うイベントを企画した場合など、「ネットワーク」はそのイベント遂行のための人的協力などのコーディネートを行う。

一例をあげると、ふれあいセンターオープン時に、P社からシャンプーの提供を受け、「ネットワーク」のボランティアが協力して数千個を住民に配布した。またJ社から節分の巻き寿司を数千個提供を受け、「ネットワーク」が配布の仕切りをすべて担当した。

② 社会福祉協議会と市民とのコーディネート

社会福祉協議会から支援の提案があった場合、それを市民につないでいくコーディネートを行う。

例をあげると、岩手県社会福祉協議会から被災地にボランティアの派遣ということで、1995年5～8月の4ヶ月間にわたってボランティアの派遣を受け入れた。また、兵庫県多紀郡の5つの社会福祉協議会からは継続して2つの支援を受けている。1つは、仮設住宅への月一回の持ち込みの昼食会であり、2つはボランティアのリフレッシュのための多紀郡への日帰り温泉ツアーである。

③ ボランタリー団体同士のコーディネート

活動エリアが近接する団体同士を紹介し、互いに活動の補足をしあえるような関係づくりをサポートする。これまでの例では、西宮・地域たすけあいネットワーク、尼崎で活躍するマイム・マイムなどの団体についての支援がある。

④ 地域組織同士のコーディネート

東灘区内の13のふれあいセンターの運営委員会の交流会などを引き受けているがこれは地域組織同士のコーディネートの一例である。今後、ふれあいサロンなどを実施していく中でさらに増えてくるものと思われる。

⑤ ボランタリー団体と助成財団などとのコーディネート

被災地でのボランタリー団体の活動に対する助成について、ボランタリー団体に助成を受けるノウハウなどについて助言、アドバイスを行う。これまでの例では、日本財団、さわやか福祉財団、市民・連合などからの助成の助言を行った。

⑥ 行政と市民団体とのコーディネート

ふれあいセンターやふれあいサロンの活動の中で、行政の施策の紹介をする場や機会を行政に提供するなどの、コーディネートを行う。

以上のような多彩なコーディネート活動を東灘・地域助け合いネットワークが引受け、実践することができたのは、地域の実情を把握していることにつける。「ネットワーク」の日常活動の集積としてさまざまな地域の情報が集まり、結果として、

情報収集や発信の役割を果たすようになってきたといえる。

コーディネート活動やそれに携わるコーディネーターに最も重要で必要とされるポイントは、その仕事がコーディネートを任される両者から、継続かつ信頼感をもって受け入れられることである。そういう意味では、コーディネートする団体（コーディネーター）が、どれだけ地域性を持っているか（地域に根をはっているか）、日常の信頼関係を持っているかにかかわってくるといえる。

2 救命から命・生活の維持へ——震災ボランティアの地域活動モデル試案

何度も繰り返すが、初動期の最も重要な問題は地域の人々の要望を知ることであった。とにかく、どこにどんな要望があるのかを把握できないことが問題だった。

そのため、従来から関わりある高齢者を訪ねたり、吊り看板を掲示、ちらし配付はしたもの、それでは間に合わず、土地に詳しい人に困った問題を見つけてきてもらうことから始めた。町の中に偵察隊を出して、ニーズを拾ってきてもらうなど苦肉の策を弄した。

また、同時に日に50～70名のボランティアのオリエンテーションを進めなくてはならなかった。しかし、それに対応できるリーダーを数名しか確保できずスムーズな活動ができにくかった。初動期の混乱の中での活動には、リーダー的働きのできる人が不可欠である。「ネットワーク」規模の活動でも最低5～6名のリーダーが必要だった。

活動を開始して3週間後、やっと「ネットワーク」の組織図らしきものができた。その間、ワーキングチームと事務局チームの意思疎通が充分はかれず幾度か苦い思いもした。

以上の反省から、普段から地域でいかに有能なリーダーを育てていくのかが、最大の課題であると考えた。これまでの活動の経験から、「震災ボランティアの地域活動モデル」を提案したい。このモデルの中で、地域のリーダーを育てていくことができるだろう。（表6参照）

1. 命の救出期——第1期

災害が起こって最初の3日間は命の救出期である。この間行政の出動はほとんどあてにできず、地域内での助け合いがすべてと考えておいた方がよい。ここでの人口規模は約1000人。これを従来の地縁組織だと考える必要はない。井戸のあり場所、避難所の確認、食料の調達も含め、必要な時話し合える友人や知人を持ち、高齢者や障害者など誰がどこに住んでいるのかという確認ができる程度のゆるやかなつながりをふだんからつくっておくことが必要である。このとき、行政からの要援護者の情報公開

表6
震災ボランティアの地域活動モデル

時期		必要な活動	1つの団体がカバーできる人口規模と必要なボランティア	東灘区・震災ボランティア地域活動モデル
3日間	生命の救出期	・地域内での緊急な助け合い ・地域の住民同志が助け合う ・情報の交換 ・水や食料、毛布の抛出 ・避難所の開設	・1000人規模(2～3の町で精一杯) ・地域住民がボランティア	・従来の地縁団体というのではなく、高齢者・障害者などの所在地など確認できる、ゆるやかなつながりをつくっておく ・ボランティア活動の拠点の物色
4日～3・4か月	生命の維持期	・物資(水・食料・衣服)の供給 ・情報の提供 ・避難所の運営 ・情報の集約化 ・行政の窓口一本化 ・責任者の配置	・1万人規模(小学校区見当) ・毎日50～70人のボランティア(外部ボランティアの投入) ・人海戦術による単純労働作業をこなせるボランティア ・日常地域の基本単位 ・ニーズ把握のできる地域のリーダー	・団体は15程度必要。ふだんから外部市民団体とのネットワークづくり ・活動拠点設置 ・活動基盤の整備 ・ネットワークを駆使して事務機能の立ち上げを俊敏に ・行政の対策本部と連携をとり情報提供を得る
4か月以降	生活の維持期	・高齢者・障害者などへの継続サポート ・情報提供 ・地域福祉活動 ・地域ケア活動への移行	・10万人程度(毎日30人のボランティア) ・顔の見える規模に ・継続できるボランティア ・人の心に寄り添えるボランティア ・出来れば地元ボランティアの比率を50%以上に	・東灘・地域助け合いネットワークの活動で、10万人規模をカバーできる ・この単位を1団体のエリアとし、このような規模の団体がネットワークすることによって相乗効果を生む

の問題も浮上する。

2. 命の維持期——第2期

命の救出期に次いでライフラインの復旧する迄の3～4ヶ月までは、水、食べ物、衣服など命を維持するための物資の供給が必要な時期である。一つのボランティア団体が、毎日50～70人のボランティアを投入して、人口1万人規模のコミュニティをサポートできると考える。東灘区を例に取れば15～16組織が必要である。

小学校区に匹敵するエリアで、徒歩なら20分、自転車なら5分の圏域であろうか。(自動車は交通の遮断で機能しない) その後の活動範囲、あるいは小学校が地域の防災拠点として役割を果たした多くの事例をみると、都市部におけるコミュニティのサイズは1万人規模程度を基本単位と考えるのが適当ではないかと思われる。

都市部における近隣はあまり規模を小さくしすぎると弱腰になり、かといって大きすぎ過ぎても機能しない。1万人を多様なプログラムでつないでいく、人々の関心と興味のラインでつなぎメッシュを細かくして地域全体をカバーする。そんなく1万人関心メッシュの地域が有効となるだろう。人々のこの時期の動きは家族～近所～友人～知り合いへと動線を描いている。この自然な動きをもう少し意識的に活性化させることが、本当に有効なコミュニティとなるだろう。

組織的な人的、物的、財政的な支援を必要とするので地元外の団体とも日常的にネットワークをつくり計画的な供給体制を備えることも大切である。

ボランティアは地元供給がおよそ無理なので、外部ボランティアの協力を必要とする。ここでも、ふだんから外部のボランティア団体、市民活動団体とのネットワークが必要になるだろう。活動の内容は物資供給や交通、情報網の代替作業で生活の基盤を整備することが中心となる。このため多くの匿名の外部ボランティアでもマッチング次第で相当な効果をあげることができる。

また、この時期に最も必要なのが、拠点とリーダーである。1団体5～6人の有能なリーダーがいれば、ボランティア団体は立ち上がることができるし、外部からのボランティアをコーディネートし、ボランティアの活躍の場を提供することができる。1万人関心メッシュの活動からリーダーを育てたい。

1万人単位の地域での地域ニーズを的確に素早くキャッチし、活動につなぐ能力は平素からその地域で活動し市民の良き意味でのとりまとめの活動の中からでないと生まれてこない。つまり非常事態に対応する能力は日常の総力であるということが今回ほど証明されたことはないだろう。

今後の都市部における地域活動は1万人を近隣単位とし、どのような方法で住民をつないでいくかがポイントになっていくものと思われる。

3. 生活の維持期——第3期

避難所から仮設住宅や一時的な住居に住まいを移した3～4か月以降は、生活の維持期に入る。継続して生活のサポートが必要な人々は高齢者、障害者、また避難所や仮設住宅で生活環境が著しく変化した人などである。この時期、一つのボランティア団体がカバーできる人口規模は約10万人程度。毎日30名程度のボランティアが活動すればサポート体制がとれるだろう。人口20万弱の東灘を例に取れば、2つの団体でフォローが可能であるように思われる。特に仮設住宅の高齢化率は最高72%、平均でも42%という超高齢化地域であり、きめ細やかな日常的ケアや健康づくりのプログラムが必要であることはいままでのまではない。

お互いに顔見知りで名前を呼びあう人間関係の中ではじめてよいケアができる。したがってあまり規模を拡大しすぎないことがむしろ大切になってくるだろう。

又、応援ボランティアについてはライフラインの復旧とともに活動の主体を地元住民ボランティアに移行し撤退をスムーズに行うことが必要であろう。そういう構図ができるよう地元ボランティアの立ちあげや力づけを計画的に行っておくことは、〈被災地の自立〉の観点からも大切なことである。

ボランティアの役割が急激に変化するので、ボランティア自身も出来ることとできないことを自覚し無理な安請け合いは極力さげなければいけない。

3 新しい地域コミュニティをめざして——「ネットワーク」の課題と展開方向

これまでの活動展開過程を整理し、非常時にも対応できる人々の関心と興味をつなぐコミュニティづくりを提案してみる。さらに、外部ウォッチャーから新しいコミュニティをづくりを担う上で「ネットワーク」のもつ問題と課題についての指摘を受け、「ネットワーク」の未来への課題を考えてみた。この課題をも受けて「ネットワーク」がとるべき方向性と方策、組織整備のあり方について見てみよう。

1. 4つの活動レベル——これまでの活動展開過程

「ネットワーク」には特別な活動の原則や方向があるわけではない。しかし、特徴らしきものはある。思いつくままにあげれば、「地元のボランティアが中心になる」「実践第一、事例や実績を通して支持やネットワークをひろげる」「状況やニーズに敏感で柔軟に、そして機動的に対応する」などであろうか。この結果、活動の内容では震災救援活動⇒生活支援活動⇒コミュニティ活動へと幅を広げてきている。ボランティアも、少し力はあるが誰もがができる震災ボランティアから高齢化問題に対応できるボランティアへ、さらに加えてコミュニティ活動に関わるボランティアなど、ひろく深く、多面的な対応が要求されるボランティアへと変遷しつつある。

これらの変遷に対しても、ボランティア間のフラットな関係を大切にしつつ、議論

や研修を重ねながらどんどん責任ある仕事をしてもらうようにしている。「ネットワーク」はボランティアの集まりやすい場であるとともに、そこで市民として成長する場であらうとしてきた。

さらに、すでに見たようなさまざまなネットワークをつくってきた。「ネットワーク」自身が多くの人々や団体に支えられているが、そのことはひとまずおいて、震災ボランティアの地域活動モデルに従えば地域的には、以下の4つのレベルの活動展開に整理できる。

- ①仮設住宅地域間のネットワーク（「ふれあいセンター交流会」など）
- ②人口1万人規模での地域ネットワーク（「ふれあいサロンの活動」など）
- ③人口10万人規模での地域ネットワーク（「ネットワーク」自身の活動）
- ④被災地域・助け合いネットワーク（「各地・助け合いネットワーク間の連携」）

①、④はある程度軌道にのって活動が展開されている。いま、とりかかっているのは「ふれあいサロン」である。

2. それぞれの興味を軸に——「1万人関心メッシュ」の地域づくり

ふれあいサロンでは、現在取り組んでいる医療機関のサロンに限らず地域に存在するあらゆる社会資源、行政、地域組織、「ネットワーク」が共同し、お互いの持ち味を最大限生かしていこうと考えている。仮設住宅のふれあいセンターと同じ方式で、地域リーダーを育てていこうとしている。ふれあいセンターや茶話やかテントで培ってきた経験とノウハウを注ぎこみ、新しいコミュニティの有り方を考えている。

近隣のプライバシーに踏み込まず、しかも緊急時には安否確認がすぐできるコミュニティ。面を細かく区切った画一的近隣ではなく関心や興味による行動を基軸にしたコミュニティのあり方を模索した。サイズは1万人程度。すでに見たように徒歩20分、自転車5分は小学校区（約1万人）に匹敵し災害直後の初動を見たとき、まさに人々はこの範囲で家族、友人、知人と安否の確認作業をしているのである。いかにその地域の範囲で友人、知人を持ちうるのか。地域に溶け込めずこもりがちな住民も関心、興味が合えば馴じみもできる。個々人の動機を日常性の中に組み込んだ地域づくりをする時、生き生きしたコミュニティの形成につながるのではないだろうか。大きく言えば、民主主義の実験場である、といえるかもしれない。

これまで、ふれあいセンターの時もそうであったが、コミュニティづくりの中で、ボランティア団体が地縁団体と共同で何かをするということはあまりなかった。しかし、1万人規模のコミュニティを考えた場合、既存団体とともに活動することを抜きにはその実現は不可能である。既存団体も仲間として、また、分野の異なる市民団体とも協力しあい自由でゆるやかなつながりのあるコミュニティづくりを考えたい。

そして、このようなコミュニティづくりは行政の協力は得ても、行政に任せるべき

ものではない。なぜなら、地域で暮らす人々の心のかかわることだからだ。人と人のふれあいの喜びを担うコミュニティづくりは、ボランティアに任せなさい、と行政にも提案していきたい。

3. 確固たる活動理念を――外側から見た「ネットワーク」

今後の課題と課題解決の方向を考えるため、外部の人々に「ネットワーク」がどのように見えているのか。日頃から「ネットワーク」をウォッチしているジャーナリストである宮本進一さんに寄稿をお願いした。

東灘・地域助け合いネットワークに期待するもの

宮本進一（通信社記者）

東灘・地域助け合いネットワークは隙のない団体である。仮に隙があったとしたなら、活動が行き詰まったり、あるいは、これまで活動を続けられなかったのではないか。実際、多くの団体が不本意ながらも撤退を余儀なくされたり、活動規模の縮小を迫られた。その最たる原因は資金である。現在を残っているグループの中にも資金繰りで苦しんでいるところは少なくない。

阪神大震災の被災地におけるボランティア活動が、直後の救援活動から心のケア、コミュニティづくりへと変わっても、また参加者の出入りがあっても、各団体にとって当初からこれまで全く変わらないものがある。その一つは「有償ボランティアへの数百円が払えない人たちをいかに支えるか」という前提だ。震災前の家賃が1万円前後、中には数千円という被災者もいる。このような人たちを支援していくためには、どうしても原則として無償であることが要求されてくる。この点、「ネットワーク」は「思いだけではボランティアはできない」と、早くから資金確保に努めてきた。協賛団体や個人は多数に上っているが、震災前からの地域福祉への取組みも含め、実績が認められたからであろう。こうした協力者の後押しを受け、「ネットワーク」は資金に見合うだけの、あるいはそれ以上の成果を上げてきたと言える。これはマスコミにも盛んに採り上げられて周知のところだ。別の区のあるボランティアも「研修やふれあいサロンなど、うちでもやりたいのだが」と話すほどだ。そして最も大事なのが、被災者がどう受け止め、「ネットワーク」参加者がどう思っているかだが、これまでのところはいずれも好評のようである。

ボランティアの流行がすたれ、今は活動を終えた各団体の報告書ばかりだ、との関係者のボヤキも聞かれる。しかし、現在も活動を発展させている「ネットワーク」の場合は、これからのあり方を採る材料としての意味合いが強い点で他と

は異なる。もちろん将来のための貴重な報告書の一つであることは言うまでもない。

冒頭すこし長くなったが、以上から「ネットワーク」は隙がないと感じられる理由がお分かりいただけたと思う。従って筆者にできることといえば、隙のようなものを示すことぐらいである。後半部分では、被災地内外の二つの先駆的団体の取組みを紹介するが、「ネットワーク」と比較することで、「ネットワーク」が社会のどの位置にあるのか、さらに、今後どのような「動き」が可能なのかについて考える際の参考になれば幸いである。

◇無理のない息の長い活動を

そもそもボランティア活動とはどうあるべきなのか。ある関係者は「自分の生活のリズムに無理なく組み込まれているのが理想」と話している。ここで敢えて「ボランティア論」を持ち出したのは、被災地の多くのボランティアが無理しているのではないか、本業をおろそかにしているのではないかと疑問があるからだ。地震発生直後からほとんど休みらしい休みを取らずに（あるいは取れずに）活動が続けてきた方々、特に中心スタッフの人たちは相当に苦勞をなさったのではないと思われる。仮設住宅の入居期限は法律上は2年と定められているが、雲仙の例をみても分かるように、長期化は避けられない。ましてや万単位の仮設が建つ神戸ではなおさらだ。この際、できるだけ多くの人が参加し、無理のない形で息の長い活動が可能な手法を考える必要があるのではないだろうか。とはいえ、この問題の答えが簡単に見つかるようなら苦勞はいらないが……。

「ネットワーク」では、ボランティア参加者はA、B、C、の段階別研修を受けることができる。ボランティアの心構えから入り、お年寄りの観察ポイント、介護技術の修得へと進み、最後のC研修ではネットワークの企画運営について意見を交わす。C研修に限らず日々のミーティングでも、参加者が日頃の活動の中で疑問に感じたことを自由に発言し、「ネットワーク」の運営に反映される。時には新しい活動が生まれるきっかけにもなる。特に行政について言えるのだが、現場の多くの職員が疑問を感じながら仕事を続けている組織形態に比べると風通しがよく、臨機応変な対応が可能だ。このような研修制度は、従前の地域社会が壊れ、介護を必要とする高齢者が多数顕在化した現状では大きな意義を持つ。例えば行政が登録ヘルパーを増やしても、週2回4時間という現行制度下では、介護技術を修得したボランティアのニーズは引き続き高いことが予想されるからだ。また、「ネットワーク」が将来、ボランティア研修講座を事業として展開していく場合にも、これまで研修を受けた（あるいは今後受ける）「ネットワーク」参加者の活躍する機会があろう。

◇「泉北たすけあい」にみる底辺の拡大

一方で、さらにボランティアの輪を広げるため、新たな枠組みをつくることも可能ではないだろうか。21世紀の長寿社会を迎えるにあたり、まず市民ひとりひとりが意識を変える必要があるとよく言われる。そのような潜在している人たちがネットワークに気軽に参加できるようなやり方を打ち出す必要があると思われる。昨年末に開始した「ふれあいサロン」はボランティアにとって時間の制約があるが、そのようなやり方の一つかもしれない。最近の「ネットワーク」の活動をみると、家事や話し相手、移送サービスなど、必ずしも高度な介護技術を必要としないケースも多いようだ。この点、同じ「たすけあい」を目的とする大阪府堺市のサービス生産協同組合「泉北たすけあい」の手法は参考になるのではないか。同一家庭に介護技術に差がある複数のボランティアが別々に入り、その人なりにできることをする。サービスを受ける高齢者の側にすれば好きなボランティアもいればそうでないボランティアもいるが、「子どもと同様、サービスする人もいろいろいていい。それが普通であり、その方が高齢者にとっても刺激になる。」（佐藤秀次会長）という。高齢化や少子化、核家族化が進む中で、家庭的雰囲気大切に、家族を地域で支える取り組みだ。プロのドライバーがサービスを受ける側の都合に合わせ、ボランティアの側を送迎するシステムを取っているのが特徴である。その際、受け手のプライバシー保護のため、ボランティアを意図的に遠方の家に入れるようにしている。また、同様の理由からケースの検討はしない。泉北たすけあいが時間預託制を採用していること（東灘区では「神戸ライフ・ケア協会」が同制度を採用）、ボランティア間の「やっかみ」を生まないよう研修やミーティングの類いを一切実施しないことなど、「ネットワーク」との違いは大きい。一部の「ネットワーク」関係者の方が詳しい「泉北たすけあい」の例を出したのは、両者がいずれも21世紀を見据えた活動を展開している点や、その活動が大きな勢力にまで発展する可能性を秘めている点で共通しているからだ。「ネットワーク」が今後、底辺拡大のためにどのような独自の手法を確立していくのか大変興味深いところである。

被災地内で活動を続ける団体の中で注目されるのが北区の「がんばろう！！神戸」だ。比較的被害が少なかった北区だが、6千を超す仮設が建ち、同団体の支援の対象も仮設入居者に集中している。仮設団地内での自治会づくりに始まった行政への橋渡し、さらに行政や他のボランティア団体、医療福祉機関との連携など、やり方に違いはあれ、「ネットワーク」との共通点は多い。また、世代間、地域間の交流を深めることを目的の一つとし、手芸教室や書道教室をふれあいセンターで開いたり、兵庫県北部の町から有志を招いて、仮設団地内で物産展など

の各種イベントを実施したりしている。最近は、企業などの人的、物的支援を取りつけて、中学校区単位での住民による自主防災体制の整備、また、ハーバーランドの建物内でボランティアの交流スペースを設けたり、仮設住民らがつくる「神戸ブランド」商品売り出すことなどの企画を進めている。一連の活動からみてとれるのは、支援する側とされる側という関係が、おそらくどの団体よりも早く解消されつつある点だ。同団体と「ネットワーク」はこれまで協力関係ができていると聞くが、今後も、他の団体も含めゆるやかな連携を維持していくことが必要であろう。

◇活動を支える独自の理念が必要

以上、二つの団体を例に挙げ、それぞれの活動を簡単に紹介した。「泉北たすけあい」の場合は行政とは一線を画し、行政にはできないことを独自の手法で実践している点、「がんばろう！！神戸」の場合は行政や企業などを巻き込みながらも独自性を維持し、自由な発想で「福祉ボランティア」を超えた取組みを進めている点を強調したつもりである。これらを踏まえ「ネットワーク」の今後を考えると、なによりもまず、確固たる活動理念を打ち出す必要があるのではないかと思われる。これまでその都度被災者のニーズを先取りし、柔軟に対応するやり方で成功してきたが、これからは長期にわたる活動を下支えする何かが求められよう。例えばマスコミの世界でも、最初の1年は全てが日新しく全力で取り組むが、2年目からはどの時期にはどのイベントがあるというのが分かっしまい、妙な「慣れ」が生まれてしまうことがある。良い例えとは言えないが、何となくお分かりいただけるものと思う。ボランティアをする側とされる側の双方が納得し続けられるようなやり方とでも申しましょうか、そういったものが必要である。西宮のあるボランティア団体は福祉に特化し、公的介護保険の導入をにらみ、特養ホームの運営に向けて準備を進めていると聞くが、これなどは目的を明確にしている例である。

「走りながら考える」という表現がまさにぴったりのこの1年でしたが、どの団体にとっても将来に向けて自分たちを見つめ直す時期にきているようだ。その中でも「ネットワーク」は何かやってくれそうだと期待している団体の一つである。

最後にボランティアの皆さんへ。これまでの活動を拝見して、そして将来を展望するに当たり、皆さんがいることで神戸の街がどれだけ救われていることかと、改めてその意を強くします。近い将来、「神戸はボランティアがいなければ成り立たない」とまで言われるような日が来るのではないのでしょうか。

4. コミュニティづくりを担えるか——「ネットワーク」の方向性と体制整備

課題解決の方向を考えていく点から宮本進一さんの指摘を整理をすれば、以下の5点になる。

- ①早くから資金確保に努めるなど「隙のない」対応をしてきた
- ②無理しているように見られがちな被災地のボランティア活動の中で、研修制度を取り入れるなど、ボランティアの現代的、将来的な要望に応えている
- ③潜在している人々が気軽に参加できる新しい枠組みをつくる必要がある
- ④支援する側、支援される側という関係を解消する工夫が必要である
- ⑤今後に備える確固たる理念が必要である

これらに指摘にも答えながら、課題解決の方向や今後の活動展開や組織整備のあり方についてふれてみたい。

(1)企画立案能力を高める——「ネットワーク」の課題解決方向

まず、①②の指摘は当然のこととして、今後とも考えていく必要がある。③以降の指摘についても、今後「ネットワーク」なりの答えを出していく必要があるけれども、問題や課題はもっと複雑である。というのは、「ネットワーク」の活動経過は震災救援から個人の生活支援、地域コミュニティ活動と広がってきていることであり、活動の拡大を被災地、ひいては社会の大きなニーズとして受け止めていくことを前提に活動してきたし、今後とも考える必要があるからである。

この意味では③に関連して、活動が拡大していく中で安定したボランティア活動参加者があっても、傾向的に不足となる一方で、さらに一般にボランティアは地域コミュニティ活動のイベントなどへの参加を好み、これまで主な活動だった従来型の地味な福祉ボランティアへの参加が少なくなりがちである、という問題と課題を持っている。また④に関連して、個人支援のみならず組織の支援の課題もあり、政策的、事業的に問題や課題をたてる必要がある。以上のような問題や課題を解決するための実践に追われ、⑤で指摘のような確固たる理念が持てていないのは確かであるが、それには単なる理念にとどまらない以下のような活動の方向についての検討が必要であると思われる。

- ①ボランティアのリクルートが大きな課題となっている。いまボランティアは地元住民、若い世代、安定的に活動参加のできる人、特技や専門的な技能を持つ人の順で求められていると言える。「ふれあいサロン」などのような地域に密着した活動やコミュニティ事業のプログラムは、同時に、もっとも優先度の高い地元住民ボランティアを確保するチャンスでもある。これらの企画・実施はその地域にあってボランティア参加したいと考えている住民にとっては「参加機会」であり、「ネットワ

ーク」にとっては「接近機会」である。

確かに現実の作業ではボランティアはコミュニティイベントか、個人の生活支援かという二者択一的を迫られるような状況を持っている。地域コミュニティの活動を地元住民ボランティアのリクルートチャンスにできるような多様なプログラムの企画と展開が求められる。

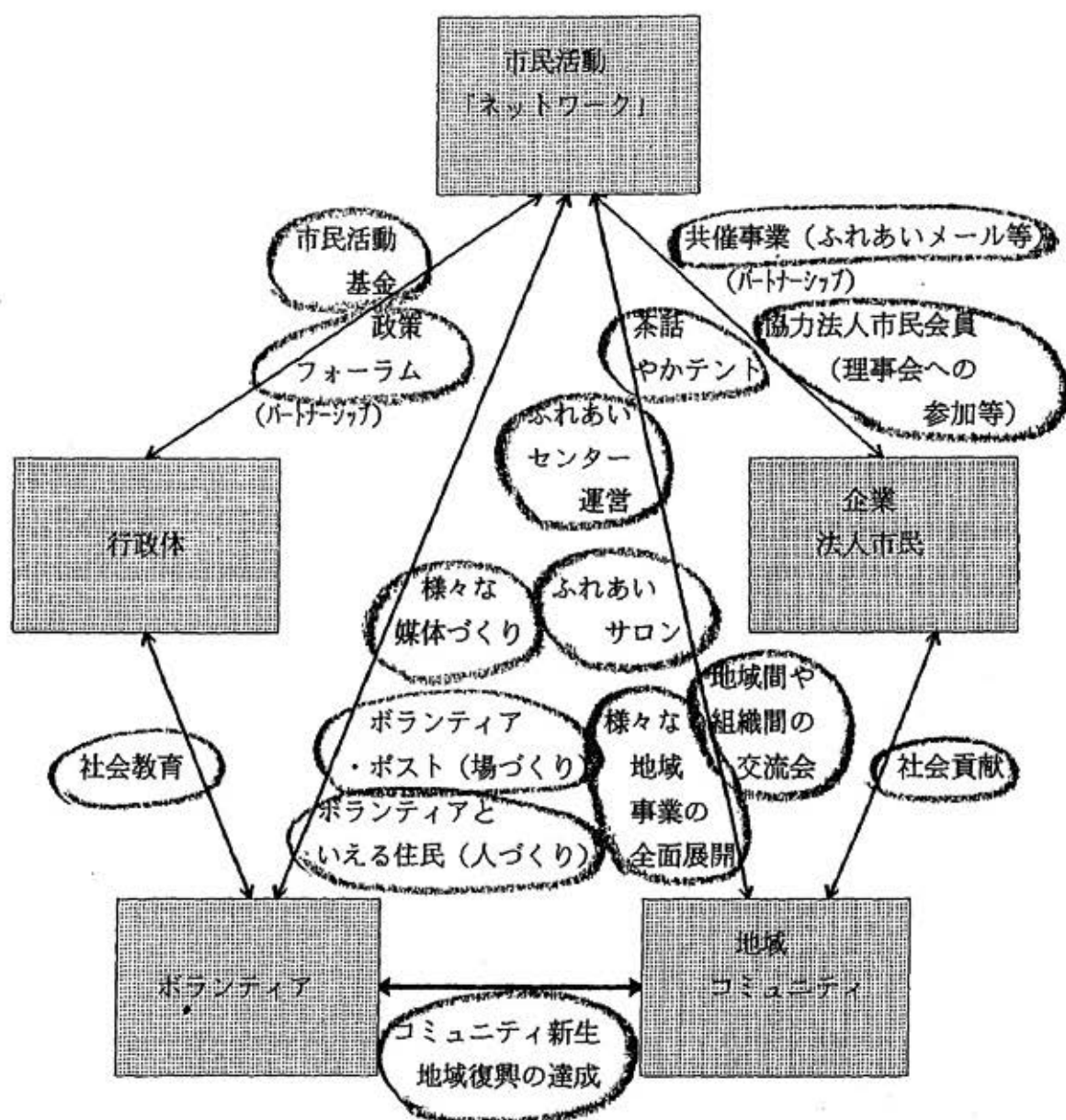
- ②若い世代の参加については今後の活動方向をにらんだ、現在の活動や活動拠点とは異なるもう一つの活動の体系と拠点を準備する必要があるのかも知れない。これまで議論されてきた新たなボランティアリクルートの場としてのボランティア・ポスト構想を、若い人を中心に他のボランティアにも開かれたものとして、さらに具体化する必要がある。
- ③上記の地域に密着した活動や事業およびそのプログラムの企画能力と並んで組織支援への要請においては政策的な能力を求められる。また、他のネットワーク、行政体、国などへ政策提案していくためにも企画・政策立案能力の向上が必要になっている。
- ④柔軟で機動的な「ネットワーク」の活動は多くのアイデアを生んでいるにもかかわらず、このアイデアを具体的な企画にし、実施していくためには、多くの実務と時間を要する。これをフォローできる専従的な人の確保がさらに必要である。
- ⑤上記②④の人材を確保するためには、企業の社会貢献方策と連携して企業からボランティアや人材を派遣してもらうことも一つの方策である。また、自前で人材確保を行うためには資金が必要であり、その一助としてある種の収益事業の展開が必要となる。
- ⑥さらに、地域を支える事業として、既に議論されている移送サービスや配食サービスや高齢者用レストランなどの有償事業の展開を積極的に検討する必要がある。また震災ボランティアの地域活動モデル及びふれあいセンターやふれあいサロンの経験を生かし、ボランティアに支えられたボランティアな市民活動が機関車役となる新生コミュニティへの幅広い検討と提案が必要である。
- ⑦以上のような展開をしていくためには、震災対応型の組織から脱皮する必要がある、新しい地域コミュニティづくりを推進するにふさわしい組織のあり方を検討する必要がある。特に企業や民間団体との連携をさらに強めるような組織整備をすすめる必要がある。

(2) ボランティア・ポスト構想——「ネットワーク」の課題解決へ検討中の方策

上記の課題解決方向のうち、①③の多様なプログラム開発や企画・政策立案能力向上に関連する地域コミュニティづくりの事業・検討のフレーム、すでに幹事会で検討されている②⑥に関連するボランティア・ポスト構想、及び⑤⑦に関連する企業や民

図7 図6

「ネットワーク」の地域コミュニティづくりの事業・検討の枠組み



間団体との連携を強めるための組織整備の方向、について述べておきたい。

①地域コミュニティづくりへ——事業と検討のための枠組み

これまで「ネットワーク」は「地域コミュニティ」や「ボランティア」との間で様々な試みを展開してきたといえる。この三者によるコミュニティの新生への手がかりをつかみかけている。これまでの地域コミュニティづくりへの事業を位置づけるとともに、今後の事業を検討していく上での枠組みを別図のように考えてみた。

この三者との関係では、「地域コミュニティ」との間で「茶話やかテント」から「ふれあいサロン」に至る事業を展開してきたが、さらにこれまで以上に新たな事業を生むことで豊かな展開が求められている。「ボランティア」との間では様々な働きかけを行ってきたが、新たなボランティアリクルートの場合や媒体づくりが求められている。

さらに、三者の関係に止まらず、企業や行政体を含む事業や政策提案を積極的に行っていく必要がある。（図6参照）

②もう一つの活動拠点——ボランティア・ポスト構想

改めて学生を含む幅広い層のボランティアをリクルートし、将来の「ネットワーク」の財政的な自立をも展望した「活動拠点」として検討を行っている。

ボランティア・ポストは

①駅前等地域内の一等地に立地しチャリティ朝市やバザーなど収益事業の場／②地域住民とボランティアの交流の場／③ボランティア募集・応募の簡便化をはかり幅広い層のボランティア参加が可能となる場／④区役所中庭の拠点とは対称的な、「ネットワーク」の2つめの拠点で「有償事業」を行う場／⑤他のボランタリー団体の事務所機能を提供するなど支援機能をもつ場

などの機能と役割を持っている。

収益事業や有償事業を行うことから、ポスト全体もしくは収益事業部門を有限会社化するなど、経営責任が明らかになるような組織形態を選択することも検討されている。

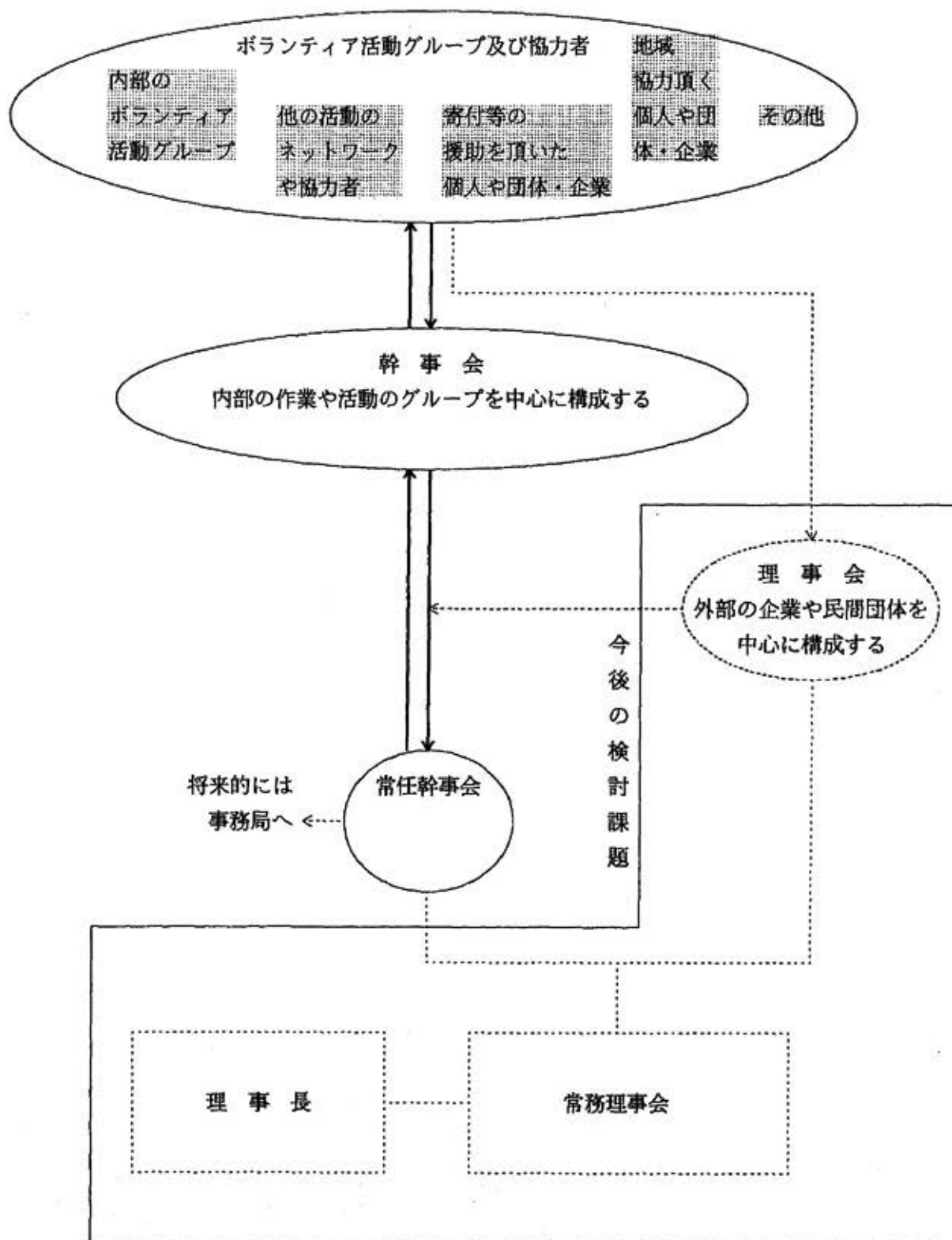
③企業との連携を——これからの組織整備の方向

現在の「ネットワーク」の最大の問題は、既に震災ボランティアを超えた活動をしているにも関わらず、組織は震災対応型を脱していないことにある。

地域コミュニティをつくり支える組織として、さらに社会へ向かって開かれた、非営利事業体になっていくことが必要である。これまでの内部の作業や活動のグループ主体に構成される組織を生かしながら、これらと並行して外部の企業や民間団体の人々に参加してもらえようという「組織展開の方向」を検討している。（図7参照）

図7

これからの「ネットワーク」組織（意思決定の仕組み）の展開方向



第 2 部

東灘地域での主な活動団体と その活動内容

第1章 活動の接点を求めて——主な震災ボランティア団体の概況

東灘区には、さまざま震災ボランティア団体がある。避難所が最も多い時には120ヶ所あったところからも3ヶ所を超える団体があったことは容易に想像できる。また、コミュニティレベルの地縁組織の対応なども含めれば想像もつかない程のグループや組織が活動していたと思われる。

ここでは、「ネットワーク」の活動を客観化するために2つの組織、魚崎小学校復興対策本部、コープ神戸ボランティアセンター、の活動を取りあげた。

1 避難所・地域・組織——4つのボランティア団体

東灘・地域助け合いネットワークの活動記録を行ううえで、同じ地域の異なるタイプの団体の活動実態を概括しておくことが、「ネットワーク」の活動の意味を多面的に把握できるのではないか、という点から魚崎小学校復興対策本部、及びコープ神戸の救援対策本部の二つの異なる団体の活動実態の概括を行った。

「魚崎小学校復興対策本部」は避難所を拠点に地域づくりの視点もあわせ救援復興の活動を行った。「コープ神戸救援対策本部」は物資供給を主機能とする生活協同組合が組合員の助け合いや救援・安全確保などの観点からボランティアとともに救援活動や友愛訪問を実施した。両者は、いわば地域型と組織型とでもいうべき活動団体の代表的存在でもある。

これらの活動と並んで、ここでは活動の概括をしなかったが、もう一つの代表的ボランティア活動団体に情報センターがある。「ネットワーク」は在宅の高齢者等を中心に救援活動を行ったが、情報センターは避難所のネットワークを行うことをメインの仕事とし、2月10日頃から3月末まで東灘区のボランティアの受付・調整窓口を担当した。両者は、在宅対応型と避難所対応型といえるが、情報センターの活動の最大の特徴は避難所間の情報網をつくりあげたことであり、情報と同時に最盛期には、避難所への直送荷物の7割、避難所間移動の100%を受け持ったといわれる。また、情報センターは3月末には区の保健所から撤退し、事実上の活動を終えた震災救援型ボランティアの組織の一つの典型でもあった。この点でも今も活動を続ける「ネットワーク」と対比をなしているといえる。

「ネットワーク」を東灘地域の中において把え、評価しようとする時、少なくとも上記のような活動団体との比較や連携の中でみる必要があると思われる。今回は取り合えず2団体の活動を概括し、震災救援活動への地域対応のあり方を考える第一歩としたい。

2 魚崎小復興対策本部・「ネットワーク」・コープ神戸の接点は——委員会の議論から

三つの団体がどのような接点を持ったのか、どのような特徴を持ち、今後をどのように展望しようとしているのか、地域委員会での議論を収録してみた。

(座談会出席者)

高砂 春美氏(魚崎小学校復興対策本部長)／林 律子氏(コープ神戸ボランティアセンター)／中村 順子氏(「ネットワーク」代表幹事)／司会・佐野 章二氏(事務局)

活動では接点はなかった

司会 あれから早くも1年経ちましたが、みなさんには今なおさまざまな活動をされ復興に力をつくしていらっしゃること、心より敬服しています。

さて本日は震災時の各団体の状況を振り返りながら、第一に避難所とコープこうべと東灘・地域助け合いネットワークの活動にどんな接点があって今日に至ったのか、第二にはこれからの活動にむけての地域の展望などをお話しいただきたいと思います。まずあの当時お互いどんな接点があったのですか？

高砂 助け合いネットワークと僕らの活動は全然接点がなかった。僕らは外に目が向けられない。助け合いネットワークさんは外に目を向けてくれたわけですから、それでいいわけ。そういう関係なんですよ。

林 魚崎小学校のクリーン活動にはいつも呼んでいただきました。直接、高砂さんが企画されたものではなくても、あそこのクリーン活動にはお手伝いを必ず出すということはしてたんです。

高砂 僕が中村さんと会ったのは4月ぐらいの市長との懇談会だったですね。

中村 そうね、高砂さんとの出会いは4月でしたね。コープさんとは多分2月頃直接申し込みに行ったんです、協力団体になって欲しいということで。そしたら、コープとしてはだめだと、くらしの助け合いの会、そこの部分だけと協力を結ぶというんだったらいいと言われたんですね。

林 助け合いネットワークからもし何か要請があった場合に、在宅支援の要請なら受けると。しかしそれ以外の協力はその時点ではしないと、その時の責任者のはっきりした決断で。

司会 それは他の組織についてもそうだったんですか。

林 はい。自分達の内側のボランティアさんに対してもそうでした。活動は広げなくていいと。事務局の対応力以上のことを請け負ってトラブルが起こるよりは、目の届く小さな範囲で、という考え方だったんです。

ボランティアのポジションは？

司会 次に団体の特徴、ボランティアの特徴などそれぞれいかがでしょう。

高砂 魚崎小学校の方は極端にボランティアというのは後方支援だという位置付けをしましたからね。ボランティアがヘッドになるというんじゃないんだと明確にしました。その辺が他とはちょっと違うかな。

中村 私達の目標としてきたのもいつも地元のボランティアをリーダーとしていくこと。そして応援部隊をサブにつけるというやり方をずっと最初からかなり意識的にしてきました。大体同じ考えですね。外から来たボランティアが支援にまわって、地元の人が避難所を運営するんだと。それを助けるのがボランティアだという考え方は私達も根本的には全く一緒だと思うんです。

林 コープの場合は、志願してこられたたくさんのボランティアのためにしょうがないなと重い腰を上げたというところはあったんですけど、5月6月の辺で大きく機構改革があって、ボランティアを大きく、組合員活動を供給と同じくらいの位置付けにするということで。今までよりは福祉活動の面が高まったんじゃないかと思いますね。

応援ボランティアとの関係

司会 いろんなボランティアもおられたようですが、その辺はいかがでしょう。

中村 生活を全部持ち込まれた時が一番辛かった。別にきちんと自立した生活があって、活動としてボランティアをしてもらえるのはいいんだけど。泊まり込みは生活と活動が全然区別できない。その人も出来ないし、団体も出来なくなってきた、そのリズムに流されていって。あれが一番辛かったですね。だから泊り厳禁にゴールデンウィーク明けからしました。追い出されたって怒られたけど。

高砂 僕も1週間は辛抱した。1週間くらいでもう切れちゃった。こんなんやとっただめだ、それで避難者の各部屋の代表者を全部呼んで、それから始めたんです。ものすごくけんかしましたよ。甘えの部分が入ってきたから。

林 第2期のことになるんですけども、コープ住吉ボランティアセンターが立ち上がった時の責任者が、組織統括部長なんですが、ボランティア隊の活動ぶりを見て大学の同好会の密室みたいな感じを受けた。絶対正義を振りかざす、うるさい学生達っていう感じで見てたもんですから、ボランティアそのものに拒否反応があったんですね。

中村 確かに学生は力になってくれたけど、常識はずれのところがあって、地域から遊離して信頼を失くしたことがあったわね。隣のマンションから怒鳴られるし。「1週間我慢したけどもう出来ません、何ですか、夜遅うまで騒いで。」って、ものすごく怒られた。

楽だった組織ボランティア

高砂 ああなったらボランティアもねえ。僕等の場合、やりやすかったのは国立ファミリーにしても松下にしてもリーダーがいるからね。そこに話をしておけばね、それが下まで伝わるから。松下の方はハード面、国立はケアの方。ケアの方はもう経験者しか入れなかった。

中村 だから組織的なボランティアの受け入れをしはったわけ。私等は組織的なボランティアプラス圧倒的に個人ベースの人が多かったですね。社協に行っただけ仕事がない言われたから、助け合いネットワーク紹介されてきたとか。そうやって一人ずつ来る、それを束ねて一つのワーキングの形にするというのは体壊すほどしんどかったね。

司会 宿泊付のボランティアについてはどういう見解を持たれてましたか。

高砂 そりゃもう、僕らの場合はね、夜中の作業があります。いないと困る。

中村 うちみたいに日中活動にしているとね、泊まりがものすごく困った。泊まるところ確保してくれて、利用者のおばあさんのところに泊まらしてもらったり、ボランティアのところに泊まらしてもらったり、結局トラブルの元になったりしてね。その世話するだけで2、3時間割かれるんだから。辛かったですよ、2、3時間でもあの時はね。

ボランティア活動の悲しい接点

司会 団体間のトラブルはありませんでしたか。

中村 3月も終わり頃になるとニーズが分からなくなって。行き先でお互いにバッティングするようになった。それが活動の接点であったというのは悲しいですね。ボランティアが来るから活動が続ける、資金が残っているから続ける、ニーズがあるから続ける……継続の動機もほんとのところいろいろあったね。

高砂 中村さん、最初の頃、僕等がケア始めた頃があったじゃない。あの時に問題が大きかったのはね、ボランティアも時々しか来ないから、いわゆるケアにならないわけね。それがね、魚崎にあちこちから入ってくる。僕等はきちっとやってるのに。だから、誰かが調整するセンター方式っていうのはやっぱりやらなきゃいけない。

中村 しかしね、あれを統制すべきなのか、自然淘汰を待つのか、まだ未だに結論でないんですけど。いずれにせよ、被災者の利益にこそなれ、迷惑につながることは避ける方法を検討しなくてはね。

ポスト震災への活動

司会 将来に向けそれぞれの団体から震災ボランティア活動に関する提言が出てますが、こういう姿勢が大事なんですね。例えば高砂さんの方は平常の地域ボランティ

アに戻るんだと。それを通じて将来の東灘の地域福祉を作り上げていくんだと。ネットワークはネットワークで将来ビジョンがあると思いますし、コープはコープで将来どうあるべきかという課題が当然出てくるはずだと。それぞれの違った団体がどういう将来ビジョンを持っているかということは考えなければいけないし興味があることだと思いますね。

高砂 この前行政の地域福祉課に行ってきたんです。東灘の場合はその面で立ち遅れているんじゃないかと、地域の全体の今後のあり方というのをこれから考える必要があるんじゃないかと。そういう活動をされてる人を集めて論議する必要があるんじゃないかと。コープさんにしても東灘助け合いネットワークにしても、もっともっと地域との密着というのが必要になるわけですね。そこからもっと接点が出てくるんじゃないかと思いますね。

中村 私達のテーマも既存団体や組織をどれだけネットワーク化するのかっていうのが今回の震災を発端にありますから、そこでがんばっていただいて。みんなで土壌をつくりましょう。高砂さんも避難所が終わったから終わりにすると思ってもらったらだめ、地元活動もしてもらわないと。

高砂 僕はそうじゃなくて今までのボランティア活動から、元の原点に戻ったわけ。やはり子供会の活動であり、魚崎町協議会の活動でありね、そういうものに帰ったわけ。その外にじゃあ、中村さんがこれはこれでいいから来てくださいと言うんであればまた別ですけど。

林 震災のお蔭だと思うんですが、コープはボランティア活動も供給と同じぐらいの力を入れなあかんということがこの間で分かったんだと思うんですね。積極的になりますよ。行政のネットワーク会議にも出てますけど、在宅福祉の分野とかボランティアセンターだとか何もかもごっちゃにして論議するから、全然進展がないように思うんですね。民生委員の活動なら民生委員の活動、在宅支援のネットワークならそっちの方だけ、ボランティアセンターなら連絡会みたいにしていって情報交換をすとか、持ってる資材の貸し借りをすとか。一方、研修なんかは一緒にしたらムダがなくていいのと思うんですね。全部いつも一緒。

司会 それを縦割り「のれん」システムと言うんです。

21世紀の地域ケアをめざして

中村 行政との関係はやっぱり難しいから一言では言えないけれどもね、地域活動を通じてどの部分で行政と共同作業をするのかということをやっているのね。何か一緒にやりながら、大きいうねりで変えていくというのが私のやり方なんです。ひとつがふれあいセンターのお手伝い、あるいはふれあいサロンだとか、地域を面でとらえるということ。生活支援というのになると私達もかなり今までやってきたんだけど、

依頼者のドアの中に入っていく仕事についてはプライバシーの問題がある、なおかつ、そこの中の領域を担当する、市の福祉振興協会もあるし、コープさんもあるし、ライフケア協会もあるし、いろんなグループがあるわけですね。私達はドアの外で出来る作業で、一見的なボランティアでもできる、移送とか薬取り、散歩とかね、ドアの外からサービスを線でつなぐという、その線を細かくして行って面にしていくという活動を展開していく。地域ケアという観点で。それには子供会とも民生委員とも行政とも仲良くしたいわけ。それが21世紀の高齢化社会の地域ケアにつながると思うの。

高砂 ふれあいネットっていうのを作る、まちづくり推進委員会というのに僕も入ってるんだけど、メンバーを集めなさいというふうに言ってるわけね。難しそうだけど、このメンバーを中心に集める努力をしましょうよ。

司会 展望が見えてきましたよ。この研究会での出会いから、全国に発信できる地域ケアのモデルができることを期待しまして、皆様のご活躍をお祈りします。

第2章 地縁コミュニティから——魚崎小学校復興対策本部の活動

「ネットワーク」は東灘区全域を対象として活動するのに対して、魚崎小学校復興対策本部は避難所である学校を拠点にして学区コミュニティを対象に活動を行った。

「ネットワーク」に比べ狭い地域範囲ではあるが、それだけに住民にとってより身近な活動として、参考になるところが多いともいえる。

出来るだけ細かい事実経過と併せて、活動段階のモデル化、今後の活動への「10の提言」をまとめてみた。

1 避難所から地域ケアへ——魚崎小学校復興対策本部の活動の概況と経過

魚崎地区は、地元住民とボランティアの共同による避難所運営から地域ケアの展開へ、という特色を持っている。地域での展開、ボランティアとの共働、経過の問題などを見てみよう。

1. 仮設住宅の現地建設も提案——地域ローラー作戦

魚崎小学校区の被害状況は全壊 1,700戸、半壊 500戸、死者 323人と極めて大きく、小学校への避難人数は初日約 2,000人、二日目 750人であった。

復興対策本部は小学校に設けられた避難所の本部であったが、地域のまちづくりと一体化した避難所運営をモットーに、学校を拠点に地域ローラー作戦を行った。その内容は次の五つに分類される。

- ①独居老人の182人の安否確認。（2月6日福祉事務所の名簿で確認）。
- ②この結果、高齢者、ねたきり老人、障害者なども対象にすべきことが判明。ケアが必要な50人について介護、3月中旬には、綿密な介護記録とともに行政機関へ引き継ぐ。
- ③地域内の家屋の被災状況調査。（2月中旬から実施）
- ④③の調査と並行し、地元の被災者が地元で建設された仮設住宅に入れるように、仮設住宅の建設可能な場所、戸数の調査。また、再建不能な住宅を早期解体して用地を確保したり、公園等の用地を本格的に測量し図面をつけて現地建設を神戸市に要請した。（2月21日に提出）
- ⑤地域内の様々な店舗の開店状況調査。被災者の便宜と商業活動へのバックアップを目的としている。この情報をミニコミ紙や掲示板などを通して避難所、地域にPRした。

避難所のリーダーは大きく以下の4つに分かれる。

第一のタイプ——地元住民（被災者）主導型。

第二のタイプ——学校長主導型

第三のタイプ——外部ボランティア主導型

第四のタイプ——市職員主導型

魚崎小学校は第一のタイプで、復興本部と並んで4月には被災者による運営委員会ができ、協同運営に移行している。第二～第四のタイプは衣食住の短期的提供という施設内の活動に終わり、町づくり、地域づくりを長期的に行うという観点からは、第一のタイプが望ましいのは、いうまでもない。

2. 5タイプのボランティア——活動の分担と共働

魚崎地区は神戸市への編入の折りに、財産区を作っており（年間予算7千万円）地震直後、リーダーは財産区の議長と交渉し、1月24日に区長決裁で震災対策費として1千万円の支出を受けた。これにより、前記のローラー作戦をはじめ、東灘区東南部の避難所をつなぐJネットなど地域全体を対象とした活動を行い、また地域外とのボランティアとも広く協力することができた。

魚崎小学校避難所と魚崎地区を支えたボランティアグループには以下の五つのタイプがあった。

第一は、東京国立市で介護福祉ボランティアを行っている団体で「ファミリー国立」。1月29日から4月15日まで泊り込みで平均10～15人／日が参加した。

第二は、松下電気労組からのボランティア。1月31日～4月末まで20～30人／日が原則として日替わりかつ日帰りで参加した。

第三は、地元の子どもや若い人。「暴走族」のような事をしていた人がたいそう活躍した。

第四は、住宅解体に従事した建築業ボランティア。先の仮設住宅建設用地の測量等は彼らの協力によっている。

第五は、関西建築家ボランティア。高砂氏の知人が彼の活動を聞き協力を申し出たもので、約70人の建築家や研究者からなる。加藤阪大助教授を代表に「魚崎まちづくり協議会」を発足させ、住宅修理、再建の相談に応じ、4月9日には住民参加のまちづくりシンポジウムを行った。

これらのボランティアのうち、松下電気労組ボランティアはパソコンを使った物資の管理やJネットの運営を主として担当し、ファミリー国立は介護活動を担当、建築業・建築家ボランティアは専門性を生かした活動をした。これら3者の連携を、地域、企業、専門家のトロイカボランティア体制と呼んだ。また、災害ボランティアは個人ベースで動く、活動の指示などに時間が取られてしまうので、個人参加のボランティアも上記のいずれかのグループに所属してもらい、ボランティアに被災者の衣食住の手当て等の日々の避難所活動を任せることによって、復興対策本部は地域的活動に

重点を移すことができた。

3. リーダーは地域ボランティア団体から―活動の3段階と経過

魚崎地区は、地元住民とボランティアの共同による避難所運営から地域ケアの展開へ、という特色を持っている。これは以下のような3段階にわけることができる。

①初動対応的段階（2週間、地域リーダー＋地域住民有志によるコアグループが一元的に対応）

②専門分化段階（2～3ヶ月、第1段階のリーダーのもとに専門別に組織ボランティアが分担、地域ケアへの展開）

③地域定着段階（避難所解消の時期まで、被災者や地縁団体リーダーや行政機関への委譲）

特に、第一段階の地域リーダーについては、すでに見たように誰がなるのかが決定的に重要である。このリーダーは地域に拠点をもち、かつ地域密着型の活動をしているボランティア団体のリーダーの中から、災害以前に決定し養成しておくことが不可欠ではないか。

事実経過の概要は表8の通りであるが、ライフライン関係では、1月19日夜には学校の電気がつき、水は2月半ば（地域によっては3月末）に回復した。1月27日にはプロパン用風呂3台の提供があり、必要物資は大阪で買いととのえ、リーダーの知人のクルーザーで泉大津から青木港へ運んだ。1月25日には校長と交渉し給食室を開放してもらっていたため、食事でも弁当以外の温かい御飯や汁ものの提供ができた。当時神戸市では850円で弁当と菓子パンを提供していた。もし、給食センターが開放されていれば、400円で共同購入による自炊が可能だった、という意見もある。

医療問題については専門家が集結できる基地をつくる必要がある。独居老人、寝たきり老人、障害者の人々には食事やトイレなどだけでも通常と異なる配慮が必要であり、行政だけでカバーできないのは明らかである。何処で誰がどのように取り組むかは大問題である。実際は、校区内の町医者の人々がローテーションを組み、1月25日から2月末まで大阪府の医師団が組織的に朝晩2回の巡回をし、その後、学校前の東灘診療所を24時間体制にしている。その他、食品管理、トイレ管理、ゴミ処理など衛生問題が大変だったが、夏ならもっと病気が発生したのではないかと推測される。

今回問題となった心のケアについては、ケアボランティア団体の人に見てもらったが、「ケアの必要な人はいない」とのことだった。授業が始まるまで、校庭の一角で火を焚いていた場所が皆の溜まり場となり、酒を飲み愚痴をいうことも多かったが、これが息抜き場となったようだ。また、独居老人介護システムやイベントなどによって人間関係がつくられ、このことが結果として心のケアになっていたのではないだ

ろうか。

学校との関係は、ここでは一線を画するという方向を取った。3月に講堂を明渡し、卒業式、入学式が実施され、授業は2月13日から再開された。給食室は3月に明渡し、4月から平常通りの給食が行われている。この代替として家庭科教室を借りている。教職員には、避難所運営には徹底して関わってもらわなかった。このため、学校との摩擦やトラブルは全くなかった。

表 8

事実経過の概要

時期	事項
初期	1 月17日 ・ 魚崎小学校開放運営委員として携帯の鍵を用いて小学校入 ・ 災害対策本部設置（グラウンドにテント） ・ 安否確認（指定避難所と実際の避難所が一致しておらず難航 ・ 遺体安置所の指定を受け、遺体搬入が始まる。遺体確認開始（～25日） ・ 被災者全般の「よろず相談」、医療チーム編成開始。 ・ 「淡路屋」より弁当、「サミット合同」よりバナナ差し入れ。 ・ 寒さ厳しく廃材を利用して校庭で暖をとる。自動車内での仮眠多し。 ・ 魚崎地域の住民から救助作業の依頼が殺到する。その指示作業を開始する。 ・ 魚崎地域火災の消化活動に徹夜で対応する（3日間）。 ・ 簡単な名簿作成を開始するが、移動が激しく完全なものにはならなかった。 ・ 食料の配布が開始されると、避難所以外の被災者が食料を求めて来る。 ・ 被災者が家屋の倒壊により着のみ着のまま避難所に来て、衣料等の要望が多かったが対応できず、小学校にあるものを提供したが、不足した。 ・ 乳幼児の食料とオシメ等が不足し、調達にも手間どる。 ・ 小学校の保健室を借りて、負傷者、死者の対応はじめ、地元開業医に協力を求めて対応する。 ・ 午後10:00 に救援物資の毛布が 3,000枚届き、直ちに配布する。 18日 ・ 午前8時、御影地区のガス漏れ事故による避難を実施。 ・ 高齢者、障害者に避難勧告が出ていたが、完全には避難できず、小学校に 100名ほど残る結果となった。 ・ 寝たきり老人、障害者など41名を救急車、トラックで赤塚山高校へ。 ・ 「サミット合同」より再びバナナの差し入れ。食事は1人バナナ1本。

	29日	・遺体の搬出終わる。 ・介護ボランティア団体（F）の代表S氏来る。2月3日よりの協力を確認。
	30日	・電器メーカー（M）の労組ボランティアの代表K氏来る。6日よりの協力を確認。
前	2月初め	・小学校内の水道復旧。 ・介護ボランティア団体（F）の開始。「ローラー作戦」（後述）の主力に。 ・電器メーカー（M）の労組ボランティアの開始。物資管理、食事提供の主力に。
	～	・「ローラー作戦」開始。地域内の高齢者、障害者のケアを中心に ・仮設住宅の地元設置に向けての地域内調査、行政への要望書提出を行う。
	2月末	・地域内の店舗の開店状況調査とレポートを開始。 ・地域内の他の避難所とのネットワーク（Jーネット）設置。 ・アメリカケア（ボランティア団体）よりカナダテントの提供を受けて直ちに建設し、本部機能、物資倉庫として使用を開始する。 ・関西シニアライフアドバイザーのカウンセラーによる魚崎地区内の訪問活動を開始する。 ・2月19日より関西建築家ボランティアによる住宅相談を開始する ・山梨県のボランティア団体よりファクシミリ10台の提供を受けて、地域の避難所へ提供する。（後にJーネットに使用）。 ・避難所の駐車場の整理、管理を始める。 ・自転車・単車の駐輪場を設置し、管理を始める。 ・2月13日学校側より学校を再開したいとの申し入れあり、避難者、ボランティア、教員等の協力を得て教室の確保と大そうじを行う。 ・魚崎地区7か所の避難所も自主運営が可能となり、魚崎小学校避難者だけの運営となる。 ・伊丹市のH社よりパソコンの提供を受けて、物資管理、名簿作成等の入力を開始する。
期		
		・ミニコミ誌「せせらぎ」刊行開始。 ・カナダから大テントを校庭に設置。本部機能を移転し、物資倉庫

中 期	3月 ～ 4月15日	・ボランティア宿舎、コミュニティーセンター。(4/9) ・建築家ボランティアの協力により、「まちづくりシンボ」を実施 ・避難者自身による運営に向けて、運営委の結成、業務の引き継ぎ開始。 ・「解体隊プロジェクト」による解体受付、解体作業を開始する。 ・3月12日をもって、ライフラインが回復したため、「せせらぎまつり」を開催し、外部の食事と物資の提供を終わる。 ・卒業式、入学式と授業の正常化に向けて、講堂、教室等の使用者の移動を行い、学校側に協力する。 ・企業ボランティアM社、F国立ボランティア団体による卒業生、入学生に花のプレゼントをする。 ・教職員の異動者に対して、避難所でカンパを行い花束を贈る。 ・小学校の昇休みに企業ボランティアM社が、M社保養所「ユニトピアささやま」へ260名の小学生を招待してくれた。 ・地域内の高齢者、障害者のケアを地域の民生委員、社会福祉協議会、保健所に引き継ぎを開始し、4月15日に完了する。 ・4月15日にF国立ボランティア団体の活動終わる。
後 期	4月16日 ～ 8月27日	・避難所による運営委による運営が本格化。 ・「まちづくりシンボ」(第2回、第3回)を実施。 ・4月30日に企業ボランティアM社の活動終わる。 ・気候が暖くなり、食品衛生上の問題が生じて冷蔵庫を要望し、行政の方からコンテナ冷蔵庫が設置される。(5月)。 ・仮設住宅、公営住宅への転居などに関する要望書を行政に提出。 ・8月27日避難所を解消する。

2 魚崎モデルー避難所復興対策本部の3段階の活動モデル概要

前記の3段階モデルを普遍化し、今後の活動の参考に供するため、それぞれの段階での作業や問題を以下にまとめてみた。

1. 【第1段階：初動対応段階】

○期間

魚崎小学校の場合、被災当日（1月17日）から1月末までの約2週間。ただし、今後、阪神大震災の教訓から組織ボランティアの体系的動員がスムーズにはかれるようになれば、この期間は1週間ないし数日に短縮されるであろう。また、されねばならない。

○主たるタスク

地域内の人命救助、負傷者の手当て、搬送

遺体の管理、火葬の手配

地域内の被害状況の把握（人的被害、物的被害含めて）

家財道具の搬出

避難者情報の調査、把握（名簿作成）

「一時避難の場所」としての避難所の整備

1週間分ないし数日分の衣食住の確保

○組織体制上の特徴

リーダーが必要（魚崎小学校の場合、高砂氏）。第3段階までを見通した場合、リーダーには地域住民（被災者）自らがあたるのが絶対的に必要。地域の行政組織、および、避難所となる施設（主として、学校）の職員とのパイプが太い人物が、とくに望ましい。この点、後に述べるように、外部ボランティアの長（地域密着性が欠如）、避難所となった施設の長（当該施設本来の機能回復に専心すべき）、行政（外部団体）の長（そもそも機能麻痺に陥るという前提であるし、機能回復後もボランティア、緊急救援物資の受入れ等、後方支援にあたるべき）は避けることが望ましい。避難所運営は、被災直後はどうあっても、ある程度混乱するのはやむを得ない。第1段階においては、このリーダーを中心に、地域住民の有志数名がコアグループを作って、良かれ悪しかれ一元的に対応するほかない。なぜなら、大規模災害ゆえ、行政組織は機能しないこと、外部ボランティアもその実質的初動には数日を要することが前提だからである。

○今後の課題

上記のリーダーが存在した点が魚崎小学校の特徴である。しかし、存在しなかった（がゆえに、避難所が大混乱に陥った）ケースも数多い。また、地域リーダーの不在

ゆえに、外部ボランティアのリーダーがそのまま避難所運営にあたり、第1ないし第2段階はそれなりにカバーできても、突然の撤退、過度の介入による混乱を招いたケースもある。この意味で、地域リーダーを前もって決定、養成しておくことが不可欠である。したがって、極論すれば、避難所運営の成否は、災害以前にかかっているとと言える。

地域リーダーの候補。民生委員、子供会、地域の協議会、少年スポーツ団体等のリーダー。地域に拠点をもち、かつ地域密着型の活動をしているボランティア団体のリーダー。

2. 【第2段階：専門分化段階】

○期間

魚崎小学校の場合、ファミリー国立、松下電器労組ボランティアが入った2月初頭から撤退までのおよそ2カ月間。この期間は、災害の規模、各避難所の個別事情により左右されるだろう。しかし、外部ボランティアが超長期に機能することは困難であるから、長く見積もっても3カ月程度ではないか。

○主たるタスク

避難所運営の組織化・効率化

援助物資の搬入、仕分け、在庫管理

近隣避難所とのネットワーク形成

J-ネット

地域内ローラー作戦（地域内事情の把握、分析→対応）

独居老人調査とケア

高齢者、寝たきり老人、障害者の調査とケア

家屋被災状況調査（仮設住宅建設、住宅再建へ向けて）

店舗開店状況調査（被災者への情報提供、地域振興に向けて）

○組織体制上の特徴

第1段階で形成された地域型リーダーを中心とする本部の傘下に、専門分野別に特化した外来の組織ボランティアをタスクフォース（専門部隊）として置くことが重要。これにより、ボランティア組織のもつ専門性・組織力が生かされると同時に、外来であるがゆえの地域性の欠如が補われる。また、多くの個人ボランティアの対応に本部が直接に煩わされることがなくなる。

3. 【第3段階：地域定着段階】

○期間

魚崎小学校の場合、厳密に言えば、ファミリー国立、松下電器労組ボランティアが

組織的に活動を終え、被災者自身による運営委員会が正式発足した4月15日以降、避難所閉鎖となる8月27日まで。ただし、それ以前の2月3日から、以下に述べるような各種タスクの地域住民、地域団体への移譲、定着が段階的に図られている。

○主たるタスク

第2段階における各種タスクが基本的には継続する。つまり、避難所の日常生活の運営（衣食住の提供、環境の整備など）、地域内の高齢者、障害者のケア、仮設住宅建設へ向けての環境整備、仮設住宅への入居援助、生活支援などである。これに加え、復興へ向けた各種イベントの開催などが加わる。ただし、これらのすべてについて、被災者自身、または、被災地域内の既存団体に運営の主体が移行する点が第3段階の特徴である。

○組織体制上の特徴

外部ボランティアの動員は短期的には、打撃を受けた地域被災住民、機能麻痺に陥った地域団体を代替する重要な役割を果たす。しかし、被災者の精神的回復、経済的自立、地域社会の復興のためには、外部ボランティア（組織）は、地域に永続的に定着できるケースを除いて、段階的に撤退することが望ましい。

魚崎小学校の場合、避難所内の日々の運営は、松下電器労組のボランティアから、被災者自身が構成する運営委員会に移行した（4月15日から正式に）。地域内の老人介護は、国立ファミリーから福祉事務所、民生委員、保健所に移行した。

3 阪神・淡路大震災の体験を今後に生かすための10の提言——避難所の体制を中心に

以上の活動の概況や経過、3段階モデルを踏まえて、今回の経験を今後に生かすための提言を以下にまとめてみた。この提言は、魚崎小学校区での活動をベースに避難所のあり方を中心にまとめたものである。

提言1 避難所の機能を身の安全と当面の衣食住を確保する「一次機能」、生活復興を支援する「二次機能」に区別する。

今回の震災では、避難所が担うべき機能についても混乱が見られた。

一次機能が短期間の緊急避難機能であるのに対して、二次機能は生活復興支援機能であり、概ねライフラインの復旧から仮設住宅等の住居を確保するまでの相当の期間が想定される。避難生活を早期に解消するため、従来の一次機能に加えて、二次機能についても地域防災計画で想定しておく必要がある。

提言2 学校施設は避難所として利用されることを前提として、機能を十分発揮できるよう、施設の耐震・耐火性、収容能力、利便性を再検討する。

今回、多くの学校が避難所となったが、広さ、構造、設備などの面から考えても、これに替わるべき施設はなく、今後においても避難所としての役割は大きい。

このため、今回の震災で見られた問題点（①避難所の施設自体が大きな被害を受けた。②配置が適切でない。③収容能力を超えた人数が避難した。④ライフライン等の設備の不備など）の改善に向けて検討する必要がある。

また、学校は、教育機能の早期回復の観点から一次機能を基本とし、二次機能に対応する避難場所と二段構えで対応すべきである。

提言3 行政職員・教職員が出勤できない事態を想定した対応策を検討する。

今回の震災では行政職員・教職員自身も被災したことや、交通機関の途絶もあり、当初の2～3日間は出勤できない職員も多かった。

全職員がすぐに出勤できる態勢を整えることはもちろん重要であるが、初期段階の対応については職員が出勤できない事態も想定して、それに替わる体制を折り込んでおくことも必要である。

提言4 避難者中心の避難所運営のための組織づくりを支援する。

今回、避難所の運営については様々な形態が見られた（事例報告参照）が、避難者自身が組織化され、避難所運営の中心となって「1日も早く自立すること」を目標としてきたところでは立ち直りが早い傾向が見られた。

一次機能の段階は、行政職員等が中心となって運営すべきであるが、二次機能の段階では、避難者中心の避難所運営がなされるよう、組織づくりとその運営（活動）を支援することが大切である。

提言5 救援は「モノ」だけではない。

何らかのケアが必要な人の受入れ態勢を整備する。

高齢者、障害者、病人、幼児等、何らかのケアが必要な人々は災害時には弱い立場になることが多いが、今回これらの人の受入れ態勢が十分でなかった面も見られた。

今後、これらの人を受け入れられる①設備面（冷暖房設備、畳敷きの部屋など）、

②介護面（食事、保健、医療など）に配慮した整備に加えて、③心理面（心のケアなど）の機能を具備することも必要である。

提言 6 安否情報など、避難者の基礎的な情報を迅速に収集できる態勢・提供できるシステムを整備する。

今回の震災後、避難者の安否確認の問い合わせが各避難所や市に対して多くあった。それに十分に对应していくためには、各避難所での避難者の住所・氏名等の基礎的な情報の早期確認が必要であったが、混乱のなかで十分な対応ができない避難所もあった。

これらの情報は避難所でしか収集できないものであり、後々の対応に生かすためにも、迅速に情報を収集できる態勢、提供できるシステムを整備する必要がある。

提言 7 避難所の運営にはボランティアが不可欠であり、ボランティアをコーディネートするための態勢を整備する。

避難所には、避難者を支援するための仕事が多様な形で存在し、その対応には労力はもとより、技能、専門知識の提供など、ボランティアの存在が不可欠であった。

しかし、ボランティアへの対応が十分でなかった苦い経験から学び、効果的にボランティア活動が行えるようなコーディネート態勢の整備、人材の養成が必要である。

提言 8 救援物資は、①施設での「備蓄」より早期の「調達」
②被災地隣接地域で集積・仕分け後、避難所に配送
できるシステムづくりを目指す。
また、避難所の実情に応じた運営のため、義援金の一部が使えるような方策を検討する。

物資については「備蓄」の必要性が言われているが、数十年から百年というような周期での大災害への対応としては、非現実的で無駄な面が多い。「備蓄」は最小限にして、必要な物資の早期「調達」に重点をおく方が現実的な対応である。

また、全国各地から送られた救援物資は地域・品種に偏りが見られ、必要な物資が届かず、不要な物資は処分せざるを得ない状況もあった。このような無駄をなくすため、救援物資は被災地隣接地域で集積して仕分けを行ってから、必要物資を各避難所に配送するシステムを検討することが必要である。

今回は実物供与に止まったが、二次機能の段階では、避難所にもある程度の運営資

金が必要となるので、義援金の一部をそれに充てられるような方策も検討する必要がある。

提言9 地域コミュニティ活動を支援するなかで、災害時にもリーダーシップを発揮し得る人材を養成しておく。

今回、地域のコミュニティ活動のリーダーが避難所リーダーとなった場合に、円滑な運営が行えたケースが多かったが、このことは、日頃からのコミュニティ活動が災害時にも大きく役立つことを実証している。

今後、日頃の地域コミュニティ活動が活発に行える支援し、そのなかで災害時にもリーダーシップを発揮し得る人材を養成しておくことが重要である。

提言10 学校施設を地域のコミュニティセンターとして位置づけ、防災拠点としての機能も併せて整備する。

地域の中で学校ほど広く、堅固な建物があり、地域住民との関係が密である施設は他には見当たらない。

当面は、学校施設を利用したイベント等を通じて避難所に対する認識を高めておくとともに、将来的には、学校を地域に開かれたコミュニティセンターとして位置づけ、防災機能も併せて整備していくことが必要である。

第3章 ボランティア認知のプロセス——生活協同組合コープこうべの活動

コープこうべは自身が大きな被害を受けたうえ、神戸市との間で緊急時の物資確保協定を結んでいたところから、物資調達に追われる状況にあった。しかし、生協のもつイメージからボランティア希望者が組合員も含めあいつぐ状況にあり、これに後押しされる形で窓口を開き、ボランティアセンターを開いていった。

これらの経過を受け、すでに見たように供給と同じ程度に組合員を中心とするボランティア活動を位置づけるように、コープこうべは変わった。これに至るプロセスとその問題を見てみる。

1 震災被害 500億円——物資調達と被災者救援の間で

まず、コープこうべの自身直後の状況、ボランティア支援窓口の設置と問題点、コーディネートのあり方について見てみよう。

1. 神戸市との物資確保協定履行——満身創痍で物資調達へ

阪神大震災ではコープこうべも大きな被害を受けた。職員（パート、アルバイトも含め）本人の死亡が11人、家族の死亡 104人、組合員にも多数の犠牲者が出た。また、その倒壊で警備員が死亡した、本部ビルを始め店舗や工場など、12施設が全壊、半壊 6、重度の損傷も14施設にのぼっている。しかも、これら損壊施設の半分以上が、東灘区に集中している。激震の住吉周辺を本拠地に発展してきた歴史があるだけに、被害は店舗や商品はもとより、本部機能やコンピューターにまで及んだ。後日、被害総額は 500億円と発表されている。

そんな中で、私の勤務する住吉コープセンター（芦屋市、東灘区、灘区の組合員活動を推進する事務局）が入居しており、後に、ボランティアセンターの設立場所ともなる「コープこうべ生活文化センター」という建物も、“重度の損傷”と認定された。築後10年程のビルであったが、住吉川東側の国道2号線ぞいという位置では被災はまぬがれない。

しかし、周辺のコープこうべ関連施設は、軒並み倒壊して使えない。傷つきながらも「生活文化センター」は、震災当日から生協の緊急対策本部設置をはじめ、本部の仮の移転先として、経理部や商品部など、大勢の職員を受入れた。また、近隣住民の避難所として、翌日以降は遺体安置所として、ふだんの何倍もの人が出入りする場所となった。さらに、数日間はセンターの前庭で、柩の組み立てが行われた。職員は、その間をすり抜け、渋滞の2号線のたえ間ないサイレンの音を背に通用口へ急いだものである。重度損傷のこのビルをこんなにフル稼働させなければならない程、東灘区

のこの一帯の被害は目をおおばかりであった。

東灘区には（コープミニを除き）、シアヤリディングセンター甲南など8つの店舗があるが、うち3店舗は全壊、地震当日はわずかに岡本店と甲南店で店頭販売ができただけという有様であった。そんな中で、「こんなときこそ、食料品や日常生活用品を供給するのがコープの使命」と生協の総力を挙げて、物資の確保や店舗の再開に最大限の努力がなされた。さらに、コープこうべは神戸市と1980年から「緊急時における生活物資確保に関する協定」を結んでいたことから、震災直後（当日朝）から職員を市役所に派遣し、自治体への物資調達を開始した。

この点では、物不足のパニックや便乗値上げを最小限に押さえる役割を果たしたとして、マスコミからも評価されている。

ところが、供給面を支える人手が足りず、平時、福祉や文化などの組合員活動を担当していた職員（もともとこの分野の人数は少ないのだが）までもが、応援に回った。さらに、各店長も、店舗の正常化、施設、職員、商品の調整に追われ、それぞれの地域の組合員活動にまで目を向ける余裕はなかったのである。

また、電話がほとんど使えなくなり、生活文化センターの私のフロアでは、やっと回復した2本も、一刻を争う商品発注や店舗との連絡に独占された状態で、福祉担当者が受話器を握るチャンスはないに等しかった。

これら2つの理由、つまり、①ボランティアの申込みや依頼に対応できる（コーディネーター役）担当者がほとんどいなかったこと、②電話が使えなかったことが、震災直後のボランティア活動への取り組みを遅らせたという反省もある。

☆もちろん、組合員サイドではコープ委員同志の地域のつながり、助け合いの会奉仕会員、サークルのネットワークなど、だれに指示されることなく、地震当日から、ボランティアを始めたのであるが、それをコープが一つの波として組織するには、もうしばらくの時間を要したのである。

☆ この時期、いち早く、全国（県外）の生協からの応援が続々とやってきた。物資、トラック、人、と大きな力であったと思う。大規模災害の直後は、こういう組織的な＝命令系統を持った、何をするかという目的を持った、アゴアシ付、チームとしてまとまった人数＝活動が、即効かつ強力に機能するということを教えてくれた。

2. ニーズ待ちを凌えられず——ようやく1月26日に窓口

こうしている間にも、受話器を置いたほんの数秒の間ゲキをぬって、全国からボランティア志望の電話が入るようになってきた。各マスコミが震災の被害状況を流すと

同時に避難所などのボランティアの様子を報道しはじめたのである。しかし、後にも述べるが、震災後一週間目（23日）に、生活文化センターを訪れボランティアを申し出た大学生は「まだ受け入れる余裕はない」と断られている。

ところが、ついに1月26日には生活文化センター5階にボランティア支援窓口が設置されている。門前払いの一件から数日後のことである。それほど、この時期は、コープこうべはもとより、被災地全体が刻々と変化する先の見えない状況にあった。

区役所や主な避難所は泊まり込みボランティアでほぼ満杯であったことと、マスコミにコープがボランティア窓口を作ると発表したことから「ボランティアをしたい」という電話が殺到した。1月26日のボランティア支援窓口設置から、1週間で、300人近いボランティア登録申込みがあり、2月3日にはコープボランティア本部が設立されることとなる。この時点では、再開のメドの立たない文化活動担当職員も、ボランティア支援にまわり、（2月1日からは、本部全体が三木に移転）正職員6人、定時職員6人が配置された。この間2月1日には、ボランティアニュース1号が出され、A3紙1枚の簡単なものではあったが、毎日のように号が積み重ねられた。

第3号によると、2月2日現在のボランティア申込み239のうち活動110、依頼については申込み8、うち、活動4という数字が残っている。すぐにでも活動したいボランティア側の熱気の高まり、エネルギーが感じられる一方、依頼件数の少なさが、助けを必要とする人々がまだまだ自分からSOSを発信できる状態ではなかったことを示している。ボランティアの実働率はその後もずっと半分を超えることはなかった。

ここで反省すべきことは、第一にコーディネートの不足である。加えて、イメージネーションも不足していたと言わざるを得ない。今回、コープに申し込んだボランティアの特徴をあげると、①ボランティア経験がなく初めて⇒②被害が大きすぎて、何から手をつけたらいいか、わからない⇒③コープに行けば何かあるだろう、となるように思う。とりあえず、飛び込んでガムシャラにやってみるというタイプではなく、「コープがニーズを見つけて紹介してくれる。活動の選択肢が用意されている。休みたいときは交代できる。トラブルのときは処理してくれる」と考えた人が多かったのではないだろうか。中には、「研修を受けてから」とか「活動を見学してから登録するかどうか決める」という人もあったらしい。この特徴は、ボランティア精神の大小ではなく、行動様式が慎重ということである。しかも、家事のあい間の短時間でも役に立ちたいという層も多く、「有効にコーディネートされる」ことを望んでいたと思う。確かに“自発的”はボランティアの必須条件には違いないが、「コープだから」と申し込んだ人達の「ボランティア像」に少し想像をめぐらせば、「はい、登録は受け付けました。自分で探して活動を始めて下さい」とか、「朝10時までに事務所に集まって、その日のことを考えましょう」では実働につながらないことは、明らかである。

また、私自身を含めて、従来の「助け合い活動」（在宅福祉）のコーディネイト、つまり、ニーズがあってボランティアと結んでいくというパターンから、すぐには切り替えられなかったことも一因である。震災を前にしても「ニーズ待ち」をしていたのだ。このころの（2月前半）ボランティアニュースはさかんに「被災者のところへ出向き、何がしてほしいのか、話を聞け、できることを探せ」と呼びかけている。

3. 5つの方法——よいコーディネイトの方法は？

では、いったいどうすれば、早く活動に結びつけられたのだろうか。

①事務局を役割分担する（できればボランティアの手で）

- 登録受付 → グループ化につながるような聞き方、何ができるのかを聞く
- 面接研修 → ボランティアのルール、マナー、緊急連絡や報告義務
- 活動メニュー作り → 拘束時間の強弱などバリエーションつけて
- — — — — → コーディネイト

②ボランティア活動スタートまでには、必ず、事務局との面接、ミーティングをしておく。その効果はつぎのようなものだと思う。

- ・雰囲気をつかむ。仲間意識、活動ノウハウ、事務局との信頼関係ができれば、やり過ぎ・やりっぱなしを防ぎ、継続的な活動へつなげる。

③グループ化を急頭に置いて、事務局が動く。

（曜日・地域表など、大きな紙を貼り、記入していく。）

- ・曜日・時間帯・地域・希望の仕事内容など重なってグループ化、できればリーダーや連絡網作りに発展させる。

④地図やニュースをボランティアに配布し、ボランティアと事務局の相互連絡を容易にする。

- ・避難場所、フロ、店、交番、病院など被災者向情報はもとより、ボランティアの自宅、クリーン活動場所も入れた地図をボランティアに配布。
- ・活動報告式のニュースではなく、提案型に。スケジュール表（集合場所、持ち物など）、活動メニューをのせて、ボランティアへの情報としてのニュースの配布。

（共通の資料を持っていると話がしやすい。電話のリピートが省け、短時間で済む。被災地を総訪問して、地図の塗りつぶしに使える）

⑤コープの内部の他所属、地域内のボランティア団体に認知を得ておく。

- ・市民から見るとコープなら内部で通じているはずと、ボランティア関係の電話がいろいろな部門にかかる。トラブルを防ぐため。
- ・他団体とのネットワークが、緊急避難になったり、活動のヒントになったり、反面教師になったり。後で必ず役立つときがある。

以上の提案については、「初動期」にこんなのにのんびりしたことができるわけがない……という声が聞こえてきそうだが、パニックのときに即、これだけの準備ができなくても、意識していることが大事。登録受付や、個別対応のコーディネートに追われる中で、事務局が①～⑤のような作業にある程度時間をさく勇気があるかどうかで、1ヶ月後2ヶ月後の活動の広がりが大きく違う。

まして、事務所や事務経費、広報手段、職員などめぐまれた状況にあるコープでは、最初の種まきの段階がもう少ししていねいに行なえたのではないだろうか。ニーズ待ちではなく、ニーズキャッチ能力のある、また、多様な人々が参加できるプログラム開発のできる、ボランティアコーディネーターが必要で、専門職として養成されることを願う。

2 コープボランティアセンターの活動——住吉ボランティアセンターを中心に

やがて体制が少しずつ整っていき、2月24日には地域に根づいた継続的なボランティア活動の拠点となるべく、コープこうべのエリア内に8か所あるコープセンターごとにボランティアセンターが設立されることとなる。

1. ボランティアの目から——住吉ボランティアセンターの問題点

私の所属する住吉ボランティアセンターも登録ボランティア141人でスタートしたのである。それまで、ボランティア本部で行われていた、家の片付けや水くみなどの個別対応、たき出し、物資配布、避難所対応、クリーン活動などは続行しながら、3月～4月には復興イベントの手伝いがふえてゆく。

ここで、生活文化センター5Fを拠点に活動を展開した“ボランティア隊”を内側から見るため、2～3月の間リーダーのひとりであった垣尾大輔さん（当時甲南大3年）にボランティア側の気持ちを語ってもらった。

<レポート>

（第1期）

震災後、いったん県北部の実家に帰ったが、何かせずにはいられない気持ちで、1月23日神戸に来た。コープこうべの青少年活動の分野でサッカー指導をしていたので、生活文化センターに直行したが、「今はボランティア受入れどころではない」と断られた。しかたなく、すぐ近くの東灘区役所に行くと、すでにたくさんのボランティアがおり、バケツリレー式に物資搬入をしていたが、手が余っている状態だった。とりあえず、そこで一泊したが、もっと役

<問題点>

- ・ボランティアしたいが受入れ先が見つからない
- ・1週間目でもコープボランティア受入れ体制できず。

立ちたいと思って、翌日には、市役所まで歩き、唯一受入れてくれそうな、長田区役所に行くことに決めた。

行って間もなく、長田でもボランティア受入れを中止しだしたことを知り、周りにいた12名程でボランティア受入れのためのグループを作った。かろうじて、社協の理解が得られ、部屋と電話を借りてボランティア登録、腕章作り、避難所の地図作りなど事務局的な仕事を始めた。一方、外に出て活動しながらのニーズ探しも行ったが、このころは何よりも、“物資”（たとえば大人用のおむつ）が必要だった。役所には全国から救援物資が大量に送られてきたが先に管理ありきで、区外の倉庫にいったん納める方式、手続きをして出してもらうのが大変だった。また障害者の安否確認活動をしたいと申し出たが、この時点では名簿を渡してもらえなかった。役所の立場はわかるが、歯がゆくてたまらない思いだった。逆に、役所側からも、ボランティアの要求は代表がまとめて1日1回時間を決めて、言いに来てほしいという要請もあり、住民への対応に加えて、ボランティアの対応にも混乱を極めていたようだ。が、この要請が、ボランティアグループ間のミーティングを促進しリーダーやチームワーク作り、避難所事情やトラックの貸し借りなどの情報交換、役所との交渉力など活動の組み立てに役立った。

大学のレポートの期限がせまり、後ろ髪をひかれる思いで一旦実家に戻ったところ、1月31日コープから「ボランティアを組織するから、仕切ってくれないか」という電話があった。2月初、生活文化センターに出向くとすぐに担当職員に引き合わされた。すでに、5階には10人程のボランティアが来ていたが、初日か2日目という人ばかりで、活動は始まっていなかった。とりあえず、職員の指示で、同センター2階で行われていた罹災証明のお茶出し、トラック1台を使っただけの避難所回り、コーヒの炊き出しなどを始めた。しかし、長田で経験したボランティアの熱気や緊迫感がなく、コープの仲間にそのことを話すととても共感してもらった。

このころコープには、ボランティア登録が殺到し、ボラ

・ボランティア余剰と不足の調整できず。

〈初動〉

・受入れ先のボランティアへの理解度が活動を決める。

・ボランティアグループ立ち上げのための、

┌ 拠点探し
├ 事務局機能
└ ニーズ探し

・ボランティア活動の折り合い

┌ 物資の公共性
├ 配布の公平性
└ プライバシー

・ミーティング } の
・ネットワーク } 大切さ

・コープのボランティア立ち上げ

1/26受付窓口設置

職員からの

↓

2月、リーダースカウト活動指示

|| (2月前半)
ボランティア側からの盛り上がり欠ける。

・素人・学生のコーディネ

ンティア隊の拠点である生文センターにも平日30人、土・日には50人近くが訪れ対応するだけでも数時間を要した。こんな中、資格のある様な人が「医療関係で貢献したい」と来ても、学生の自分達にはコーディネートできなくて、困った。指示待ちの人も使いにくく、「～に行きましょうか?」「〇人で～に出ます」式の提案型のボランティアがすぐ活動につながっていった。だんだんに担当の職員は本部にある三木に引き上げていった。

ボランティアは横並びということで、毎夕、会議を行ない、ディスカッション形式で活動に関して、決定していったが、このやり方にはメリット・デメリットがはっきり出た。

<メリット>

- ・問題の共有化で、明らかに贅沢な要求や危険を伴うものを排除、個別対応の範囲や活動内容を共通理解できた。
- ・活動先で落ち込んで帰ってきても、ミーティングで活力を取り戻すことができた。

<デメリット>

- ・コープボランティアの過半数をしめる主婦層は夜のミーティング参加は無理、学生主導になりがちな上、主婦の望む2～3時間（自宅周辺）の活動コーディネートはむずかしく、離れてゆく結果になった。
- ・「だらだら話ししている時間があつたら、少しでも活動に出たら……」とか、「要領が悪い」という職員側の批判的な目。

また、言わば「コープ」の看板を背負っての活動だったことでも、大きく2つの問題点があった。まず、コープ側から「何でもできる顔をするな、コープの信頼を失う」と度々、釘をさされたこと。「主役はコープなのか、被災者なのか」とくやしがる仲間もいた。が、避難所などで、「コープのにいちゃん」と声をかけられたりすると、「信頼に答えよう」という気持ちに変わっていった。

もうひとつは、このころコープの内部組織や方針がめまぐるしく変わり、ボランティア隊に顔を出す職員ごとに言うことが違ったこと。2月後半には、宝塚～姫路まで、8

ネイト力の限界

- ・対応能力をこえるボランティアの殺到

- ・ボランティアの姿勢
→活動へつながるかどうか

- （専門）分野限定型
指示待ち型
提案（自発）型

- ・依頼の聞きっぱなしや安請あいの危険
- ・ボランティア団体の乱立で被災者に疲れ。

- ・ボランティア隊の大学の同好会的密室の雰囲気
○たばこや食べ物のしまつがルーズ

- ボランティア＝絶対正義のような物の言い方
○事務機器を借りるマナーが悪い。

↑

職員の反感を買う。

⇒スタート研修が不可欠

- ・「コープ」ボランティアだからやりやすいことやりにくいこと

- ・コープ内部の方針にボランティアが左右される
- ・せっかくできたグルー

つの地区にボランティアセンターを設置するから、ボランティア隊がそれぞれの立ち上げ中心になれと言われたが、地区をたずねてみると、登録ボランティアに“指示待ち”の印象が強く自分たちとは相いれないように思えた。地区の側からもかき回されては困ると受入れ拒否に近い態度が見てとれた。結局、ボランティア隊から地区への登録替えをしたものはわずかで、間際まで決まらなかった解散もコープから3月31日と言い渡された。

最後の一週間は思い切り盛り上がり、避難所中心の活動を「ドッジボール大会」「花のデリバリー」「歌集作り」に結集した。

解散後も、OB30人で“こむクラブ”というグループを作り、連絡網で活動メニューを提案、共感したメンバーが参加する方式で、仮設回りや連句集作りのボランティアを続けている。いちばんうれしいことは、メンバーそれぞれが、やりたい活動や団体を見つけていること。会って話すと刺激になるし、こむクラブそのものが新しいネットワークとして機能していきそうだ。

ブ解体の反発

・地区ボランティアセンターとの橋渡し役いない

・コープボランティア卒業

↓

・活動目標発見

↓

・OBネットワーク形成

↓

・新しい価値や生き方を
する市民。市民運動リー
ダーへの可能性。

2. ボランティアが事務局を仕切る——組合員の新しい顔

(第2期：2～3月)

ボランティア隊は1日30人前後が2か月間活動し、その役割を終えた。物資配給や避難所回り、家の片付けなど、ごく地道で、規模的にもそう大きな活動ではなかった。が、あの時期にともかく、動いたことを評価し、人材を効率的に生かしきれなかった原因を検証して、今後に役立てることが大切だと思う。

これと平行して、2月24日には同じ建物の2Fに芦屋・東灘・灘のボランティアの拠点として住吉ボランティアセンターが誕生した。当初は、被災地外からの善意の申し出の受け皿となることに忙殺された。大量に送られてくる救援物資の配布手配、入浴送迎のサービスに参加してくれる高齢者探しと介助者・送迎順路（渋滞の中での）セッティング、などである。この受け皿の悲しい位の貧弱さは、外からは想像もつかないことだったかも知れないが、災害時、必要とする人の手（専任職員はなし、兼務が2人）に物やサービスが届くための調整は、今後の大きな課題である。

そのため、本来は立ち上げと同時に整備すべき、事務局体制、ルール作り、チーム作り、スタート研修など、内部にむかってのことはできないままの見切り発車であった。日々ふくらんでいく登録者に反して、人材の活用は進まず、個別対応を依頼する

ボランティアの顔ぶれも限定されていた。そんな中にも、クリーン活動などをくり返すうち、震災をきっかけに、ボランティアに足を踏み入れた人、つまり組合員活動の新しい顔が見え始めた。個人として自立した行動のできる主婦、学生、20～40才代の男性（夫と呼ばれる層）、生協職員自身などで、これは大きな財産だと思う。

しかし、この困難な時期、生協内部の組織や方針が何度も変わった上、住吉V Cも組織総括部長が責任者という以外、担当職員も定まらなかった。どうにか、立ち上げ期が乗り切れたのは、ほとんど毎日、事務局として詰めて下さったある組合員さんの力に負うところが大きい。以前からの福祉活動の経験がものを言い、過不足のない動きができたのであるが、やはり、「対象者のある活動を実際に！」と思いながらの協力だったらしく、やがて、仮設住宅訪問に移行して行かれ、1年を経た今も活動をリードする存在である。

この第2期に、絶対不可欠なのが、リーダー役、事務局（日替わり電話番でなく）コーディネーター役（いつも連絡がつく形での存在）と、その人達の「せっかくの登録者を1人でも多く活動につなげよう」とするどん欲さである。これらが住吉ボランティアセンターにおおいに不足していたと思う。

3. 絶えず初心にもどる——友愛訪問グループの成長

（第3期：3月～）

復興イベントを経て、本当の意味でのボランティア活動、つまり自主性や継続性の備わった活動としては、仮設住宅の友愛訪問グループの成長があげられる。4月に2度の学習会と体験実習を経てできた5つのグループはしっかり根をおろして、ますますさかんである。訪問をはじめたばかりのころは、住民の相談に何一つ応えられない歯がゆさ、多くの団体が仮設に押しかけて、迷惑なのではないかという悩みがあったり、秋には、もう仮設ごとのコミュニティーに任せる時期だという引き上げの声が出たりした。が、それぞれミーティングのたびに初心に戻ることで目的を確認しあい、震災1年を迎えて、「今から仮設に残る人こそ訪問が必要」と強化を誓いあった。

同じ顔が、毎週たずねることで、住民の信用を得て、やっとこのごろ心のうちにたまったものを聞かせてもらえるようになったそうである。その実感が、ボランティアひとりひとりに自信をもたらし、何度かの荒波を乗り越えたことで、グループをボランティア・センターからある程度、自立した存在に成長させた。（95. 5 発足時27名→96. 2 41名）

また、仮設住宅のふれあいセンターでのイベント活動も活発である。体操や編み物、合唱などの講習会や、コンサートなどは、震災前からの組合員活動の豊富な人材の上に、震災後の特技ボランティアを加えて、住民からもボランティア側からも好評である。

4. 95年秋に転機が——活動報告から活動提案へ

ふり返れば昨年秋ごろ、大きな波が来たと思う。

①街が落ちついて来て、ボランティアへの依頼が激減、被災者自立のためにと、ボランティア引き上げ論がさかんに出た。

②友愛訪問もイベントもボランティアが勝手に押しかけての自己満足にすぎないのではという疑問。

③コープボランティアは自身も被災者であり、夏をこして疲れの出る時期。

ということで、やめたいと言いだす人が、続出したのである。「自主性を大事にするボランティアなのだから、やめたい人はやめればいい……」とは、立ち上げ時の種まき不足を自覚しているだけに、つき離せない。そこで、次のような努力を試みた。

①毎月のニュースを「先月の活動報告型」から「今月のスケジュール提案、ボランティア募集型」に変える。

②イベント実行委員会、友愛訪問、事務局、ニュース班などグループ別ミーティングをまめに行う。

③震災前から何年も活動が続けているコープのボランティアサークル（くらしの助け合いの会、ふれあい食事の会、点訳、人形劇、チャリティ用手芸品作りなど）を見学、いろいろな形の活動を知ってもらう。

結果的に有効だったと思う。しばらく活動を再開したり、施設訪問の新しいグループが誕生したり、“雨降って地固まる”であった。

現時点での事務局（職員）の問題点も挙げておきたい。

●事業面での繁忙期は、ボランティアセンター担当者も店舗応援に回されてしまう。年末年始にかけては、2週間以上、ボランティアセンターはルス（主婦の事務局ボランティアも休んでしまった）、ニュースも1月号は出せず。

●他生協や各種団体からボランティア活動の受け皿になってほしいとの依頼が多い。コープの組織力を見込んでのことで、協力は惜しまないのであるが、企画や主要スタッフを持ち込んでくれる手軽さから、この相乗りイベント増加の傾向にある。何かイベントをするたびに、会場費と、動員と受付だけが、うちのボランティアセンターで、主役はよその人……というのでは、やりがいにつながらない。地元の活用こそボランティアセンターの使命ではないか。

以上のような活動を通じて、グループ化、ミーティング、情報提供、メニュー開発、他団体とのネットワークや生協内外での認知など、活動条件は整いつつある。さらに、面接にかわる手段として、昨年来にアンケートを行い、活動継続の意思、可能時間と範囲、参加希望メニューなどを調査した。幸い登録者 441名のうち、330名から「継

続する」と回答があり、大いに勇気づけられた。

設立からちょうど1年、初動のめざましい活躍や起動力には欠けていたコーポランティアだが、カメの歩みを確実につづけている。